1988

茂内遺跡群

茂内口遺跡

長野県佐久市香坂茂内口遺跡発掘調査報告書

昭和63年3月

長野県佐久市教育委員会

例　　言

1　本書は、昭和61年10月13日～昭和61年11月28日にわたって発掘調査した長野県佐久市大字香坂字茂内口に所在する茂内遺跡群茂内口遺跡の調査報告書である。

2　本調査は、佐久市教育委員会が実施した。

3　本調査は、林幸彦を担当者とし、佐久考古学会有志を調査員として、地元他多数の方々の協力を得て実施した。

4　本書に挿入した遺構の実測図作成には、佐々木宗昭・羽毛田卓也・井出百合子・堺益子・内藤治伸・臼田俊保があたり、遺物の実測図作成は、羽毛田・井出・堺・市川香里・臼田が担当した。また遺構及び土器のトレースは、市川が行い、石器のトレースを羽毛田が行った。掲載した写真は、佐々木・羽毛田が撮影した。

5　本書の執筆・編集は、羽毛田が行い、林が校閲した。

6　本書の資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

7　発掘調査にあたり、御指導・御協力をいただいた方々に、記して厚くお礼申し上げます。
（順不同、敬称略）
白倉盛男、笹沢浩、神村透、桐原健、前原豊、川島雅人、丸山敏一郎、臼田武正、寺島俊郎、金井塚良一、関川尚功、花岡弘、堤隆、川上元、田中正二郎、木下亘、畠山俊彦、高村博文、福島邦男、羽毛田伸博、藤沢平治、島田恵子、森泉かよ子、井出正義、岡村渉、上村安生、由井茂也、森島稔、児玉卓文、黒岩忠男、塩入秀敏、百瀬長秀、市沢英利、小平和夫、竹内稔、沢田正昭、肥塚隆保、宮下健司、郷道哲章、三石宗一、小山岳夫、新井真博、小坂井孝修、村山好文、矢島宏雄、佐藤信之、山根洋子、矢口忠良、神沢昌二郎、直井雅尚、熊谷康治、高桑俊雄、関沢聡、小林康雄、長崎元広、高林重水、鵜飼幸雄、石崎俊哉、山下誠一、小林正春、桜井弘人、諏訪間順、諏訪間伸、鳥居亮、片山徹、佐合英治、掘田雄二、西沢浩、坂井美嗣、翠川泰弘、小林真寿、志村哲、古郡正志、小島純一、清野利明、田村孝、近藤尚義

凡　　例

1　遺構の略称

H→平安時代住居址、F→平安時代掘立柱建物址、D→土坑

2　遺構・遺物の縮尺は原則として次のとおりであり、スケールを付した。

1）遺構　住居址→1/80、土坑→1/60、カマド→1/30、掘立柱建物址→1/60

2）遺物　須恵器・土師器→1/4、鉄製品・石製品→1/6～2/3

3　挿図中におけるスクリーントーンは下記のものをあらわす。

1）遺構　断面→斜線、カマド・焼土→点

2）遺物　須恵器断面→点、内面黒色研磨→点

4　遺構の海抜標高は、各遺構ごとに水糸ライン上に水糸標高として明記した。

5　重複遺構は、上端のみを実線で表示し、遺構内の攪乱は細い実線で表示した。

6　写真図版中の遺物の縮尺は、原則として挿図縮尺と同一にした。

7　写真図版中の番号は、挿図番号と対応する。遺物番号は簡略化し、例えば、第10図1は10—1とした。

8　各一覧表の数値について、不明は—、現存値は〈　〉、推定値は（　）とした。

9　遺物の実測は、第三角法を用いたが、適宜第三角法の応用で作図したものもある。

10　遺物胎土の色調は、1970『新版標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務所監修・財団法人日本色彩研究所色票監修の表示に基づいて示した。

11　挿図中の略記号は次のとおりである。P→ピット、S→石、断面図中のP→土器、T→木製品・木材。

本 文 目 次

例言

凡例

本文目次

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

1　調査に至る動機……1

2　調査の概要……2

3　調査日誌……2

4　発掘調査の方法……3

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境……4

第Ⅲ章　層序……7

第Ⅳ章　遺構と遺物

1　住居址

1）H1号住居址 ……8

2）H2号住居址 ……17

3）H3号住居址 ……20

2　掘立柱建物址

1）F1号掘立柱建物址 ……37

2）F2号掘立柱建物址 ……38

3）F3号掘立柱建物址 ……38

3　土坑

1）D1号土坑 ……39

2）D2号土坑 ……41

3）D3号土坑 ……41

4）D4号土坑 ……42

5）D5号土坑 ……42

6）D6号土坑 ……42

4　特殊遺構

1）第1号特殊遺構……42

5　縄文時代の遺物

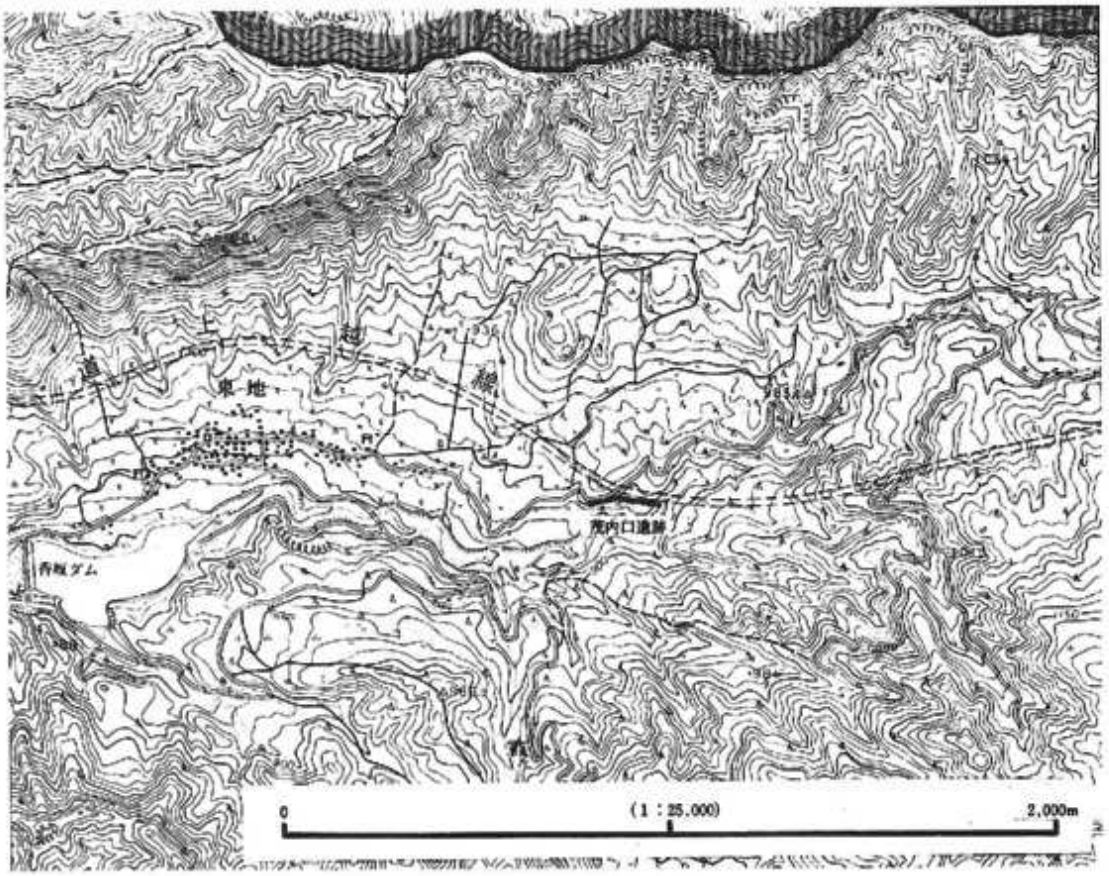
1）A区集中分布地区……44
6　グリッドおよび表採
1）調査地A区……51
2）調査地B区……57
第V章　総括
1　遺構……58
2　遺物……58
引用参考文献

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

1　調査に至る動機

茂内遺跡群は、佐久市大字香坂東地に所在し、香坂川・茂内川の浸蝕による標高880m～950mの台地上に点在する。茂内口遺跡は、本遺跡群の西端、香坂川との比高40m内外の小台地上に位置する。

今回、佐久市建設部が行う高速道関連市道八風山線改良工事事業に伴い、同建設部と佐久市教育委員会とで協議の結果、本遺跡の破壊を余儀なくされ、緊急に記録保存する必要が生じた。そこで佐久市教育委員会が主体となって発掘調査をする運びとなった。　（事務局）



第1図　茂内遺跡群茂内口遺跡位置図

2　調査の概要

遺跡名　　茂内遺跡群茂内口遺跡

所在地　　長野県佐久市大字香坂字茂内口198・209・211、樽ヶ沢212番地他

発掘期間　昭和61年10月13日～昭和61年11月28日

整理期間　昭和61年11月４日～昭和63年３月31日

調査団の構成

〔事務局〕

教育長　　大井昭二

教育次長　　柳沢昇一

社会教育課長　　木内捷

社会教育係長　　関本功（昭和62年３月退任）

　　小平実（昭和62年４月就任）

社会教育係　　白石賢次、林幸彦、高橋和敬、荻原一馬、羽毛田卓也

社会教育指導員　小林文子（昭和62年３月退任）、根津恵美（昭和63年１月退任）

　　三石和子（昭和63年２月就任）

〔調査団〕

調査担当　林幸彦

調査主任　佐々木宗昭、羽毛田卓也

調査員　井上行雄、大井今朝太

調査補助員　井出百合子、大井恵美子、大井和子、堺益子、高杉昌子、橋詰勝子、橋詰信子

参加者　浅沼ノブ江、市川香里、臼田俊保、高地正雄、高木久江、高橋純子、田中夏江、内藤治伸、並木ことみ、橋詰けさよ、細菅ミスズ、山崎平八郎、和久井義雄、渡辺久美子

3　発掘調査日誌

○昭和61年10月13日

午前中、調査区域の確認と打ち合せを行う。テント設営。機材搬入。

○10月13日～14日

トレンチ掘下げ。

○10月29日～30日

下草刈りと伐採を行なう。

○10月29日～11月４日

重機による表土剥ぎ。

○10月29日～11月11日

遺構確認精査を行う。

○11月10日

グリッドの杭打を行う。遺構の掘り下げを開始する。

○11月10日～11月28日

遺構の掘り下げ、実測図の作成、写真撮影を行う。

○12月１日

整理作業を開始する。

○昭和61年12月１日～昭和63年２月12日

図面修正、土器洗い、遺物註記、遺物復元、遺物実測等を行う。

○昭和62年４月１日～昭和63年２月29日

遺構・遺物のトレースを行う。

○昭和63年１月20日～３月

原稿執筆・編集作業を行う。

4　発掘調査の方法

本遺跡の調査を実施するにあたり、基本的な調査方法を次のような確認事項をもって実施した。

1　調査はグリッド方式で行う。発掘区全体を５m×５mの方眼に組み、東西ラインを数列とし、東より１・２・３……、南北ラインは北からあ・い・う……の順で番号をつけ、各グリッドの北東交点をそのグリッド名とした。

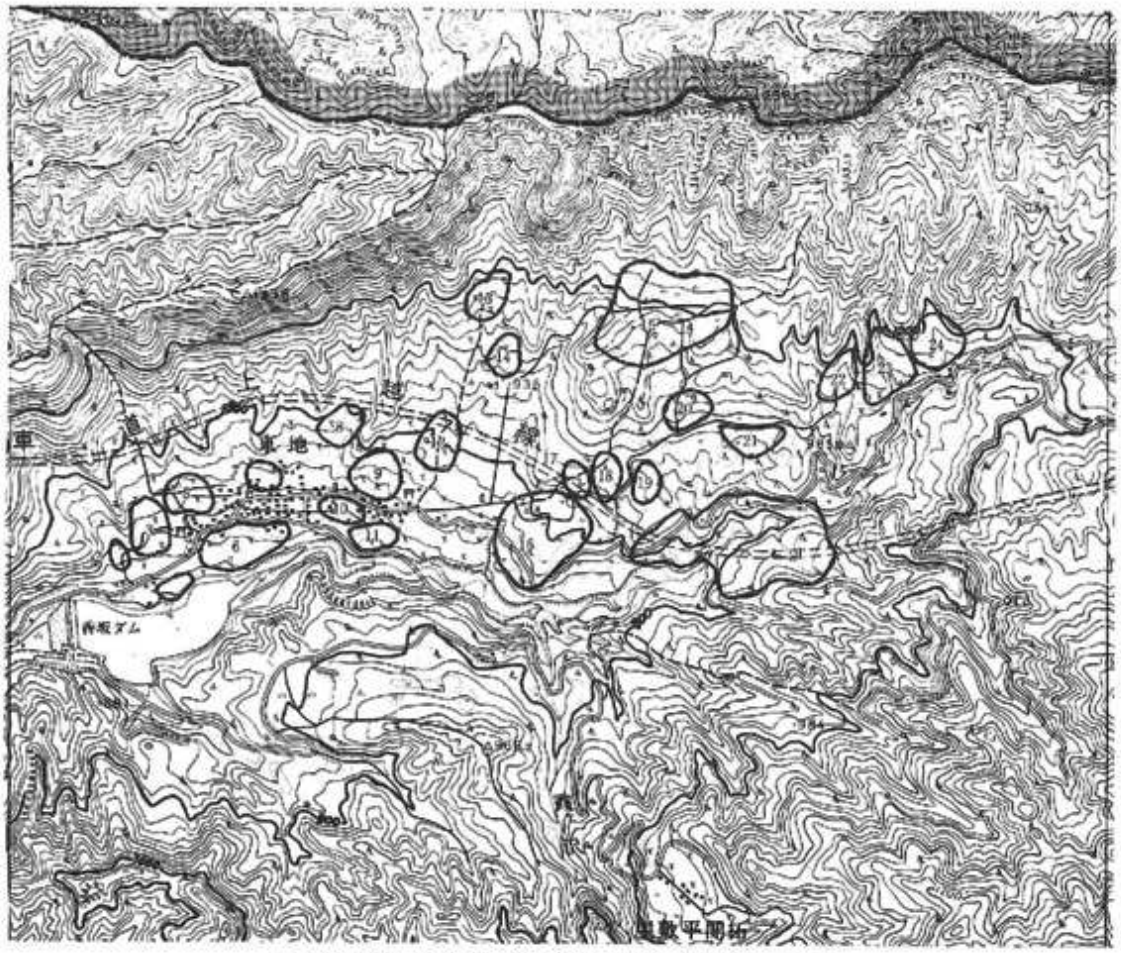
2　住居址は原則として４区に分割し、その東西ライン・南北ラインで土層セレクションを実測した。

3　土坑及びカマドは、原則として、二分割して調査を行った。

第II章　遺跡の位置と環境

茂内遺跡群は、佐久市大字香坂に所在する香坂ダムの東方1.5km、標高900m内外の小台地上に位置する。今回は香坂川の北側の茂内口遺跡と香坂川南東の樽ケ沢遺跡について調査を行った。なお樽ケ沢遺跡については、今回、緩やかな斜面に６本のトレンチを入れたが、遺構等を確認することはできなかった。本遺跡群は、北東に八風山（1315.2m）、南東に寄石山（1334.9m）と明巌山（1127m）、北西に閼伽流山（1009m）を臨み、八風山麓の比較的なだらかな傾斜が香坂川に向かって南傾する台地と、寄石山麓の傾斜が香坂川に向かって北傾する台地上に位置する。この小台地は、主に香坂川と茂内川の浸蝕によってできたものと考えられ、段丘面を形成している場所もある。

香坂川北側の南斜面には、西祢ぶた遺跡（昭和62年度一部調査）・東祢ぶた遺跡・淡淵遺跡（昭



第２図　周辺遺跡分布図（１：25,000国土地理院地形図による）

第1表　周辺遺跡一覧表

No.	佐分No.	遺跡名	所在地	立地	時代						備考
					縄	弥	古	奈	平	中	
1	554	茂内遺跡群	香坂字茂内口・樽ヶ沢他	台地	○				○		今回一部調査
2	146	西祢ぶた遺跡	香坂字西祢ぶた	〃	○				○		S62年度調査
3	147	東祢ぶた遺跡	香坂字東祢ぶた	〃	○				○		
4	154	淡淵遺跡	香坂字淡淵	段丘	○				○		S61年度調査
5	148	城の口遺跡	香坂字城の口	台地	○				○		
6	155	屋敷前遺跡	香坂字屋敷前・材木	段丘	○	○			○		S61年度調査
7	149	裏林遺跡	香坂字裏林	台地	○				○		
8	150	東林遺跡	香坂字東林	〃	○				○		
9	151	東山神遺跡	香坂字東山神	〃	○				○		
10	156	小屋場遺跡	香坂字小屋場	〃	○				○		
11	157	西片ケ上遺跡	香坂字西片ケ上	段丘	○						S61年度調査
12	152	鶏ヲネ遺跡	香坂字鶏ヲネ	山麓	○						
13	153	鶏ヲネ北遺跡	香坂字鶏ヲネ北	〃	○				○		
14	158	仙太郎遺跡	香坂字仙太郎	台地	○				○		
15	159	五斗代遺跡群	香坂字五斗代・上岩合地他	山麓	○						
16	168	曲尾遺跡	香坂字曲尾	台地	○				○		S61・62年度調査
17	167	吹付遺跡	香坂字吹付	〃	○						
18	165	木戸平A遺跡	香坂字木戸平	〃	○				○		
19	166	木戸平B遺跡	香坂字木戸平	〃	○	○					
20	163	東木戸平A遺跡	香坂字東木戸平	〃	○				○		
21	164	東木戸平B遺跡	香坂字東木戸平	〃	○				○		
22	160	五斗代B遺跡	香坂字五斗代	山麓	○						S55年度調査
23	161	兵士山遺跡	香坂字兵士山	〃	○				○		S54年度調査
24	162	雨原B遺跡	香坂字雨原	〃	○				○		

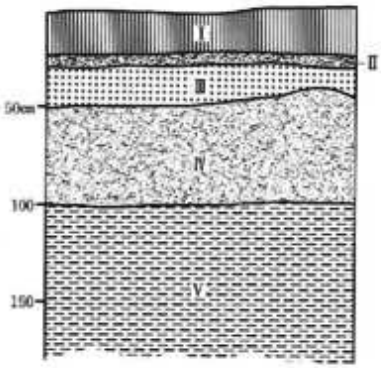
和61年度一部調査）・城の口遺跡・屋敷前遺跡（昭和61年度一部調査）・裏林遺跡・東林遺跡・東山神遺跡・小屋場遺跡・西片ケ上遺跡（昭和61年度一部調査）・鶏ヲネ遺跡・鶏ヲネ北遺跡・仙太郎遺跡・五斗代遺跡群・曲尾遺跡（昭和61・62年度一部調査）・吹付遺跡・木戸平A遺跡・木戸平B遺跡・東木戸平A遺跡・東木戸平B遺跡・五斗代B遺跡（昭和55年度調査）・兵士山遺跡（昭和54年度調査）・雨原B遺跡・茂内遺跡群など数多くの遺跡が密集している。それらは主として縄文時代と平安時代の遺跡である。

兵士山遺跡では昭和54年度の調査で平安時代の住居址（1軒）、五斗代B遺跡では昭和55年度の調査で縄文早期から中期の土器・石器と礫群が検出されている。昭和61年度の調査では、屋敷前遺跡で時代不明の土坑6基、西片ケ上遺跡で縄文時代後期の敷石住居址1軒と土坑が7基、曲尾I遺跡では縄文時代中期の土坑1基とその他7基、曲尾III遺跡では平安時代の住居址1軒と土坑9基、礫群が1カ所検出されている。昭和62年度の調査では、曲尾II遺跡で土坑、西祢ぶた遺跡で平安時代の住居址1軒と土坑が2基検出されている。また今年度、長野県埋蔵文化財調査センターによって、西祢ぶた遺跡（平安時代の住居址・掘立柱建物址）・東祢ぶた遺跡（縄文時代の住居址）・城の口遺跡・干草場遺跡（近世墳墓と思われる塚）・西林遺跡の発掘調査が行われている。

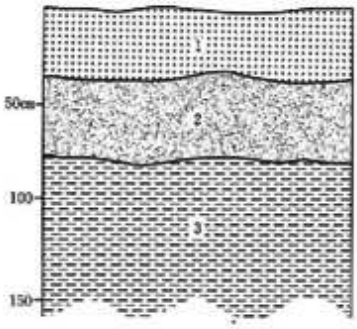
第2図中の実線の細い方は、900m及び1000mの等高線である。前述の香坂東地の遺跡群は、標高850m～1000mの香坂川より北側の南斜面（茂内遺跡群のみ香坂川をはさむ北西斜面上）に点在することが窺われる。現在の東地の集落も全てこの南斜面上に点在している。なお茂内口遺跡から東へ2㎞へ行くと矢川峠が存在する。標高は1160m内外で、下りながら群馬県の平野部へと続く道が存在する。

さて、平安時代の人々がなぜこのような山間部に移り住んだのか、どのような生活をしていたのか、これが今後の課題であろう。

第Ⅲ章　層序



第３図　茂内口遺跡A区基本層序



第４図　茂内口遺跡B区基本層序

茂内口遺跡一帯は山林地帯であるが、今回の調査対象地は山林部分のB区と耕作地部分のA区に分けられる。

A区第Ⅰ層は黒褐色の水田耕作土で、第Ⅱ層は鉄分を多く含む暗褐色土で、水田下層の床土と考えられる。第Ⅲ層は粘性が弱く、ローム粒子を少量含む黒褐色土である。第Ⅳ層は粘性弱く、ローム粒子を多量に、パミス小を微量含む褐色土である。第Ⅴ層はパミスを多量に含むロームで、褐色土である。

B区第Ⅰ層は粘性が弱く、ローム粒子とパミス小を微量含む黒褐色土である。第２層は粘性が弱く、ローム粒子を少量、パミス小を微量含む黒褐色土である。第３層はパミスを多量に含むロームで褐色土である。

以上が茂内口遺跡A区・B区の基本層序である。A区の第Ⅰ層と第Ⅱ層は耕作の影響下に成立した土層で、A区第Ⅲ層はB区第１層に、A区第Ⅳ層はB区第２層に、A区第Ⅴ層はB区第３層に比定されると考えられる。

第Ⅳ章　遺構と遺物

1　住居址

1）H1号住居址

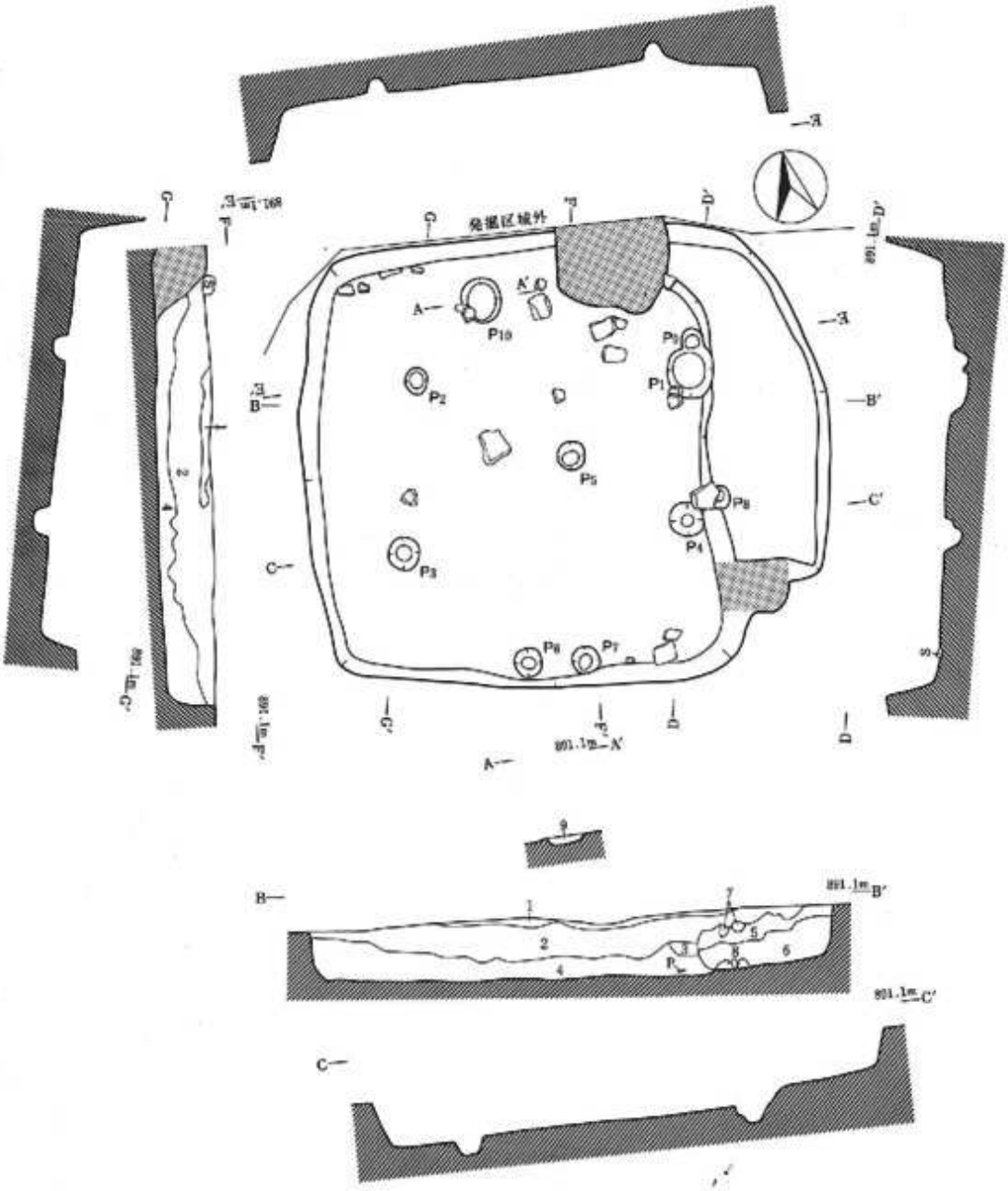
H1号住居址は、調査地A区の西側、さ・し－3・4グリッド内に位置し、A区全体層序第Ⅴ層上において検出された。

平面形態は、南北502cm、東西582cmの隅丸方形を呈している。主軸方位はN－14°－Eを指す。

覆土は8層に分割された。第1層はパミス小とローム粒子を多く含むにぶい黄褐色土、第2層は炭化材と炭化粒子を少量、パミス小を微量含む黒色土、第3層は炭化材と炭化粒子・パミス小を少量、ローム粒子を多く含む褐色土、第4層は炭化粒子とパミス小を少量含む暗褐色土、第5層はローム粒子を多量に、炭化粒子を微量、パミス小～中を少量含む褐色土、第6層はローム粒子を少量、炭化粒子を微量含むにぶい黄褐色土、第7層はローム粒子を少量含む黒褐色土、第8層はローム粒子を多量に含む褐色土である。第1・2・4層は本住居址に伴う整合層と考えられるが、第3層は別として、第5層以下・第6・7・8層は住居址覆土に対して不整合であり、第1層下で別遺構との重複の可能性もある。

確認面からの壁高は32～55.5cmを測る。壁体は黄褐色ローム層を利用し、平滑で堅固である。床面は平坦で東側にテラスを有する。テラス部は別遺構の可能性があるが、ピット及び旧カマドとの関連より本住居址に伴うものと認識した。床及びテラス部に貼床は認められなかったが、緻密で固くしまっている。なお床面積は18.38m²、テラス部3.53m²で、総面積21.91m²を測る。周溝は認められなかった。

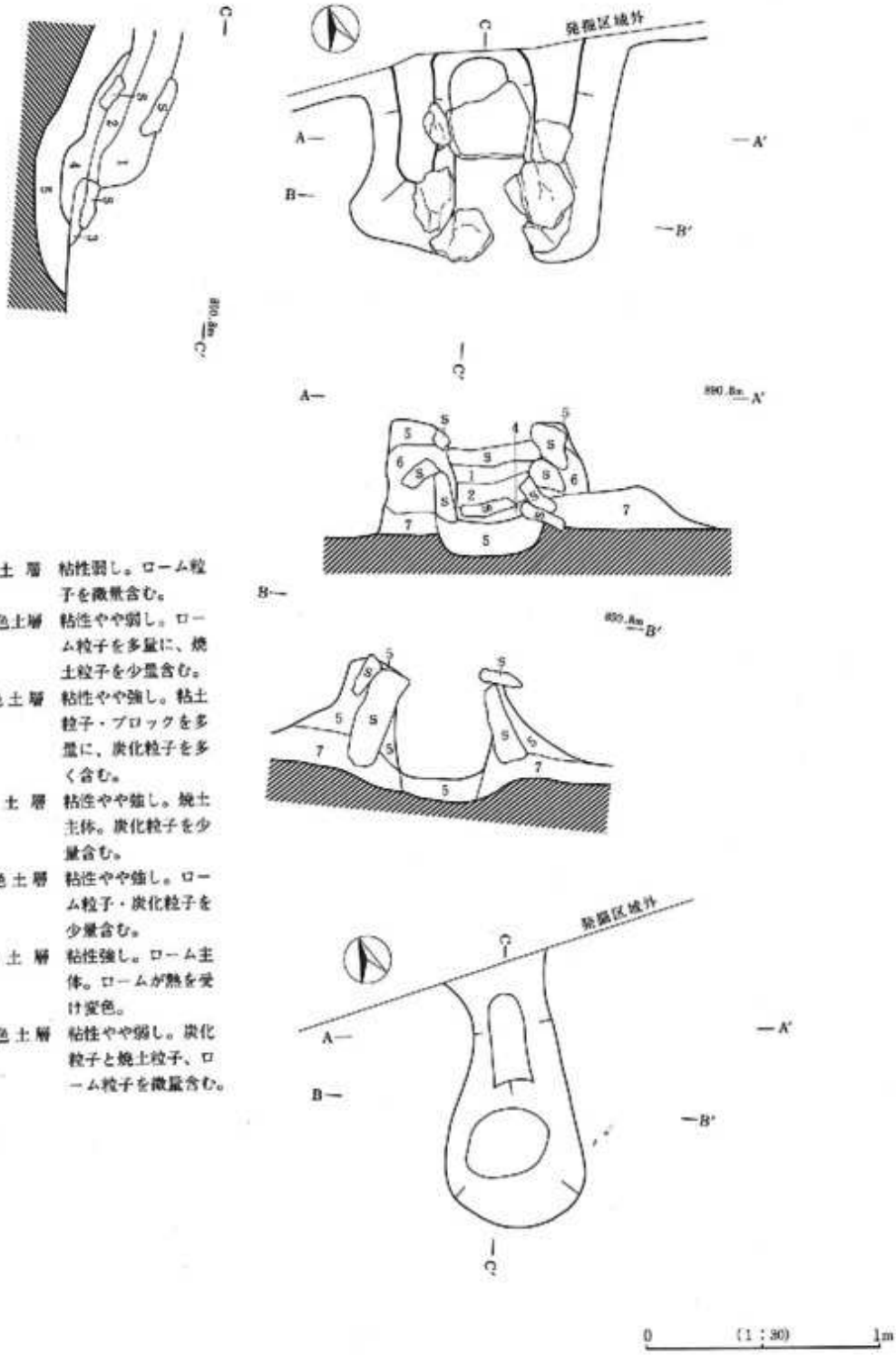
ピットは、主柱穴4個（P_1～P_4）・入口施設に伴うもの2個（P_6・P_7）・補助柱穴2個（P_8・P_9）・貯蔵穴1個（P_{10}）・その他1個（P_5）の計10個が確認された。P_1は径50cm×54cmで深さ17cm、P_2は径30cm×26cmで深さ15cm、P_3は径36cm×33cmで深さ18cm、P_4は径37cm×36cmで深さ18cmを測る。以上が主柱穴と考えられ、南北間が短く、東西間が長くなっている。P_5は径30cm×31cmで深さ31cmを測る。補助的な柱よりも主柱の可能性が強い。P_8は径22cm×24cmで深さ24.5cm、P_9は径23cm×25cmで深さ17cmを測る。以上は補助的な柱穴と考えられる。P_6は径32cm×31cmで深さ18cm、P_7は径30cm×31cmで深さ18cmを測る。以上は入口施設に伴うピットと考えられる。P_{10}は径45cm×49cmで深さ16cm内外を測り、貯蔵穴と考えられる。覆土は焼土粒子と炭化粒子、粘土粒子



1　にぶい黄褐色土層　粘性弱し。パミス小とローム粒子多く含む。
2　黒　色　土　層　粘性強し。炭化材と炭化粒子を少量、パミス小を微量含む。
3　褐　色　土　層　粘性やや強し。炭化材・炭化粒子・パミス小を少量、ローム粒子多く含む。
4　暗 褐 色 土 層　粘性やや強し。炭化粒子とパミス小を少量含む。
5　褐　色　土　層　粘性弱し。ローム粒子多量に、炭化粒子微量に、パミス小～中を少量含む。
6　にぶい黄褐色土層　粘性やや弱し。ローム粒子少量、炭化粒子微量含む。
7　黒 褐 色 土 層　粘性弱し。ローム粒子少量含む。
8　褐　色　土　層　粘性やや強し。ローム粒子多量に含む。
9　にぶい褐色土層　粘性強し。焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子を少量含む。

0　(1：80)　2m

第5図　H1号住居址実測図



1 黒色土層　粘性弱し。ローム粒子を微量含む。

2 明赤褐色土層　粘性やや弱し。ローム粒子を多量に、焼土粒子を少量含む。

3 灰褐色土層　粘性やや強し。粘土粒子・ブロックを多量に、炭化粒子を多く含む。

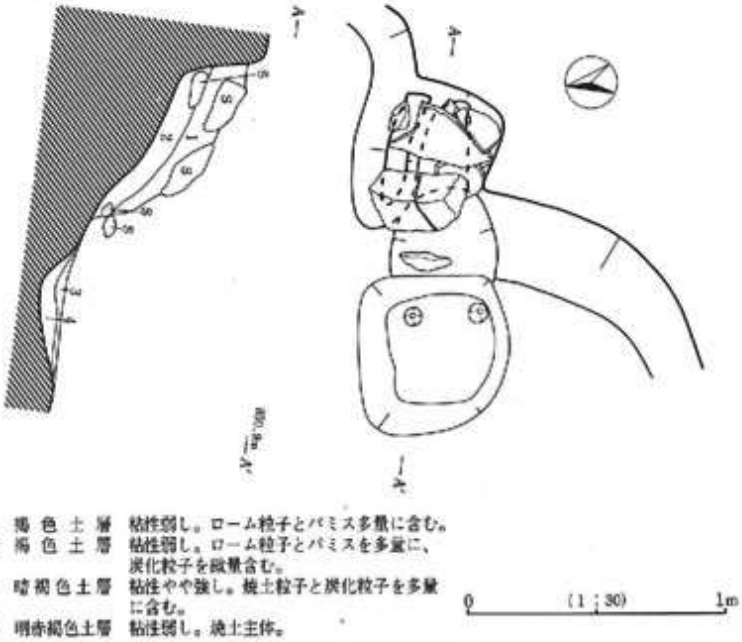
4 赤色土層　粘性やや強し。焼土主体。炭化粒子を少量含む。

5 黒褐色土層　粘性やや強し。ローム粒子・炭化粒子を少量含む。

6 橙色土層　粘性強し。ローム主体。ロームが熱を受け変色。

7 黒褐色土層　粘性やや弱し。炭化粒子と焼土粒子、ローム粒子を微量含む。

第6図　H1号住居址1号カマド実測図

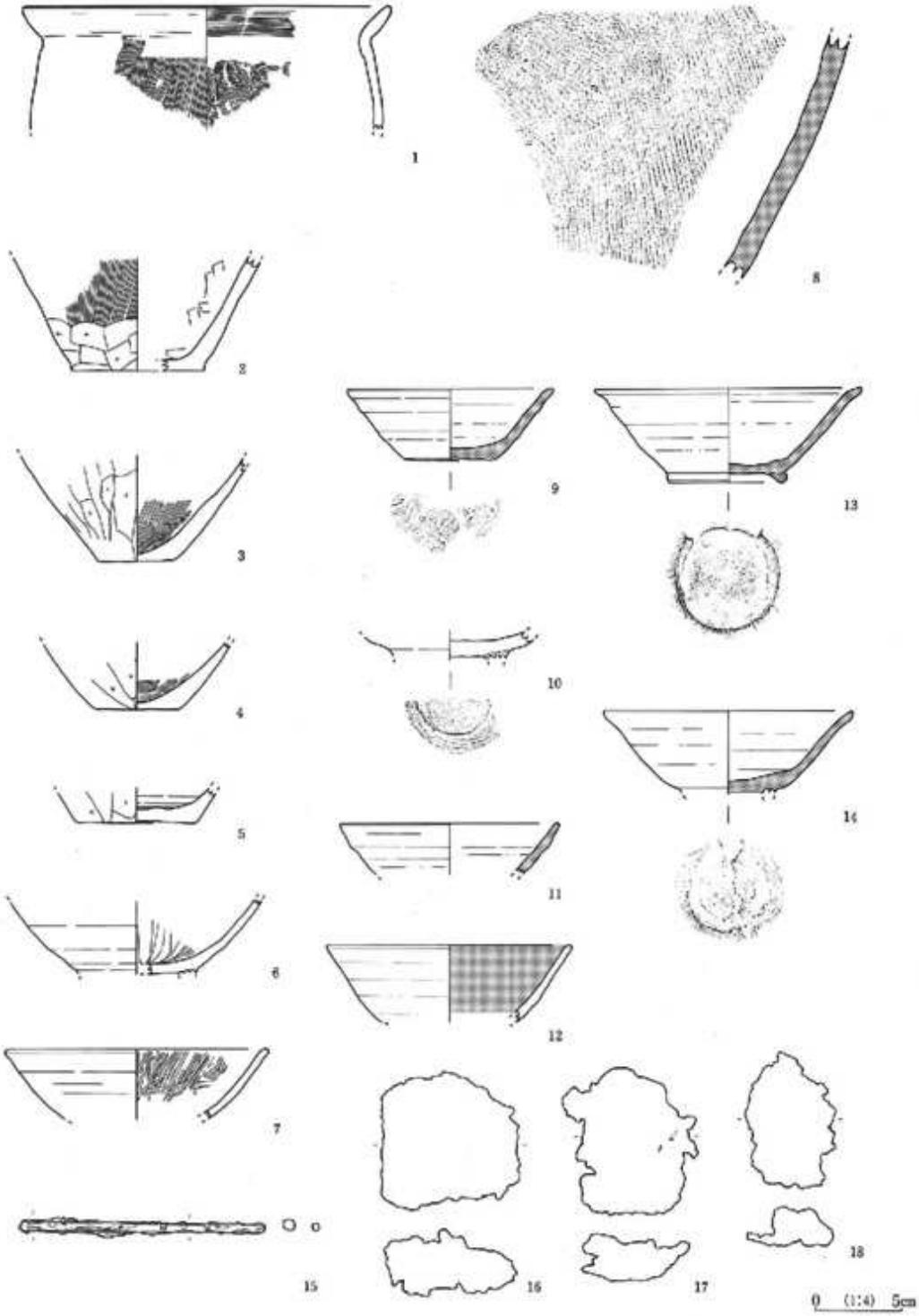


第7図 H1号住居址2号カマド実測図

を少量含むにぶい褐色土の1層のみ確認された。図中では第9層にあたる。

カマドは北壁中央より東よりで、さらに旧カマドと考えられるカマドが南東隅で検出された。なお便宜上、前者を第1号カマド、後者を第2号カマドとした。第1号カマドは北側煙道部が調査区域より外れたため全容は明らかでない。規模は現存する煙道部より焚口まで92cm、袖部の幅107cm、西側袖部の高さ48cm～35cm、東側袖部の高さ32～37cmを測る。残存状況は天井部の一部が崩落している以外は比較的良好である。カマド内の覆土は4層に分割された。第1層はローム粒子を微量含む黒色土で、第2層はローム粒子を多量に、焼土粒子を少量含む明赤褐色土、第3層は粘土粒子と粘土ブロックを多量に、炭化粒子を多く含む灰褐色土、第4層は焼土主体で、炭化粒子を少量含む赤色土である。カマドの構築状況は、安山岩あるいは溶結凝灰岩を利用した石組を基本としている。袖部は第5層のローム粒子と炭化粒子を少量含む黒褐色土、第6層のローム主体の橙色土、第7層の炭化粒子と焼土粒子、ローム粒子を微量含む黒褐色土によって構築される。また煙道部と燃焼部、焚口には第5層とした黒褐色土が貼られる。第2号カマドは燃焼部の幅41cm、北側の袖長61cm・袖幅26cm、煙道部より焚口までの長さ136cmを測る。なお袖は廃棄時に3分の1程度が切断されたと考えられる。残存状況は廃棄時に破壊された部分を除いては良好である。覆土は4層に分割された。第1層はローム粒子とパミスを多量に含む褐色土、第2層はローム粒子とパミスを多量に、炭化粒子を微量含む褐色土、第3層は焼土粒子と炭化粒子を多量に含む暗褐色土、第4層は焼土主体の明赤褐色土である。残存状況、袖の切断、覆土、焼土等により第2号カマドは何らかの要因により廃棄されたと考えられる。

遺物は、土師器の甕と坏、須恵器の甕と坏、鉱滓、鉄製品、石製品等が出土している。8－1～5は土師器の甕である。胴部外面にハケメ調整が行われるもの、ヘラケズリが行われるもの、

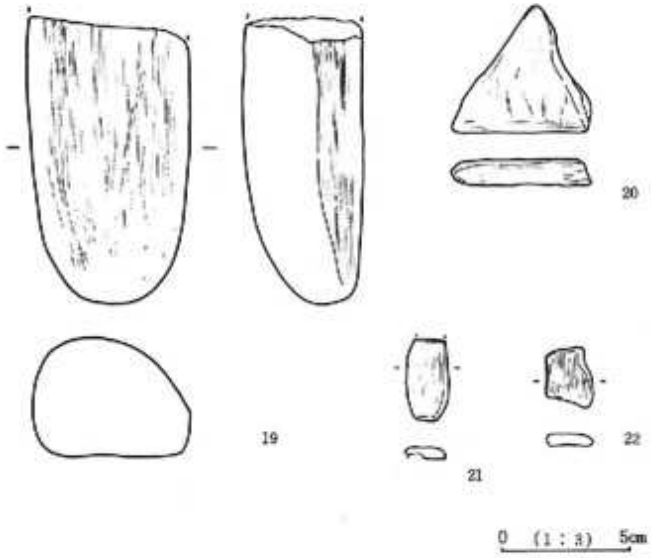


第8図　H1号住居址出土遺物実測図

その両方が行われるものがあり、さらに胴部内面にヨコナデが行われるもの、ハケメ調整が行われるもの、指頭ナデが行われるもの等、バラエティに富み統一性が無い。8－6・7・10・12は

第2表　H1号住居址出土遺物一覧表

挿図番号	器種	法量cm	形態の特徴	手法の特徴	備考
8-1	甕	口径(21.0) 現高7.1	長胴気味の胴部から直線的に短く外傾する口縁に至る。	口縁部内外面ヨコナデ 胴部外面ハケ目 脚部内面指頭調整	7.5YR 5/4
8-2	甕	底径(7.2) 現高6.6	平底より直線的に立ち上がる。	胴部外面ヘラケズリ 脚部外面ハケメ 胴部内面ヘラナデ	7.5YR 5/6
8-3	甕	底径4.5 現高6.1	平底より直線的に外傾する。	胴下半部外面ヘラケズリ 胴下半部内面ハケメ	7.5YR 5/4~5/1
8-4	甕	底径(5.0) 現高3.9	平底よりやや内彎気味に外傾	胴下部外面ヘラケズリ 胴下部内面ハケメ	7.5YR 5/4~4/4
8-5	甕	底径(7.0) 現高2.0	平底より直線的に外傾する。	胴下部外面ヘラケズリ 胴下部内面ヨコナデ	7.5YR 5/4
8-6	坏	底径〈6.8〉 現高4.2	高台部より内彎して外傾	体部外面ヨコナデ 体部内面ヘラミガキ 底部貼付高台	7.5YR 7/4
8-7	坏	口径(15.0) 現高4.0	体部やや内彎気味に外傾し口縁端部は直線的に外傾。	口辺部・体部外面ヨコナデ 口辺部・体部内面ヘラミガキ	5 YR 7/4
8-8	甕 (須)	現高14.0	やや内彎して外傾。	内外ヨコナデ 外面タタキ	7.5Y 4/1
8-9	坏 (須)	口径(11.8) 器高4.1 底径5.3	平底から直線的に外傾する。	内外面ヨコナデ 底部回転糸キリ	N 5/0
8-10	坏	底径〈6.5〉 現高1.4	高台有す。	底部回転糸切りの後貼高台 内外面ヨコナデ	7.5YR 7/4
8-11	坏 (須)	口径(12.4) 現高2,9	直線的に外傾。	内外面ロクロヨコナデ	10Y 7/1
8-12	坏	口径(14.0) 現高4.4	やや内彎気味に外傾。	外面ヨコナデ 内面ヘラミガキ 内面黒色研磨	7.5YR 5/6
8-13	坏 (須)	台径6.8 器高5.4 口径15.4	高台部より体部直線的に外傾し，口縁部でやや外反する。	内外面ロクロヨコナデ 底部貼付高台 底部回転糸切り	N 5/0
8-14	坏 (須)	口径(14.3) 器高〈4.7〉 底径〈5.3〉	高台部より体部直線的に外傾し，口縁部でやや外反する。	内外面ロクロヨコナデ 底部貼付高台 底部回転糸切り	N 6/0



第9図　H1号住居址出土遺物実測図

土師器の坏である。8－6・7は内面にヘラミガキが施され、6は貼付高台を持つ。8－10は底部に回転糸切りが行われ、高台が付される。8－12は内面に黒色研磨が施される。8－8は須恵器の大甕で外面にタタキが施される。8－9・11・13・14は須恵器の坏である。8－9は底部に回転糸切りが行われる。8－13・14は底部に回転糸切りが行われ、高台が付される。8－15は棒状鉄製品で、金箸あるいは金火箸の可能性がある。8

第3表　H1号住居址出土遺物一覧表

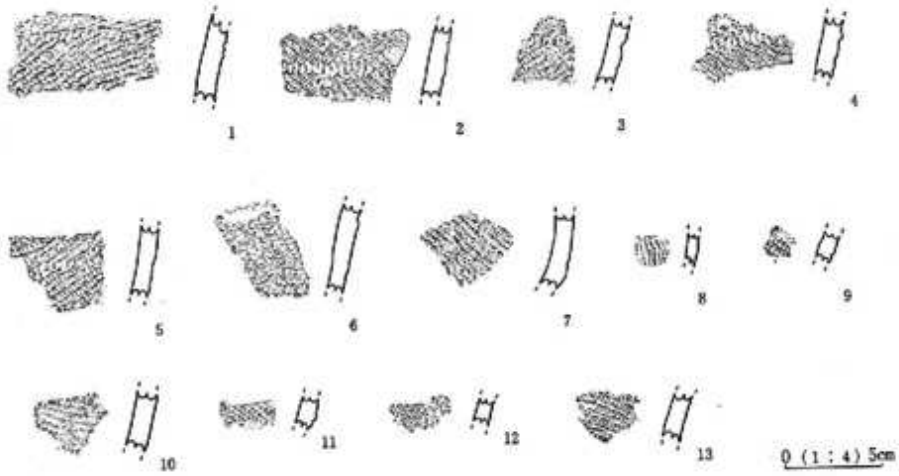
挿図番号	器種	種類	法量cm・g 長さ	巾	厚さ	重さ	備考
8-15	棒状鉄製品	鉄	14.3	0.7～0.4		——	金箸か？
8-16	鉱滓	鉄	7.9×7.9×4.4			286.9	
8-17	鉱滓	鉄	8.5×7.8×2.8			124.8	
8-18	鉱滓	鉄	7.9×5.3×2.4			100.3	
9-19	砥石	砂岩	〈11.0〉	6.4	4.7	509	
9-20	砥石	泥岩	4.9	5.4	1.0	23.5	
9-21	砥石	泥岩	〈3.2〉	1.6	0.5	3.0	砂質で脆い
9-22	砥石	泥岩	2.3	1.8	0.5	2.5	砂質で脆い

－16～18は鉄滓で、第1号カマドの西側より出土した。かなり大型の鉄滓で質量も大きい。第1号カマドを鍛冶炉として使用した可能性もあるが、鉄滓の大きさより、付近に鍛冶施設があった可能性の方が強い。9－19～22は砥石である。9－19は砂岩製で平らな砥面を二面、丸い砥面を

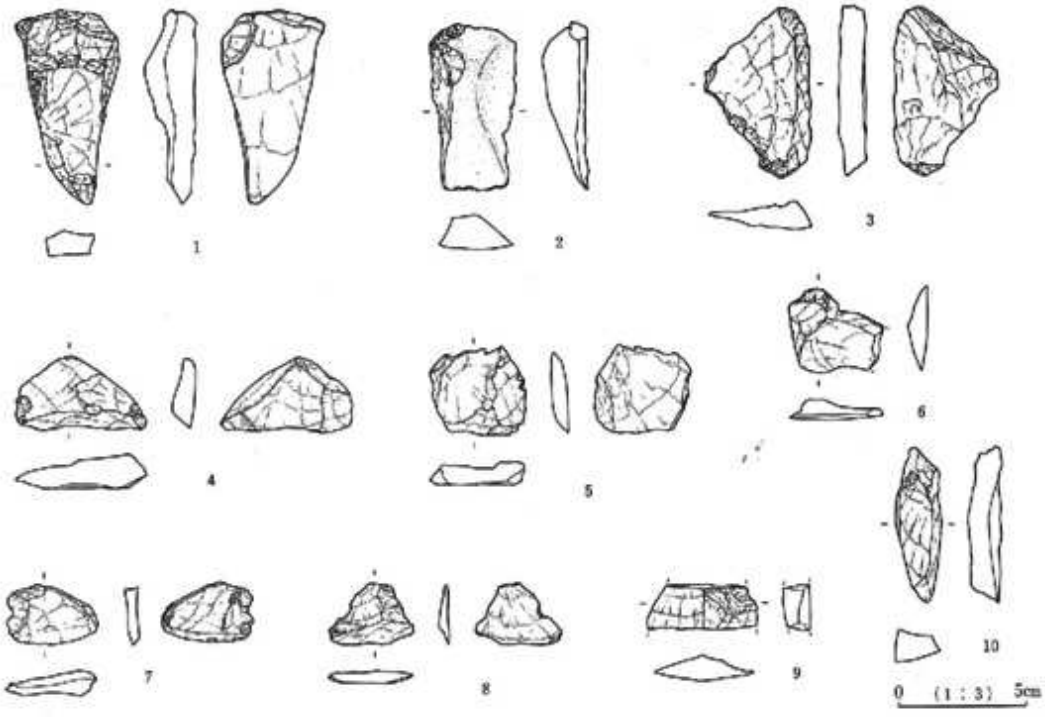
二面持つ。9—20・21・22は脆い砂質の泥岩製の砥石である。

以上より本住居址は平安時代に位置付けられる。

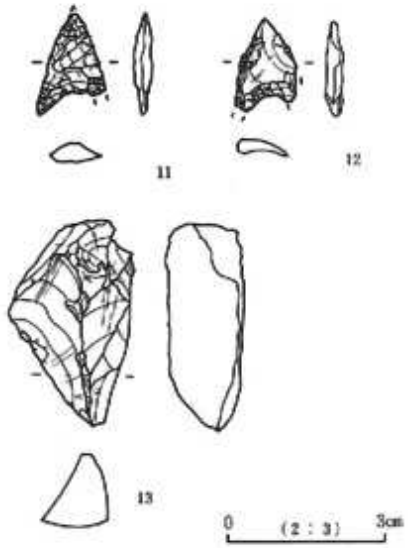
なお本住居址覆土中より縄文時代前期の土器と石器が出土している。第10図・第11図・第12図・第4表・第5表を参照されたい。縄文土器は主として深鉢の破片と考えられる。10—1～5・7・



第10図　H1号住居址出土縄文土器拓影図



第11図　H1号住居址出土縄文時代遺物実測図



第12図　H１号住居址出土縄文時代遺物実測図

8・10が前期の中葉、10―6・9・13が前期の初頭と考えられる。石器は13点が出土している。石核を利用し、石錐としても使用したスクレパー(11―1・12―13)と、縦長剥片を利用したスクレパー(11―2・11―10)、貝殻状剥片を利用したスクレパー(11―3～5・7・8)、エンドスクレパー(11―6)、凹基無茎鏃(12―11・12)、その他(11―9)である。11―10はサイドスクレパーに分類できる。また図示したものの他に、泥岩の母岩1点、砕片2点、横長剥片3点、縦長剥片3点と、玄武岩の横長剥片7点、縦長剥片2点が出土している。

第4表　H１号住居址出土縄文時代石器一覧表(1)

挿図番号	器種	石質	法量cm 長さ	巾	厚さ	備考
11-1	スクレパー	玄武岩	7.5	4.0	2.0	石核石器、石錐としても使用
11-2	スクレパー	玄武岩	6.4	3.4	1.8	剥片石器、縦長剥片を利用 原石面を残す。
11-3	スクレパー	玄武岩	6.6	4.0	1.1	剥片石器、貝殻状剥片を利用 一辺に剥離調整有り
11-4	スクレパー	玄武岩	2.8	5.1	1.4	剥片石器、貝殻状剥片を利用 刃部両極に加工痕有り。
11-5	スクレパー	玄武岩	3.4	3.7	0.9	剥片石器、貝殻状剥片を利用
11-6	スクレパー	チャート	3.3	〈3.6〉	0.8	全周に刃部を持つ。¼欠損
11-7	スクレパー	玄武岩	2.3	3.6	0.9	剥片石器、貝殻状剥片を利用 刃部やや鈍角
11-8	スクレパー	玄武岩	2.3	3.3	0.5	剥片石器、貝殻状剥片を利用
11-9	不明	玄武岩	〈1.8〉	4.3	1.1	両サイドに刃部、⅓が残存
11-10	サイドスクレパー	玄武岩	6.0	1.8	1.3	剥片石器、縦長剥片を利用 一辺に刃部を持つ

第5表　H 1号住居址縄文時代石器一覧表(2)

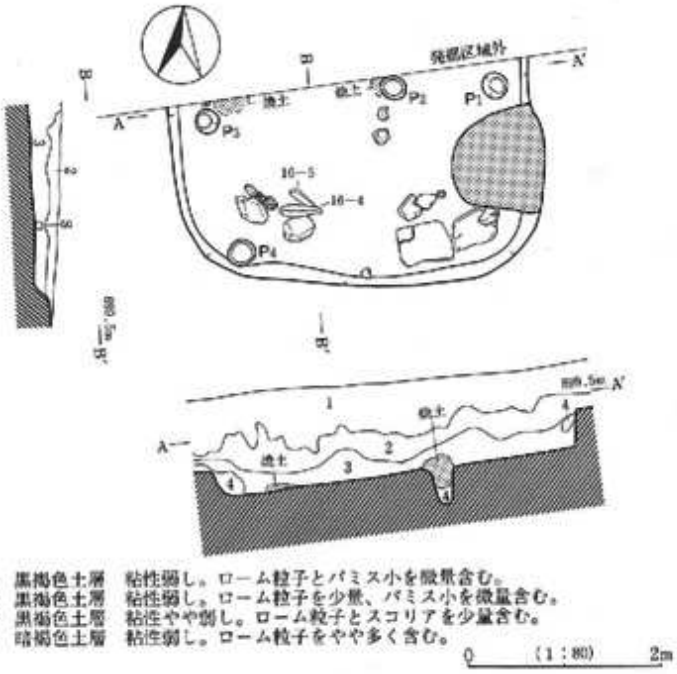
挿図番号	器　種	石　質	法　量cm			備　　考
			長さ	巾	厚さ	
12-11	石鏃	黒曜石	2.0	〈1.8〉	0.4	脚部欠損、凹基無茎鏃
12-12	石鏃	黒曜石	1.8	1.2	0.4	脚部切損、凹基無茎鏃 未成品
12-13	スクレパー	黒曜石	4.0	2.4	1.5	石核石器、石錐としても使用 基部に微調整有り

2）H2号住居址

H2号住居址は調査地B区の東側、あ・い—19・20グリッド内に位置し、B区全体層序第3層上面において検出された。なお住居址北側は調査区域外である。

平面形態は、東西382cm、南北は現況で220cmを測り、隅丸方形を呈すると考えられる。主軸方位はN－8°－Wを指すと推定される。

覆土は4層に分割された。第1層はローム粒子とパミス小を微量含む黒褐色土、第2層はローム粒子を少量、パミス小を微量含む黒褐色土、第3層はローム粒子とスコリアを少量含む黒褐色土、第4層はローム粒子をやや多く含む暗褐色土である。

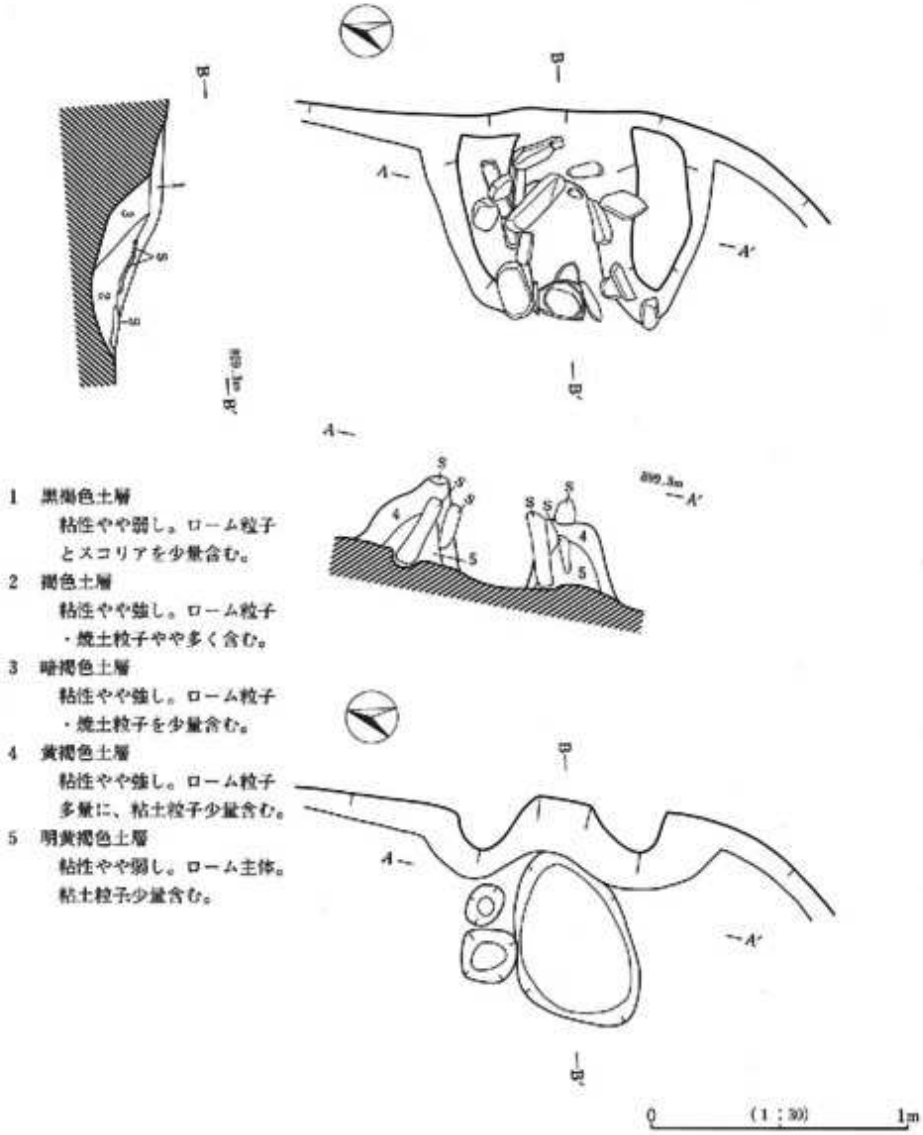


1　黒褐色土層　粘性弱し。ローム粒子とパミス小を微量含む。
2　黒褐色土層　粘性弱し。ローム粒子を少量、パミス小を微量含む。
3　黒褐色土層　粘性やや劣し。ローム粒子とスコリアを少量含む。
4　暗褐色土層　粘性劣し。ローム粒子をやや多く含む。

第13図　H 2号住居址実測図

確認面からの壁高は15.5～40cmを測る。壁体は黄褐色ローム層を利用し、平滑で堅固である。床面は平坦で、貼床および周溝は認められなかったが、緻密で固くしまっている。なお床面積は現況で6.42m²を測る。

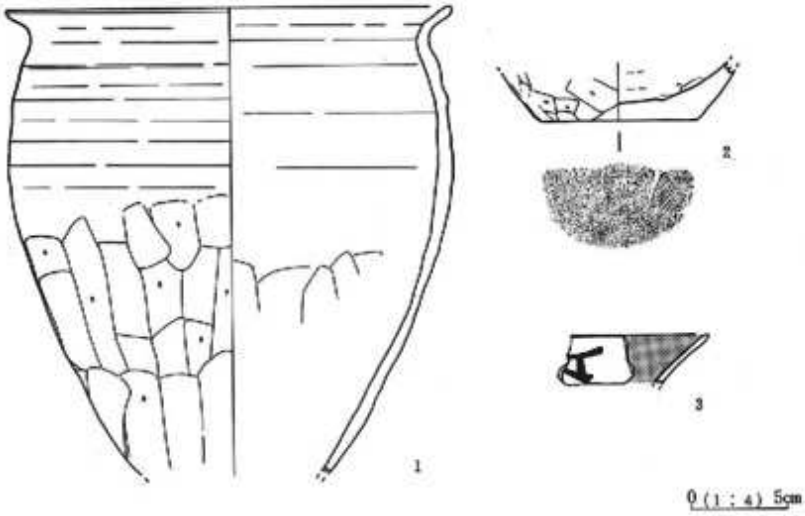
ピットは4個が検出されたが、住居址の全容から明らかでないため、どれが主柱穴であるのか断定は避けたい。P_1は径27cm×28cmで深さ22cmで、P_2は径26cm×24cmで深さ36cm、P_3は径25cm×



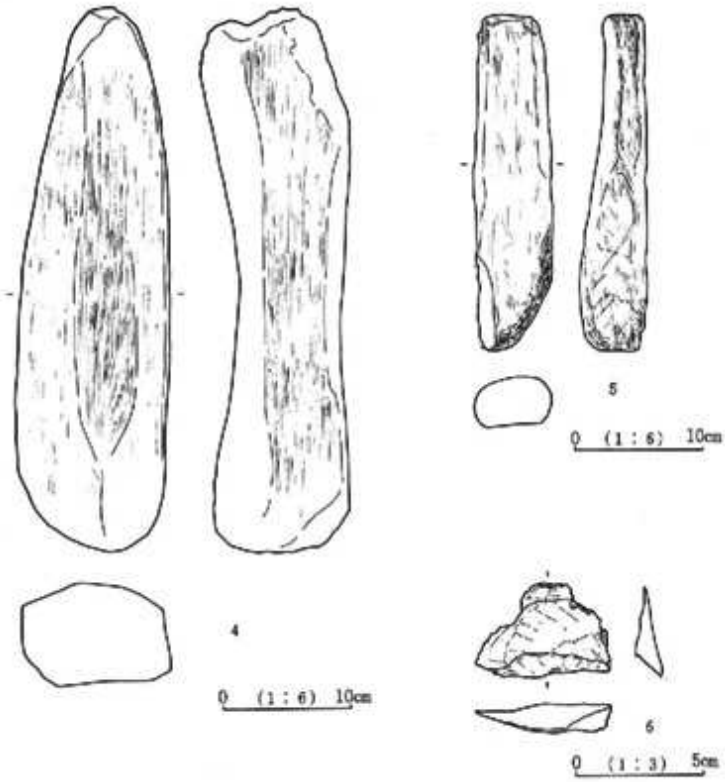
第14図　H２号住居址カマド実測図

24cmで深さ25cm、P_4は径27cm×29cmで深さ19cmを測る。

カマドは東壁の南よりで検出された。規模は煙道部より焚口まで91cm、袖部の幅112cmで、北側袖部の高さ31～34cm、南側袖部の高さ33～28cmを測る。残存状態は不良で、構築材がかなり崩れ出している。またカマド南側の床面に構築材としての溶結凝灰岩が散乱している。カマド内の覆土は３層に分割された。第１層はローム粒子とスコリアを少量含む黒褐色土で、第２層はローム粒子と焼土粒子をやや多く含む褐色土、第３層はローム粒子と焼土粒子を少量含む暗褐色土である。カマドの構築状況は、溶結凝灰岩を主として他に安山岩を利用した石組を基本としている。



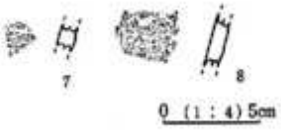
第15図　H２号住居址出土遺物実測図



第16図　H２号住居址出土遺物実測図

袖部は第４層としたローム粒子を多量に、粘土粒子を少量含む黄褐色土と、第５層としたローム主体で粘土粒子を少量含む明黄褐色土によって構築される。

遺物は、土師器の甕と坏、大型砥石、敲石等が出土している。15―１は胴部上半にロクロヨコナデが行れる土師器の甕で、15―２は底部に回転糸切りが行れる甕である。15―３は外面に墨書のある坏で、内面に黒色研磨が施される。なお墨書された文字は現状では判読できない。16―４は長さ42cm、厚さ12cmを測る砂岩製の大型砥石で、不規則だが六面の砥面を持つ。16―５は長さ25.9cm厚さ6.2cmを測る安山岩製の



第17図　H２号住居址出土縄文土器拓影図

大型敲石で、敲き等による使用時の欠損が数カ所確認できる。

以上より本住居址は平安時代に位置付けられる。

また本住居址からは縄文時代前期の土器と石器が出土している。17－7・8は前期の深鉢の細片と考えられる。16－6は貝殻状剝片を利用したスクレパーである。

第6表　H2号住居址出土遺物一覧表

挿図番号	器種	法　量cm	形態の特徴	手法の特徴	備　考
15-1	甕	口径(23.0) 現高 24.0	丸味をもった長胴部から短く外反する口縁に至る。	胴上半部内外面ロクロヨコナデ 胴下半部外面ヘラケズリ 胴下半部内面ヘラナデ	5YR5/3
15-2	甕	底径 (8.0) 現高　3.0	平底より立ち上がる。	外面ヘラケズリ 内面ヘラナデ 底部回転糸切り	7.5YR8/4
15-3	坏	―	口辺部外彎気味に外傾	内面黒色研磨 外面に墨書	7.5YR8/4

3）H3号住居址

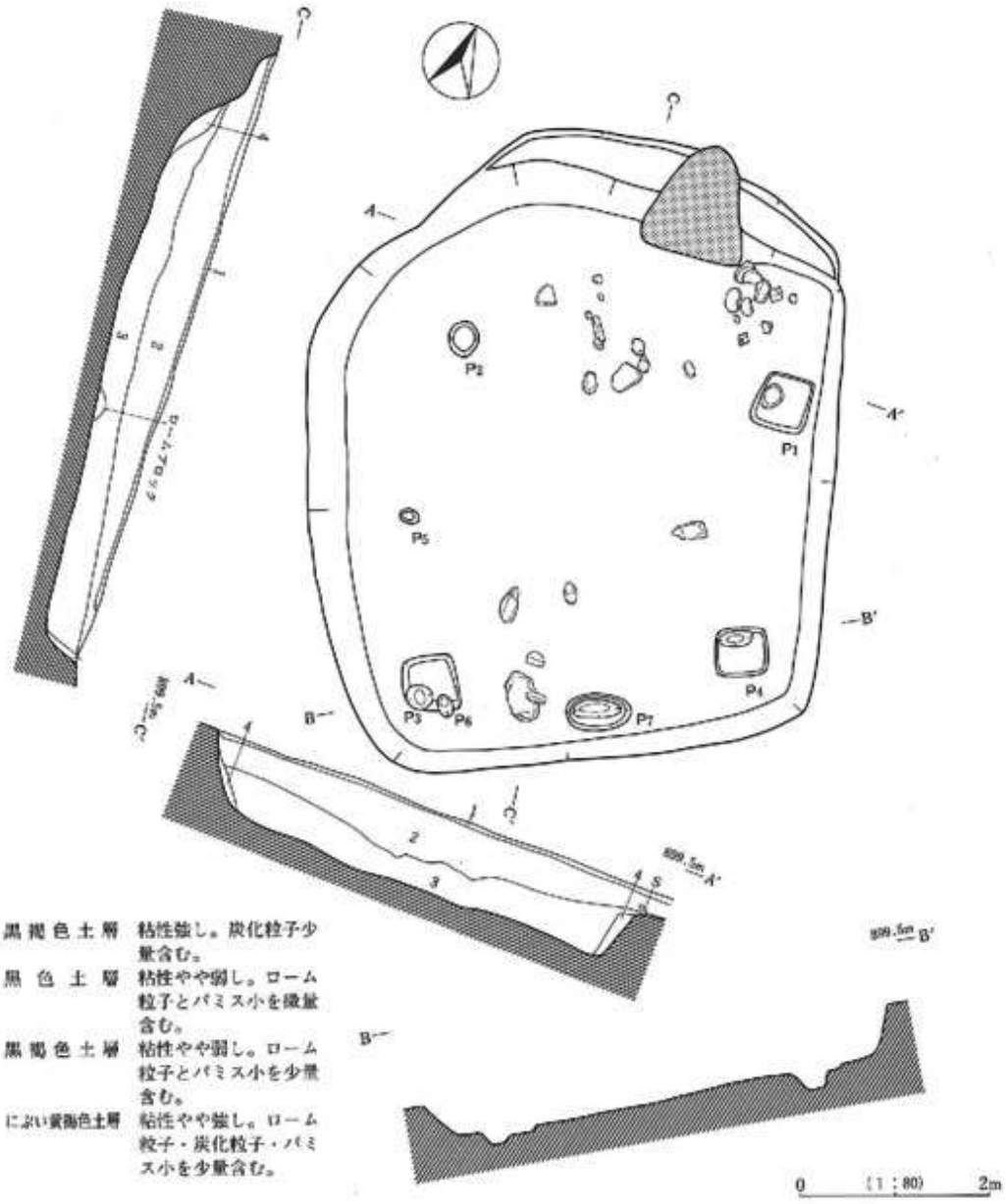
H3号住居址は、調査地B区の東側、い・う－18・19グリッド内に位置し、B区全体層序第3層上において検出された。

平面形態は、南北657cm、東西557cmを測り、隅丸不整方形を呈する。主軸方位は南壁を基本とするとN－24°－Wを指す。

覆土は4層に分割された。第1層は炭化粒子を少量含む黒褐色土、第2層はローム粒子とパミス小を微量含む黒色土、第3層はローム粒子とパミス小を少量含む黒褐色土、第4層はローム粒子と炭化粒子、パミス小を少量含むにぶい黄褐色土である。

確認面からの壁高は32.5～67.5cmを測る。壁体は黄褐色ローム層を利用し、平滑で堅固である。床面はおおむね平坦で、緻密で固くしまっており、面積は24.45m²を測る。なお周溝および貼床は認められなかった。また北壁中上部にテラスが検出され、面積は1,27m²を測る。

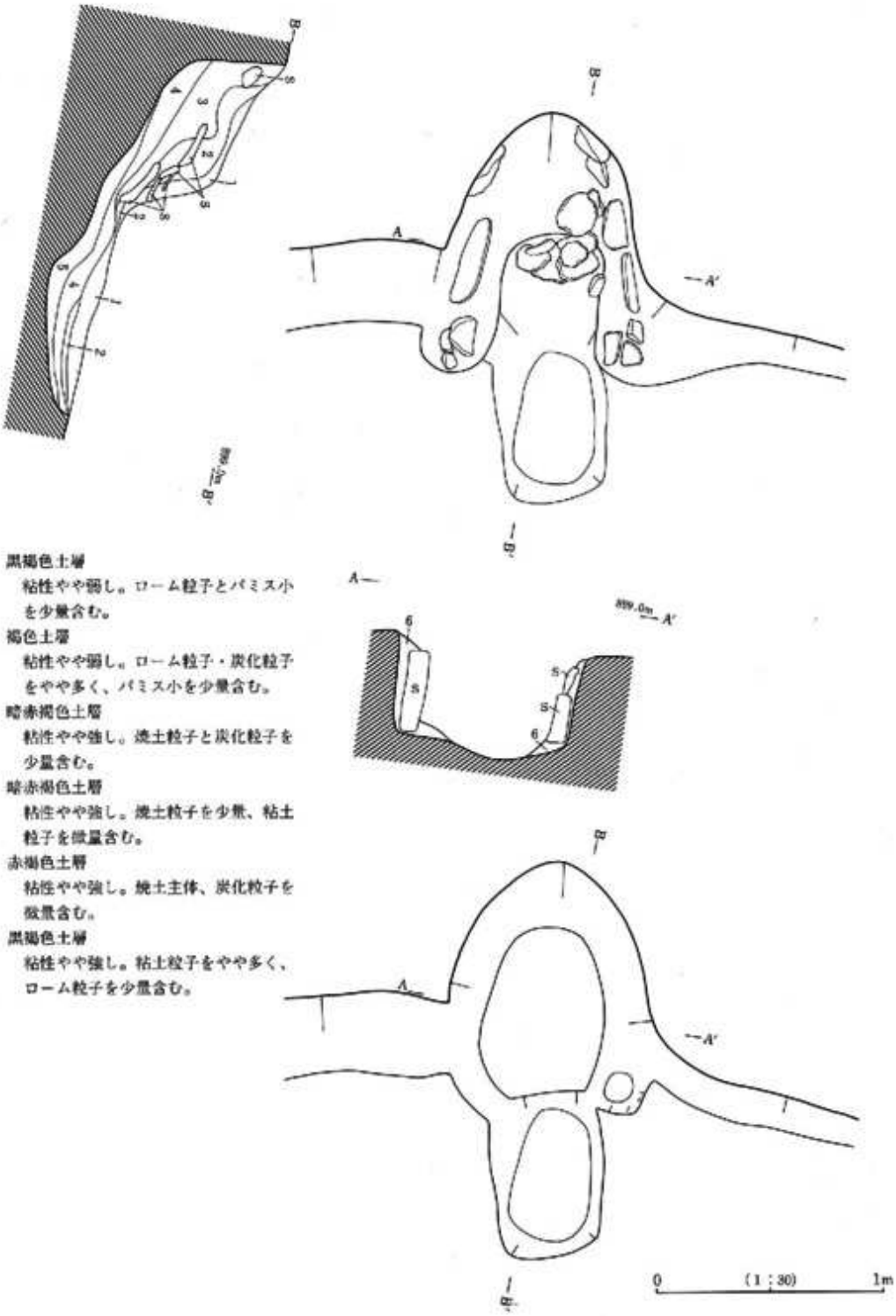
ピットは、主柱穴4個（P_1～P_4）と入口施設に伴うもの1個（P_7）、補助柱穴（P_5・P_6）の計7個が確認された。P_1は径27cm×24cmで深さ12cm、掘り方は径60cm×56cmを測り、P_2は径38cm×32cmで深さ17cmを測る。P_3は径26cm×28cmで深さ12cm、掘り方は径56cm×58cmを測り、P_4は径16cm×39cmで深さ20cm、掘り方は径52cm×57cmを測る。以上が主柱穴と考えられる。P_5は径15cm×20cmで深さ15cm、P_6は径23cm×16cmで深さ16cmを測り、補助柱穴と考えられる。P_7は径18cm×50cmで深さ16cm、掘り方は径39cm×69cmを測り、入口施設に伴うピットと考えられる。なおP_1・P_2・



第18図 H3号住居址実測図

P_4には方形の掘り込みが認められ、柱を据えた後に貼ったものと認識した。

カマドは北壁中央より東よりで検出された。規模は煙道部より焚口まで170cm、袖部の幅91cmを測る。残存状況は悪く、天井部が天井石とともに崩落し、構築材としての溶結凝灰岩が床面に散乱していた。カマド内の覆土は5層に分割された。第1層はローム粒子とパミス小を少量含む黒褐色土、第2層はローム粒子と炭化粒子をやや多く、パミス小を少量含む褐色土、第3層は焼土



1　黒褐色土層
　粘性やや弱し。ローム粒子とパミス小を少量含む。

2　褐色土層
　粘性やや弱し。ローム粒子・炭化粒子をやや多く、パミス小を少量含む。

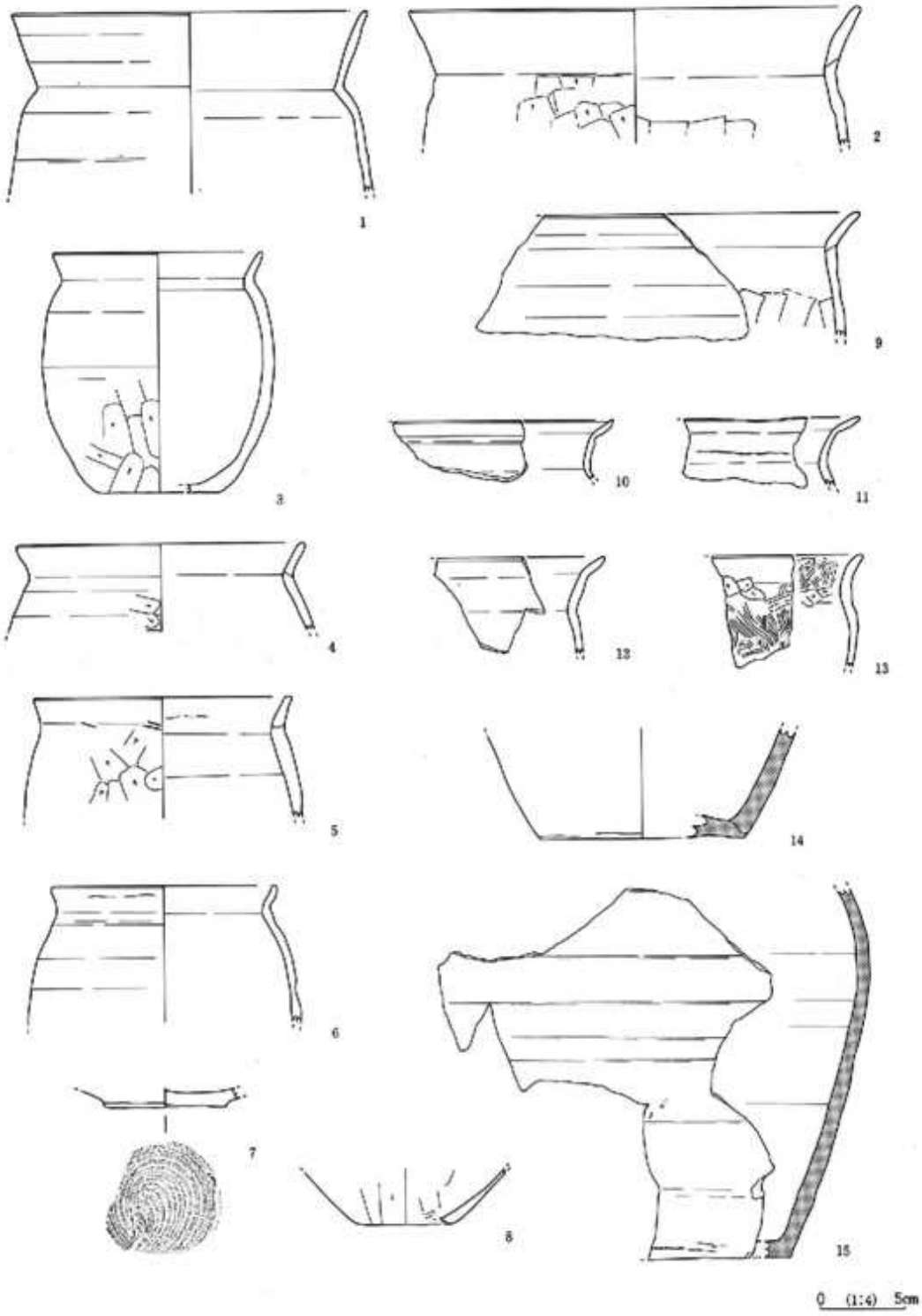
3　暗赤褐色土層
　粘性やや強し。焼土粒子と炭化粒子を少量含む。

4　暗赤褐色土層
　粘性やや強し。焼土粒子を少量、粘土粒子を微量含む。

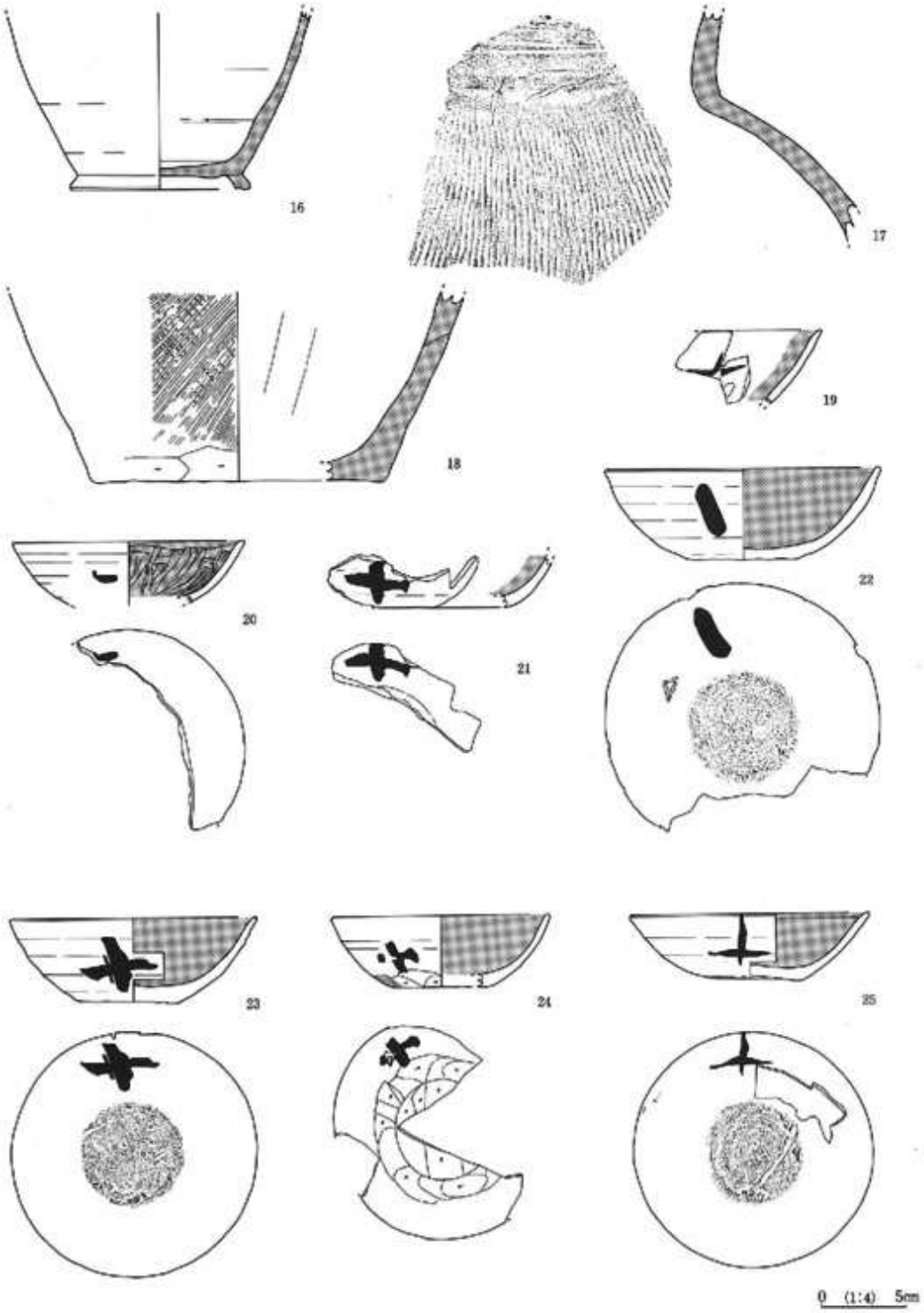
5　赤褐色土層
　粘性やや強し。焼土主体、炭化粒子を微量含む。

6　黒褐色土層
　粘性やや強し。粘土粒子をやや多く、ローム粒子を少量含む。

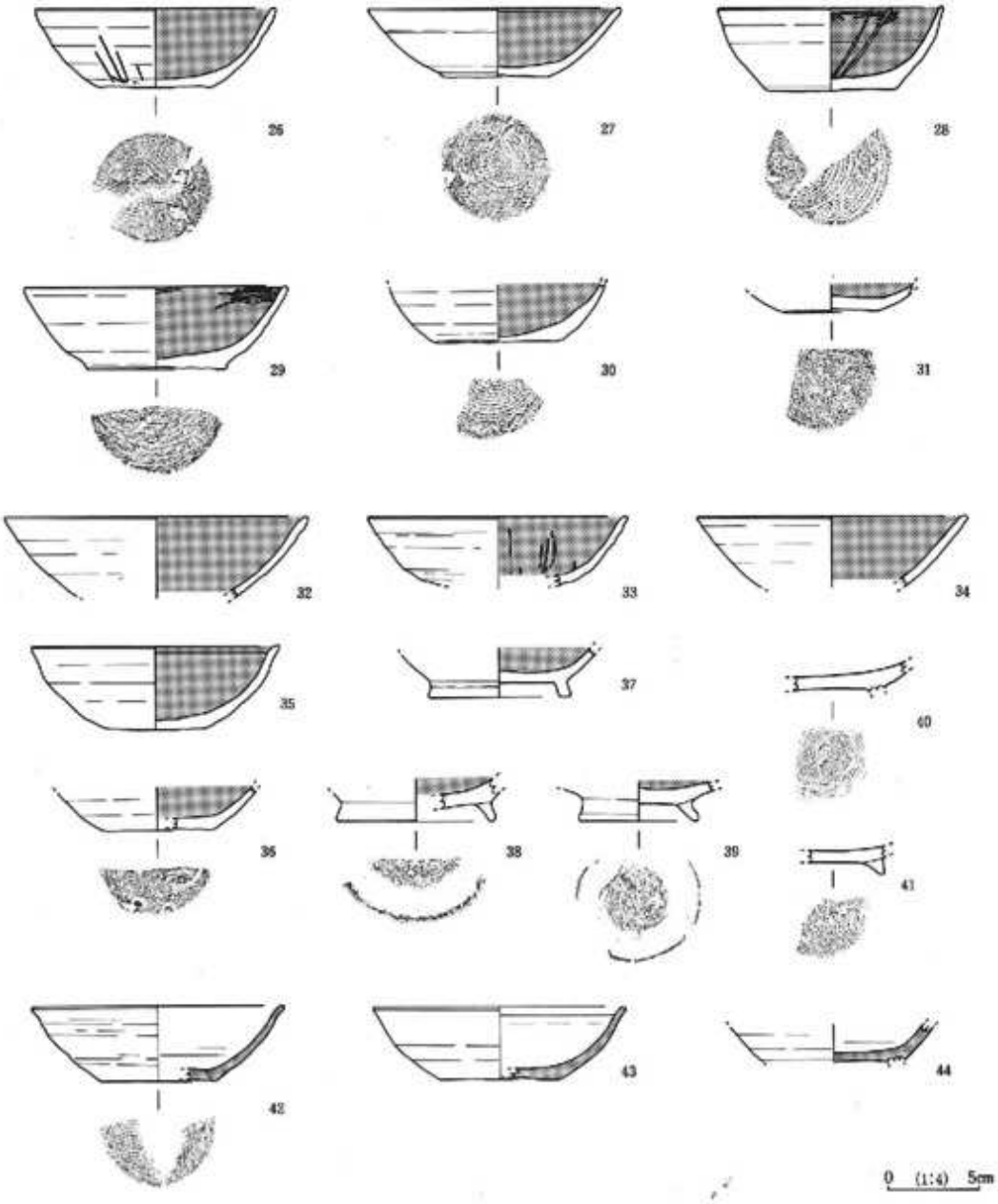
第19図　H３号住居址カマド実測図



第20図　H３号住居址出土遺物実測図

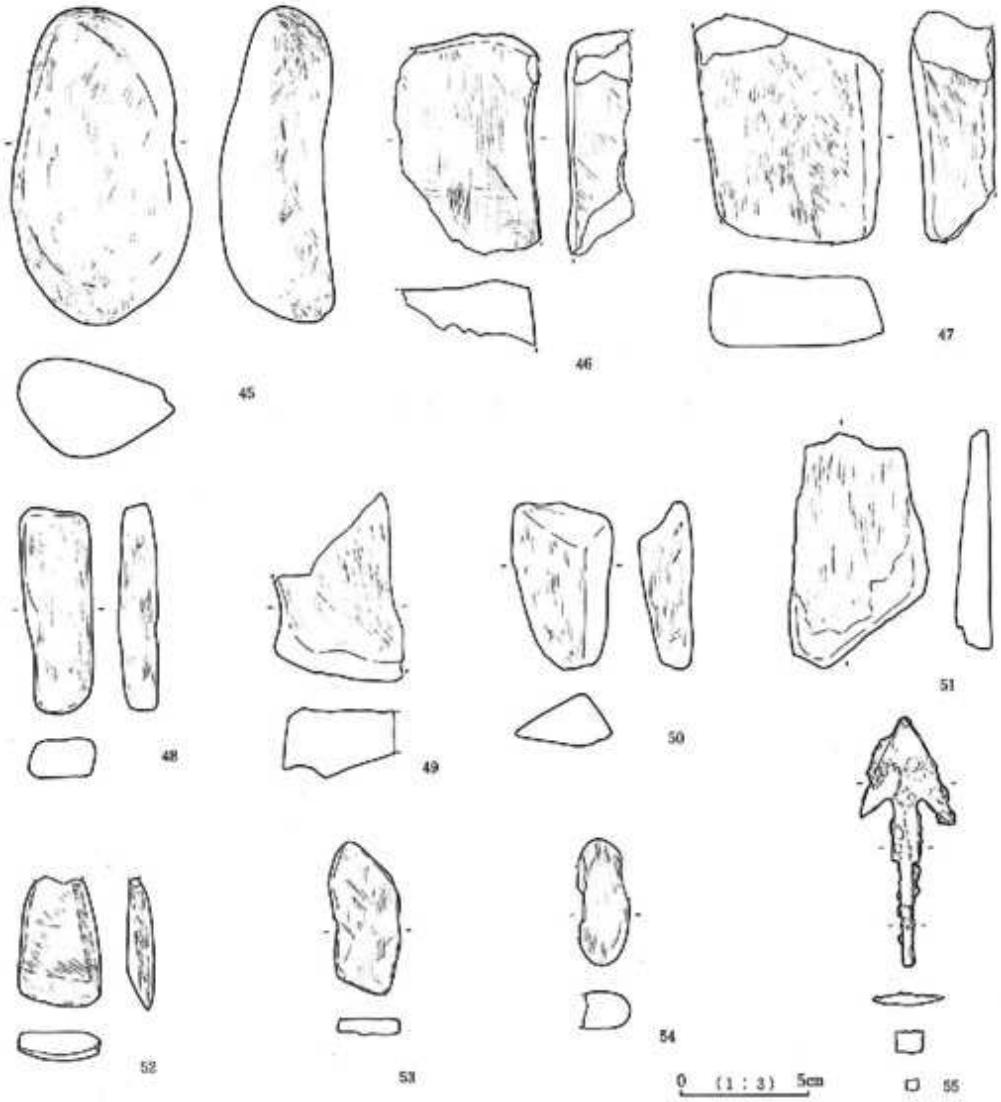


第21図　H 3 号住居址出土遺物実測図



第22図　H３号住居址出土遺物実測図

粒子と炭化粒子を少量含む暗赤褐色土、第４層は焼土粒子を少量、粘土粒子を微量含む暗赤褐色土、第５層は焼土主体で炭化粒子を微量含む赤褐色土である。カマドの構築状況は、壁体を大きく掘り込んで溶結凝灰岩と安山岩を構築材として利用した石組を基本としている。袖部は第６層とした粘土粒子をやや多く、ローム粒子を少量含む黒褐色土によって構築される。



第23図　H３号住居址出土遺物実測図

遺物は、土師器の甕と坏、須恵器の壺・甕・坏・敲石・砥石・磨製石斧・磨石・鉄鏃など多量に出土している。20―１・２・８～13は土師器の甕である。１と12はロクロ成形が行われ、10～12は頸部が「コ」の字を呈する。20―３～７は土師器の小型甕である。ロクロ成形を基本とし、口縁部が短く、内面にヘラナデが施される。以上図示した甕と小型甕は13点だが、他に20点以上の別個体の甕の破片が出土している。20―14・21―17と18は須恵器の甕で17と18は外面にタタキが施される。20―15・21―16は須恵器の壺（瓶）である。21―19～25、22―26～41は土師器の坏である。全てがロクロ成形で、内面に黒色研磨が施される。また19～25は墨書土器である。19・21・

第7表　H3号住居址出土遺物一覧表(1)

挿図番号	器種	法 量cm	形態の特徴	手法の特徴	備　考
20-1	甕	口径(20.6) 現高 10.6	頸部で「く」の字に折れ、直線的に外傾する口縁に至る。	内外面ロクロヨコナデ	5YR4/3
20-2	甕	口径(25.8) 現高　7.9	口縁部外彎気味にわずかに外傾する。	口縁部内外面ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	10YR6/2
20-3	小型甕	口径(12.2) 器高 14.0 底径 (7.0) 最大径(13.6)	平底より最大径を持つ胴部をへて短く外傾する口縁に至る。	口縁部内外面ロクロヨコナデ 胴上半部外面ロクロヨコナデ 胴下半部外面ヘラケズリ 底部回転糸切り 胴部内面ロクロヨコナデ	5YR6/6
20-4	小型甕	口径(16.8) 現高　5.1	胴部に最大径を持ち、口縁は短く外傾する。	口縁部内外面ロクロヨコナデ 頸部外面ロクロヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部外面ヘラナデ	5YR5/4
20-5	小型甕	口径(15.0) 現高　7.1	胴部に最大径を持ち、口縁は短く外傾する。	口縁部内外面ロクロヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ、ミガキに近いヘラナデ 胴部内面ヘラナデ	5YR6/6
20-6	小型甕	口径 13.2 現高　8.1	胴部に最大径を持ち、口縁は内彎気味に短く外傾する。	口縁部内外面ロクロヨコナデ 胴部外面ロクロヨコナデの後に一部ヘラナデ 胴部内面ヘラナデ	5YR6/6
20-7	小型甕	底径　7.2 現高　1.0	底部平底	内面ヘラミガキ 底部回転糸切り	5YR5/6
20-8	甕	底径 (5.8) 現高　3.2	底部平底	内面ヘラナデ 外面ヘラケズリ	5YR5/4
20-9	甕	現高　7.2	口縁部短く外傾	口縁部内外面ロクロヨコナデ 胴部外面ロクロヨコナデ 胴部内面ヘラナデ	5YR6/6
20-10	甕	口径(18.4) 現高　3.5	頸部「コ」の字を呈する。	内外面ヨコナデ	5YR5/4
20-11	甕	現高　4.0	頸部「コ」の字を呈する。	内外面ヨコナデ	5YR5/6
20-12	甕	現高　5.6	頸部「コ」の字を呈する。	内外面ロクロヨコナデ	5YR5/3
20-13	甕	現高　6.5	口縁部内彎して外傾	口縁部内外面ヨコナデ 頸部内外面ヘラケズリ 胴部外面ヘラミガキ 口縁部内面ヘラミガキ 胴部内面ヘラナデ	7.5YR7/4
20-14	甕(須)	底径(11.8) 現高　6.4	底部平底	内外面ヘラナデ？ 底部ヘラケズリ	5BG6/1

第8表　H3号住居址出土遺物一覧表(2)

挿図番号	器種	法量　cm	形態の特徴	手法の特徴	備　考
20-15	壺(須)	現高 21.5	——	内外面ロクロヨコナデ	N2/0
21-16	壺(須)	台径(10.4) 現高 10.3	——	内外面ロクロヨコナデ 貼付高台	2.5Y6/1
21-17	甕(須)	現高 13.6	——	内面ロクロヨコナデ 胴部外面タタキ	10YR4/1
21-18	甕?(須)	現高 17.0	底部平底	内面ヘラナデ 胴部外面タタキ 底部外周ヘラケズリ	N3/0
21-19	坏	現高　4.3	体部・口辺部外傾する。	外面ロクロヨコナデ 内面黒色研磨	7.5YR5/4 墨書「十」
21-20	坏	口径(13.4) 現高　3.7	体部内彎気味に外傾	外面ロクロヨコナデ 内面黒色研磨	7.5YR7/4 墨書有
21-21	坏	現高　3.1	体部が内彎気味に外傾	外面ロクロヨコナデ 内面黒色研磨	7.5YR8/2 ～6/4 墨書「十」
21-22	坏	口径 16.0 器高　5.3 底径　6.2	平底より体部内彎して外傾	外面ロクロヨコナデ 内面黒色研磨 底部回転糸切り	5YR4/3 墨書「丨」
21-23	坏	口径 14.4 器高　5.1 底径　5.9	平底より体部内彎して外傾	外面ロクロヨコナデ 内面黒色研磨 底部回転糸切り	7.5YR6/4 墨書「十」
21-24	坏	口径(12.7) 器高　4.3 底径　5.6	平底より体部内彎して外傾	外面ロクロヨコナデ 体下部・底部ヘラケズリ 内面黒色研磨	2.5Y7/3 墨書「十」
21-25	坏	口径 14.0 器高　4.1 底径　8.7	平底より体部やや内彎して外傾	外面ロクロヨコナデ 内面黒色研磨 底部回転糸切り後ヘラの刻線	7.5YR5/6 墨書「十」
22-26	坏	口径 13.0 器高　4.3 底径　6.0	平底より体部内彎して外傾	外面ロクロヨコナデ 外面ヘラの刻線 底部外周ヘラケズリ 底部回転糸切り 内面黒色研磨	7.5YR4/3
22-27	坏	口径(13.4) 器高　3.7 底径　5.7	平底より体部内彎して外傾	外面ロクロヨコナデ 内面黒色研磨 底部回転糸切り	5YR6/4
22-28	坏	口径 12.2 器高　4.5 底径　7.0	平底より体部内彎して外傾	外面ロクロヨコナデ 内面暗文風ヘラミガキ 内面黒色研磨 底部回転糸切り	7.5YR6/6

第9表　H3号住居址出土遺物一覧表(3)

挿図番号	器種	法量　cm	形態の特徴	手法の特徴	備　考
22-29	坏	口径(14.0) 器高　4.5 底径（7.6）	平底より体部内彎して外傾	外面ロクロヨコナデ 内面黒色研磨 底部回転糸切り	7.5YR6/4
22-30	坏	現高　3.1 底径（7.0）	平底より体部が内彎して外傾	外面ロクロヨコナデ 内面黒色研磨 底部回転糸切り	7.5YR6/6
22-31	坏	現高　1.5 底径（5.2）	底部平底	外面ロクロヨコナデ 内面黒色研磨 底部回転糸切り	5YR6/6
22-32	坏	現高　4.4 口径(16.4)	体部内彎して外傾	外面ロクロヨコナデ 内面黒色研磨	7.5YR6/4
22-33	坏	口径(14.0) 現高　3.7	体部内彎して外傾	外面ロクロヨコナデ 内面暗文風ヘラミガキ 内面黒色研磨	7.5YR3/2
22-34	坏	口径(14.6) 現高　3.8	体部やや内彎して外傾	外面ロクロヨコナデ 内面黒色研磨	7.5YR6/6
22-35	坏	口径(13.4) 器高　4.5 底径（5.4）	平底より体部内彎して外傾	外面ロクロヨコナデ 内面黒色研磨	7.5YR6/6
22-36	坏	現高　2.3 底径（5.8）	底部平底	外面ロクロヨコナデ 内面黒色研磨 底部回転糸切り	7.5YR6/6
22-37	坏	台径　7.7 現高　2.6	——	外面ロクロヨコナデ 内面黒色研磨 底部回転ヘラケズリの後貼付高台	10R5/4
22-38	坏	台径（8.4） 現高　2.3	——	内面黒色研磨 底部回転ヘラケズリの後貼付高台	5YR8/3
22-39	坏	台径　6.4 現高　2.1	——	内面黒色研磨 底部回転ヘラケズリの後貼付高台	2.5YR7/6
22-40	坏	現高　1.7	——	内面黒色研磨 底部回転糸切り,の後貼付高台	10YR7/3
22-41	坏	現高　1.6	——	内面黒色研磨 底部回転糸切りの後貼付高台	2.5YR6/6
22-42	坏 (須)	口径(13.4) 器高　4.1 底径（6.2）	平底より体部内彎して外傾	内外面ロクロヨコナデ 底部回転糸切り	10YR5/4

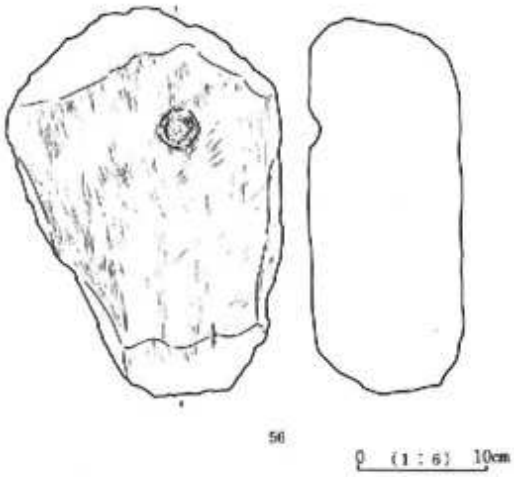
第10表　H3号住居址出土遺物一覧表(4)

挿図番号	器種	法量　cm	形態の特徴	手法の特徴	備　考
22-43	坏（須）	口径(13.6) 器高　3.9 底径　6.4	平底より体部内彎気味に外傾	内外面ロクロヨコナデ 底部回転糸切り	5Y7/1 ～5/1
22-44	坏（須）	現高　2.1 底径（7.4）	底部平底	内外面ロクロヨコナデ 底部貼付高台	S5/0

23～25には「十」が墨書される。37～39は底部に回転ヘラケズリが行われた後に、40・41は底部に回転糸切りが行われた後に高台が付される。22―42～44は須恵器の坏である。42と43は底部に回転糸切りが行れる。44は底部に高台が付される。23―45は安山岩製の敲石で、両端部と外周に擦過痕・敲打痕が認められる。23―46は流紋岩製、23―47～49・51は安山岩製、23―50・53は泥

第11表　H 3号住居址出土遺物一覧表(5)

挿図番号	器　種	種　類	法　量cm			備　　考
			長さ	巾	厚さ	
23-45	敲石	安山岩	12.2	6.9	4.4	両端部・外周に擦過痕と敲打痕
23-46	砥石	流紋岩	〈8.5〉	〈5.6〉	〈2.6〉	四面砥、表面にススが付着
23-47	砥石	安山岩	〈8.9〉	7.2	3.3	四面砥
23-48	砥石	安山岩	8.0	2.7	1.5	四面砥
23-49	砥石	安山岩	〈7.3〉	〈5.0〉	2.9	使用頻度低い
23-50	砥石	泥岩	6.4	3.9	2.1	三面砥
23-51	砥石	安山岩	9.0	5.5	1.4	風化著しい、二面砥
23-52	磨製石斧	チャート	5.0	3.2	1.1	かなり小型で、刃部と基部に欠損有す 色調白～灰色～黒灰色
23-53	砥石	泥岩	5.9	2.7	0.6	二面砥
23-54	磨石	泥岩	4.9	〈2.0〉	1.4	
23-55	鉄鏃	鉄	9.7	最大巾3.7 柄部巾1.3～1.2 柄部巾0.9～0.5		柄部にカエリを有す。



第24図　H３号住居址出土遺物実測図

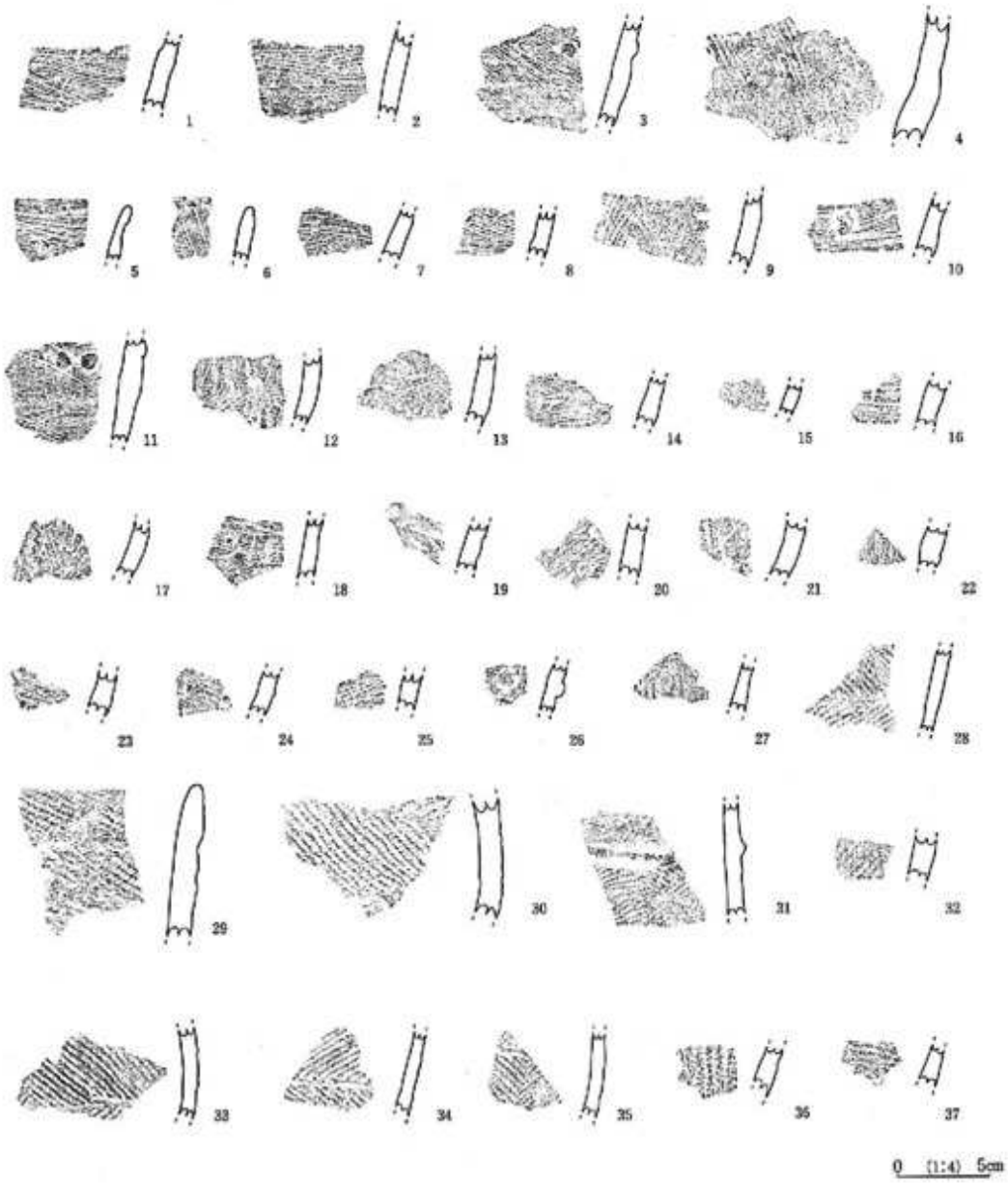
岩製の砥石である。23—52はチャート製の磨製石斧で、形態より扁平片刃石斧と考えられる。23—54は泥岩製の磨石である。23—55は鉄鏃で残存状態は良好である。柄部にカエリ状の段が付いている。24—56は安山岩製の台石で、凹みが１カ所認められ、表面に擦過痕が確認できる。

以上より本住居址は平安時代に位置付けられる。

なお本住居址覆土中より縄文時代早期から中期の遺物が多量に出土している。詳細は第25・26・27・28図と第12・13・14表を参照されたい。他に時期不明の縄文土器12点、玄武

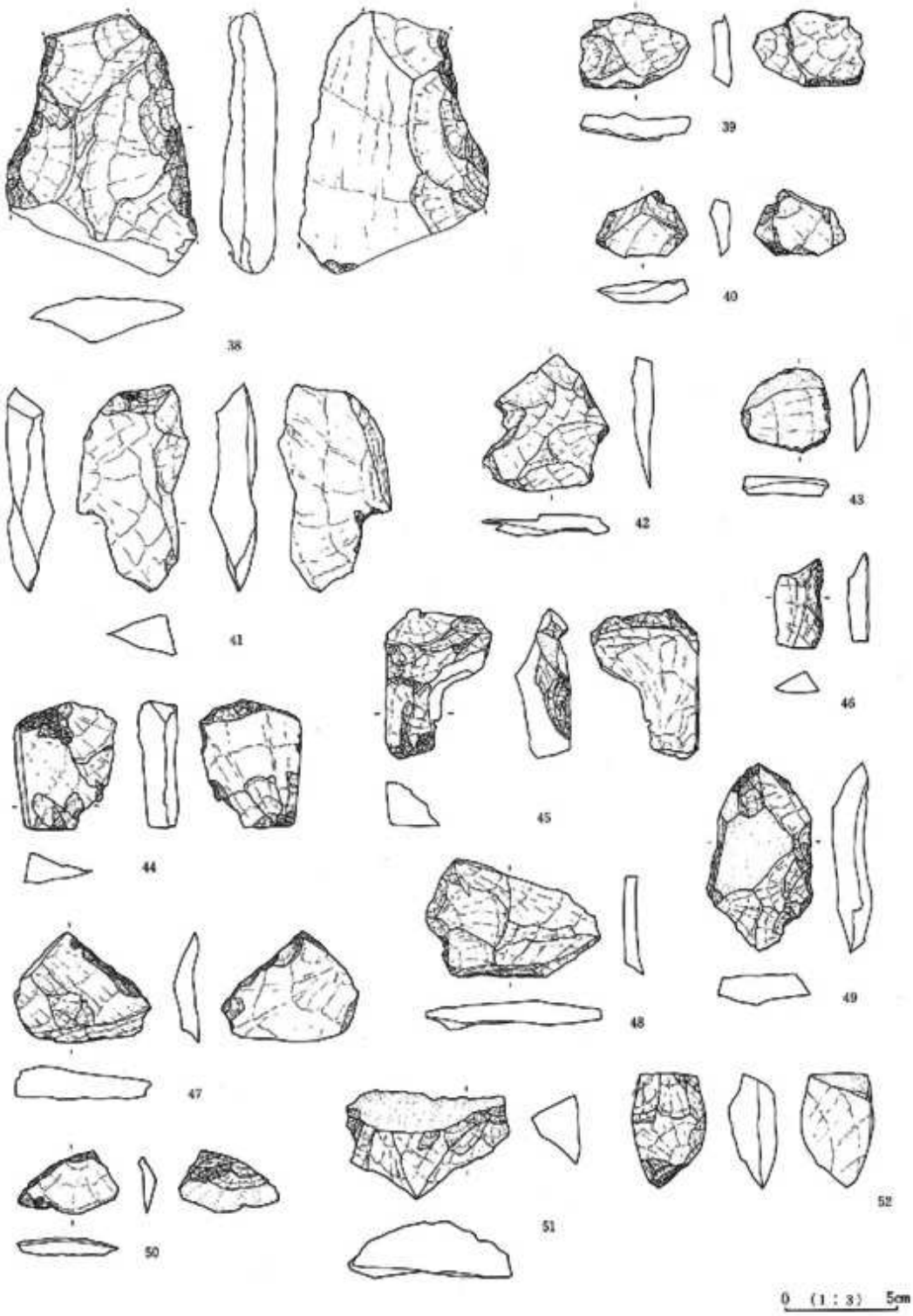
第12表　H3号住居址出土縄文土器一覧表

挿図番号	時　期	挿図番号	時　期	挿図番号	時　期
25- 1	前期末(諸磯)	25- 2	前期末(諸磯)	25- 3	前期(諸磯C)
25- 4	早期末撚糸	25- 5	前期末(諸磯)	25- 6	早期末撚糸
25- 7	前期末(諸磯)	25- 8	前期末(諸磯)	25- 9	前期末(諸磯)
25-10	前期(諸磯C)	25-11	前期(諸磯C)	25-12	——
25-13	前期末(諸磯)	25-14	前期末(諸磯)	25-15	早期末撚糸
25-16	前期末(諸磯)	25-17	前期末(諸磯)	25-18	前期末(諸磯)
25-19	前期末(諸磯)	25-20	前期末(諸磯)	25-21	——
25-22	前期末(諸磯)	25-23	前期末(諸磯)	25-24	前期末(諸磯)
25-25	前期末(諸磯)	25-26	前期(諸磯C)	25-27	——
25-28	前期中葉？	25-29	前期初頭	25-30	前期初頭
25-31	中期前葉	25-32	中期	25-33 34	前期中葉
25-35	前期中葉	25-36	前期初頭	25-37	前期初頭

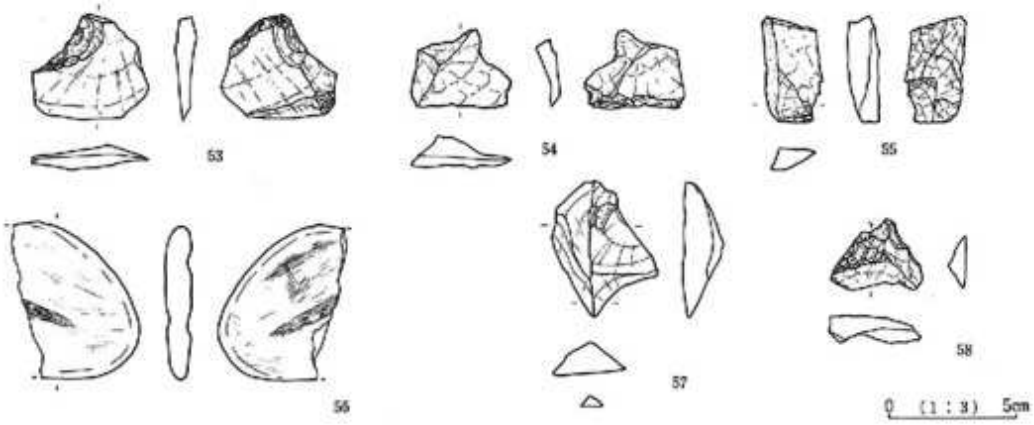


第25図　H３号住居址出土縄文土器拓影図

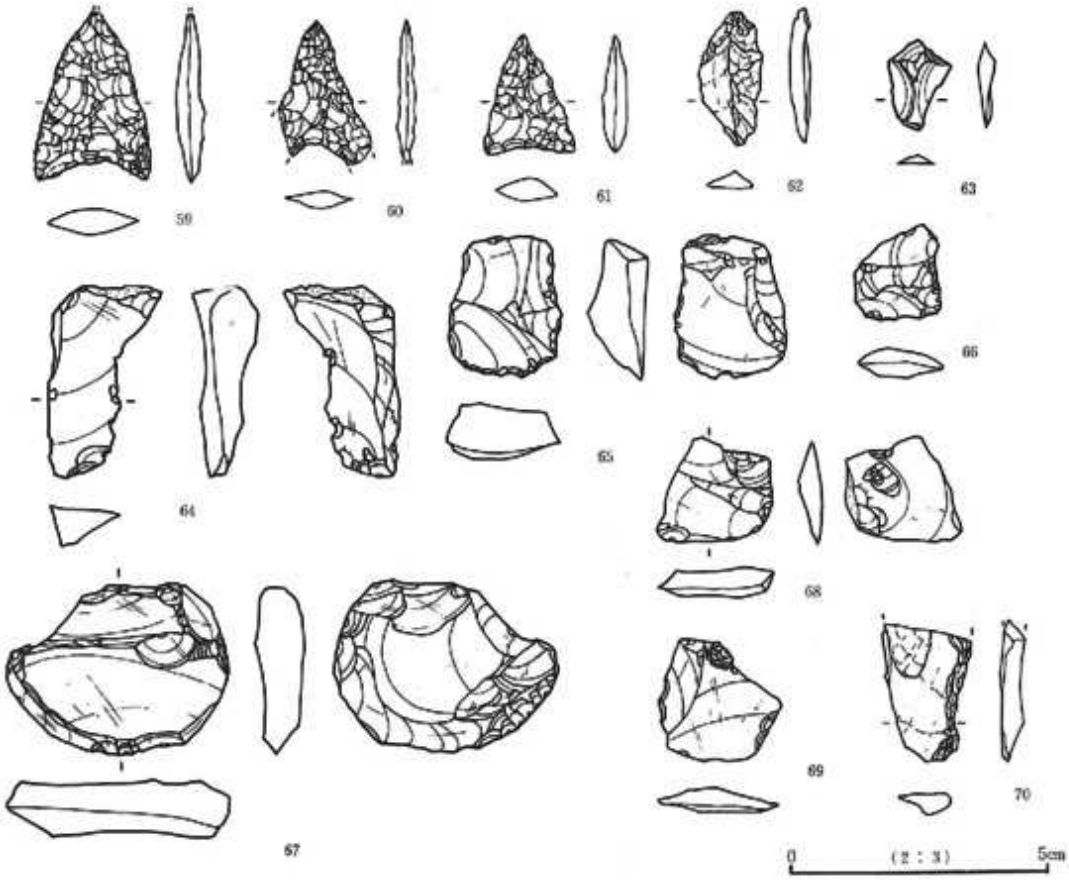
岩の石核12点・貝殻状剝片17点・縦長剝片５点・砕片３点・スクレパー１点、黒曜石の石核４点・貝殻状剝片３点・縦長剝片２点・砕片１点・チャートの石核１点・砕片１点・泥岩の砕片２点・安山岩の石核１点・横長剝片（貝殻状剝片を含む）５点・縦長剝片１点・砕片８点が出土している。なお27―56の砂岩製の砥石は形態・性格より平安時代の遺物とは考えられないため、有溝砥石として縄文時代の遺物であると認識した。



第26図　H３号住居址出土縄文時代遺物実測図



第27図　H３号住居址出土縄文時代遺物実測図



第28図　H３号住居址出土縄文時代遺物実測図

第13表　H3住居址出土縄文時代石器一覧表(1)

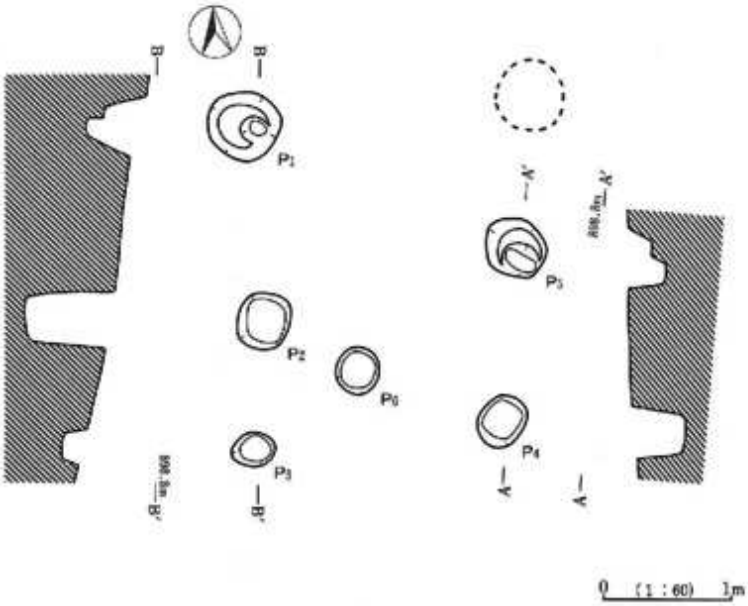
挿図番号	器種	石質	法量cm			備考
			長さ	巾	厚さ	
26-38	打製石斧	玄武岩	〈11.6〉	〈8.5〉	〈2.5〉	基部・刃部欠損
26-39	スクレパー	玄武岩	3.4	4.9	1.3	刃部両面に剥離調整 貝殻状剥片を利用
26-40	スクレパー	玄武岩	2.9	4.0	1.0	剥片石器、貝殻状剥片を利用
26-41	スクレパー	玄武岩	9.1	5.0	2.0	石核を利用 刃部の一辺に使用剥離痕
26-42	スクレパー	玄武岩	6.0	5.6	0.9	剥片石器、貝殻状剥片を利用 刃部に使用剥離痕
26-43	スクレパー	玄武岩	3.7	3.9	0.8	剥片石器、貝殻状剥片を利用 刃部の片面に剥離調整
26-44	サイド スクレパー	玄武岩	5.6	4.5	1.7	石核を利用 両極に調整有す
26-45	サイド スクレパー	玄武岩	6.7	4.7	2.4	石核を利用 刃部に剥離調整(階段状剥離)
26-46	サイド スクレパー	硬質 砂岩	3.9	2.1	1.0	剥片石器、縦長剥片を利用 刃部の片面に剥離調整
26-47	スクレパー	玄武岩	4.9	6.0	1.5	剥片石器、貝殻状剥片を利用 刃部に使用剥離痕
26-48	スクレパー	玄武岩	5.2	7.8	1.1	剥片石器、横長剥片を利用 刃部に剥離調整
26-49	打製石斧	玄武岩	8.3	4.6	1.5	未成品だが使用痕有
26-50	スクレパー	玄武岩	2.7	4.4	0.8	剥片石器、貝殻状剥片を利用
26-51	スクレパー	玄武岩	4.7	7.3	2.4	石核を利用 刃部に使用剥離痕
26-52	スクレパー	玄武岩	5.0	3.2	2.1	石核を利用 刃部の一部に剥離調整
27-53	スクレパー	玄武岩	4.0	4.4	0.8	剥片石器、貝殻状剥片を利用 加工痕有
27-54	スクレパー	玄武岩	3.0	3.8	1.3	剥片石器、貝殻状剥片を利用 加工痕有
27-55	サイド スクレパー	玄武岩	4.1	2.4	1.2	剥片石器、縦長剥片を利用 刃部に使用痕有
27-56	有溝砥石	砂岩	〈6.0〉	〈4.9〉	〈1.0〉	合計3条の溝を有す

第14表　H 3 号住居址出土縄文時代石器一覧表(2)

挿図番号	器　種	石　質	法　量cm			備　　考
			長さ	巾	厚さ	
27-57	スクレパー	硬質砂岩	5.2	4.1	1.5	使用剝離痕有す。石錐とも考えられる。
27-58	スクレパー	玄武岩	2.2	3.6	1.0	剝片石器、貝殻栽剝片を利用、使用痕有
28-59	石鏃	黒曜石	〈3.2〉	2.2	0.5	凹基無茎鏃、先端部欠損
28-60	石鏃	黒曜石	〈2.8〉	〈1.8〉	0.4	凹基無茎鏃、両脚部欠損
28-61	石鏃	黒曜石	2.2	1.8	0.5	凹基無茎鏃 抉りが小さく平基に近い
28-62	スクレパー	玄武岩	2.5	1.2	0.4	剝片石器、縦長剝片を利用 使用痕有す
28-63	スクレパー	黒曜石	1.65	1.25	0.15	剝片石器、砕片を利用 刃部に使用痕
28-64	サイド スクレパー	黒曜石	3.7	2.2	1.25	石核を利用、極部片方に加工痕 刃部に使用剝離痕
28-65	スクレパー	黒曜石	2.15	2.0	1.1	貝殻状剝片を利用 刃部両面に剝離調整
28-66	スクレパー	黒曜石	1.75	1.6	0.6	貝殻状剝片を利用 刃部に微調整
28-67	ラウンド スクレパー	黒曜石	3.3	4.3	0.95	剝離調整により刃部を形成 著しい使用痕有す
28-68	スクレパー	黒曜石	2.05	2.2	0.55	貝殻状剝片を利用 両辺に刃部を持つ。使用痕有す。
28-69	スクレパー	黒曜石	2.4	2.3	0.5	貝殻状剝片を利用 刃部に微調整
28-70	スクレパー	玄武岩	2.6	1.7	0.5	剝片石器、縦長剝片を利用。 刃部に使用痕

2　掘立柱建物址

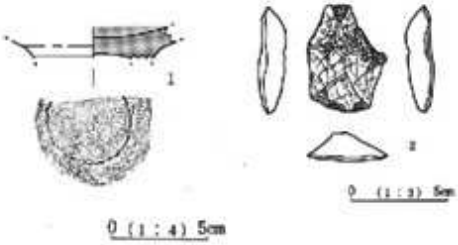
1）F1号掘立柱建物址



第29図　F1号掘立柱建物址実測図

F1号掘立柱建物址は、調査地B区の中央、い・う—19・20グリッド内に位置し、B区全体層序第3層上面において検出された。

本址は2間×1間(2.5m×2.0m)の掘立柱建物址である。主たる柱間はP_1—P_2で1.5m、P_3—P_4で2.0mを測る。主軸方位はN—6°—Eを指すと推定される。



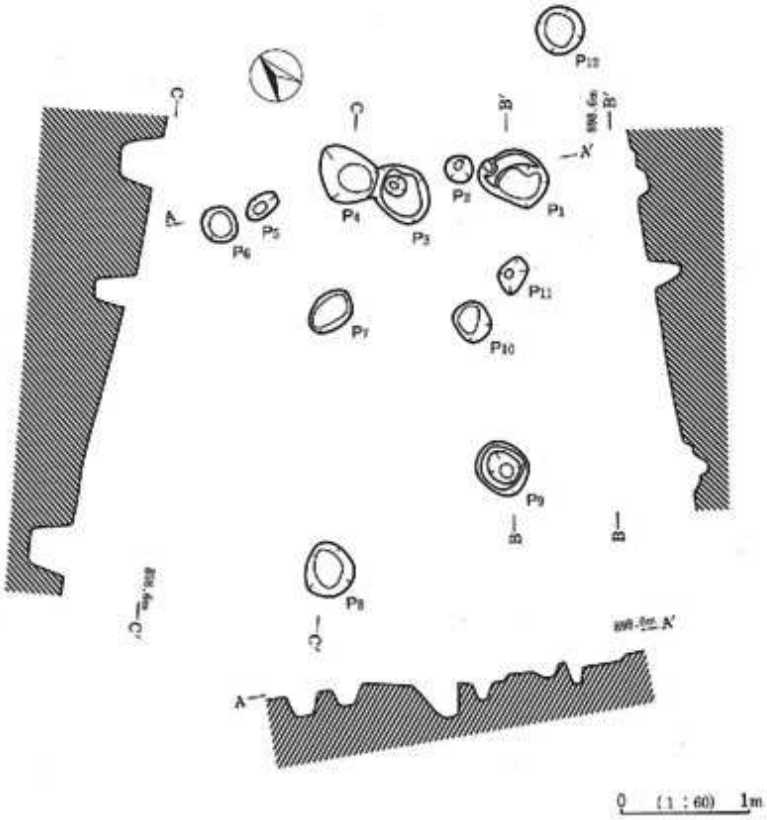
第30図　F1号掘立柱建物址出土遺物実測図

P_1は径54cm×57cmで深さ46cm、P_2は径45cm×41cmで深さ67cm、P_3は径26cm×35cmで深さ18cm、P_4は径41cm×39cmで深さ41cm、P_5は径45cm×50cmで深さ32cm、P_6は径38cm×35cmで深さ41cmを測る。また、P_5の北側にはピットが存在したと想定される。なおP_1—P_3の比高差は52cm、P_4—P_5では13cm、P_4—P_3では23cmを測る。このことより本建物址の建てられた土地は、北東より南西に向かって傾斜していることがわかる。

遺物は須恵質土器と縄文時代の石器が出土している。30—1は須恵質土器の坏で、内面に黒色研磨が施される。底部は回転糸切りが行われた後に高台が付される。30—2は玄武岩製のスクレパーで三辺に刃部が設けられ、内一辺が使用により磨耗している。

以上より本建物址は平安時代の所産期と考えられる。

2）F2号掘立柱建物址



第31図　F2号掘立柱建物址実測図

F2号掘立柱建物址は、調査地B区の中央、い・う—20・21グリッド内に位置し、B区全体層序第3層上面において検出された。

本址は2間×2間(1.8m×2.4m)の掘立柱建物址と考えられる。主たる柱間はP_1—P_3で0.75m、P_9—P_{11}で1.5mを測る。主軸方位はN—30°—Eを指すと推定される。

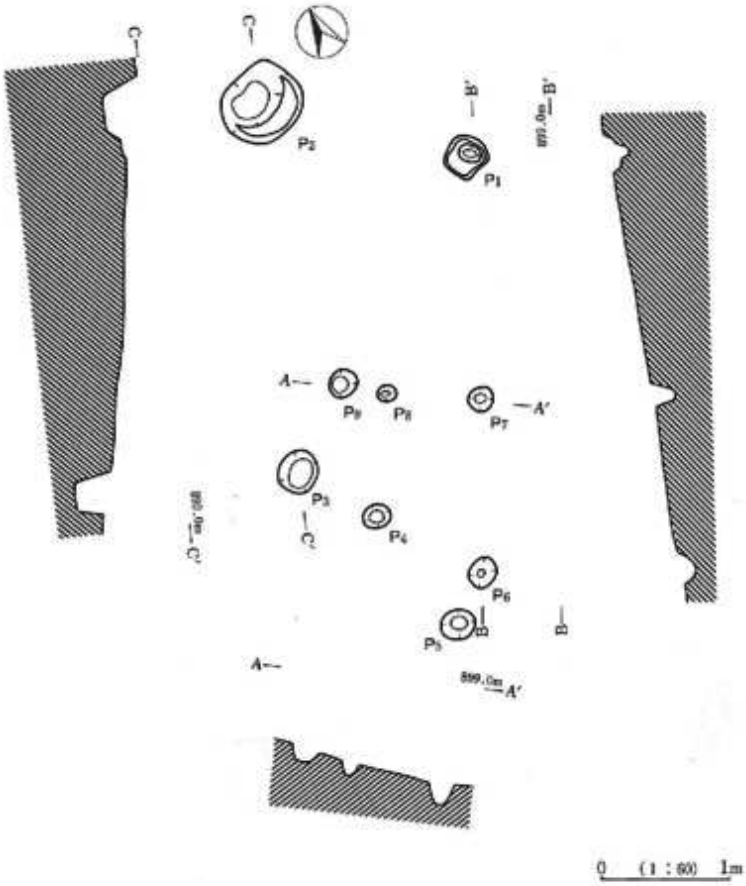
P_1は径47cm×54cmで深さ18cm、P_2は径21cm×23cmで深さ8cm、P_3は径48cm×41cmで深さ17cm、P_4は径50cm×40cmで深さ34cm、P_5は径17cm×27cmで深さ14cm、P_6は径30cm×27cmで深さ19cm、P_7は径27cm×39cmで深さ30cm、P_8は径42cm×39cmで深さ31cm、P_9は径45cm×38cmで深さ19cm、P_{10}は径31cm×27cmで深さ23cm、P_{11}は径20cm×27cmで深さ25cmを測る。またP_5—P_8の比高差は57cm、P_1—P_9で46cmを測り、北東より南西に向かって傾斜している。

なお本建物址の所産期は不明である。

3）F3号掘立柱建物址

F3号掘立柱建物址は、調査地B区の中央、い・う—21グリッド内に位置し、B区分全体層序第3層上面において検出された。

本址は不規則な2間×1間(3.2m×1.8m)の掘立柱建物址と考えられる。主たる柱間はP_1—P_2



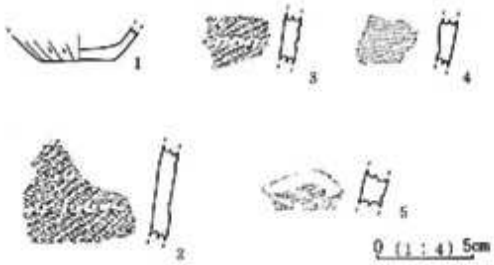
第32図　F3号掘立柱建物址実測図

で1.8m、P_1—P_7で1.9mを測る。主軸方位はN—26°—Eを指すと推定される。

P_1は径36cm×35cmで深さ20cm、P_2は径64cm×55cmで深さ27cm、P_3は径33cm×32cmで深さ20cm、P_4は径19cm×22cmで深さ14cm、P_5は径23cm×27cmで深さ12cm、P_6は径26cm×23cmで深さ11cm、P_7は径19cm×21cmで深さ18cm、P_8は径12cm×16cmで深さ12cm、P_9は径22cm×24cmで深さ12cmを測る。またP_2—P_3の比高差は64cm、P_1—P_5では53cmを測り、北東より南西に向かって傾斜している。

なお本住居址の所産期は不明である。

3　土坑

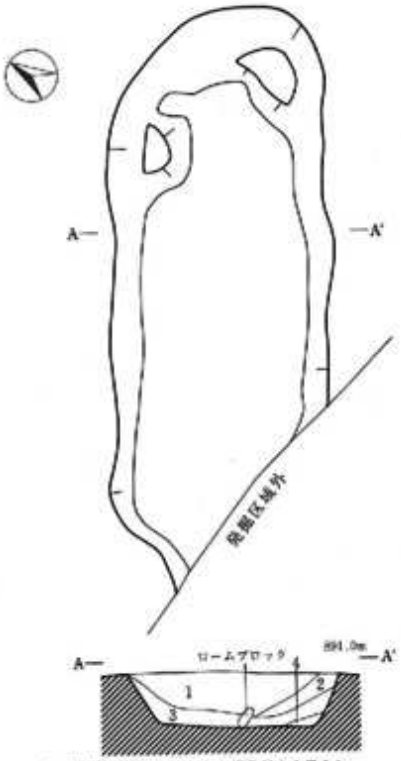


第33図　土坑出土遺物実測図・拓影図

1）D1号土坑

D1号土坑は、調査地A区の東側、し—2グリット内に位置し、A区全体層序第V層上において検出された。

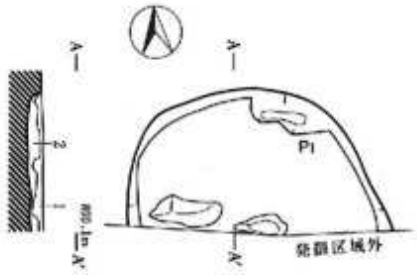
規模は364cm(現存値)×167cmで最深部は51cmを測る楕円型である。長軸方位は推定でN—59°—Eを指す。床面はやや凹凸が激しく、2カ所にテラスを有する。



1　黒褐色土層　スコリアと炭化材を少量含む。
2　褐色土層　ローム粒子と炭化材を少量含む。
3　黒褐色土層　炭化材をやや多く含む。
4　黒褐色土層　ローム粒子と炭化材を少量含む。

0　(1：60)　1m

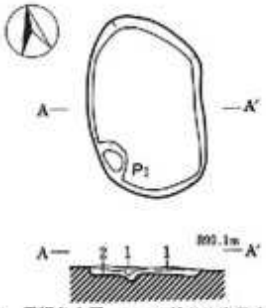
第34図　D1号土抗実測図



1　黒褐色土層　ローム粒子を微量含む。
2　褐色土層　ローム粒子・パミス小を少量含む。

0　(1：60)　1m

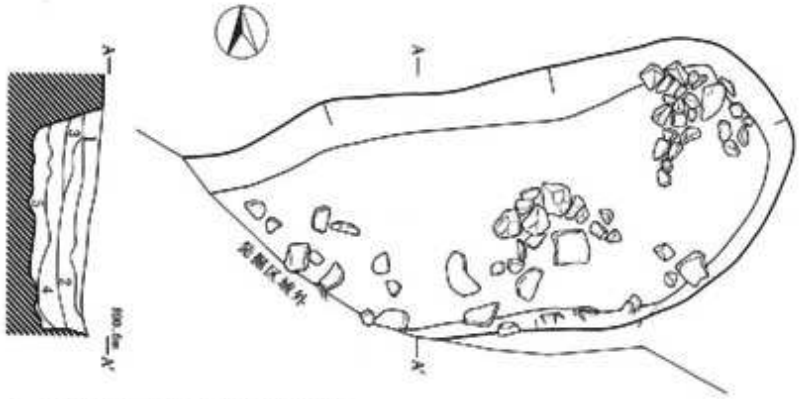
第35図　D3号土抗実測図



1　黒褐色土層　ローム粒子を微量含む。
2　褐色土層　ローム粒子・パミス小を少量含む。

0　(1：60)　1m

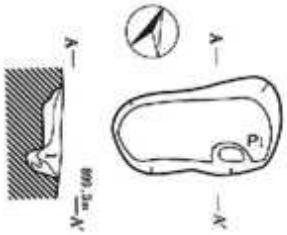
第36図　D4号土抗実測図



1　黒褐色土層　ローム粒子を微量含む。
2　黒色土層　炭化材を多量に含む。
3　黒色土層　炭化材を多量に、焼土粒子を少量含む。
4　黒褐色土層　ローム粒子・パミス小・炭化材を少量含む。
5　黄褐色土層　ローム主体。

0　(1：60)　1m

第37図　D2号土抗実測図



第38図 D5号土坑実測図

第39図 D6号土坑実測図

遺物は土師器の甕と縄文土器が出土している。33—1は土師器の甕の底部で外面にヘラケズリが施される。33—2・3は縄文時代前期中葉の土器で、33—4は不明である。

なお覆土や形態より、近世・近代の炭焼きの掘り込みの可能性がある。

2）D2号土坑

D2号土坑は、調査地A区の中央、さ—5とし—5・6グリッド内に位置し、A区全体層序第V層上において検出された。

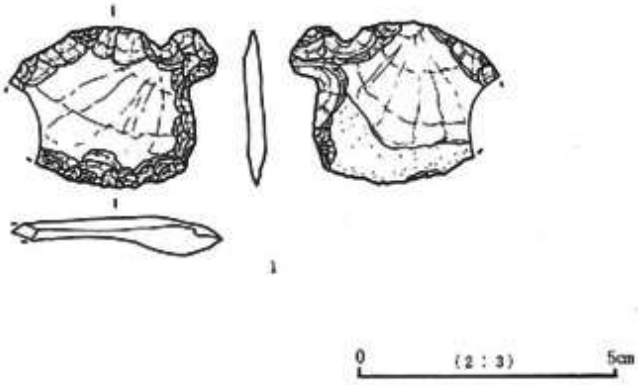
規模は393cm（現存値）×190cmで最深部は46cmを測る楕円形である。長軸方位は推定でN—30°—Eを指す。床面は凹凸が激しく、大小の礫が散乱していた。

なお覆土や形態より、近代・現代の炭焼きの掘り込みの可能性が強い。

3）D3号土坑

D3号土坑は、調査地B区の東側、う—17グリッド内に位置し、B区全体層序第3層上面において検出された。

規模は現存で200cm×111cm、最深部は12.5cmで円形を呈すると推定される。床面はおおむね平坦で、北壁際に深さ14cmのピットを有する。



第40図 第3号土坑出土石器実測図

遺物は土師器の甕片と石匙が出土している。40—1は縄文時代の玄武岩製の石匙で一部欠損し

ているが、刃部を中心に使用痕が認められる。

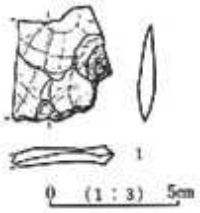
4）D4号土坑

D4号土坑は、調査地B区の東側、い—17グリッド内に位置し、B区全体層序第3層上面において検出された。

規模は140cm×90cmで最深部は20.5cmを測り、楕円形を呈する。長軸方位はN—0°—Wを指す。床面はおおむね平坦で、南西隅にピットを有する。

なお遺物は出土しなかった。

5）D5号土坑



第41図 D5号土坑出土石器実測図

D5号土坑は、調査地B区の東側、あ・い—17グリッド内に位置し、B区全体層序第3層上面において検出された。

規模は130cm×63cmで最深部は24.5cmを測り、楕円形を呈する。長軸方位はN—62°—Eを指す。床面はおおむね平坦で、南壁際にピットを有する。

遺物は土師器の甕の細片、須恵器の甕の細片、縄文土器、石器が出土している。33—5は縄文時代早期の土器片である。41—1は玄武岩製のスクレパーで約半分を欠損している。刃部には使用痕が認められる。

6）D6号土坑

D6号土坑は、調査地B区東側、あ—16・17グリッド内に位置し、B区全体層序第3層上面において検出された。

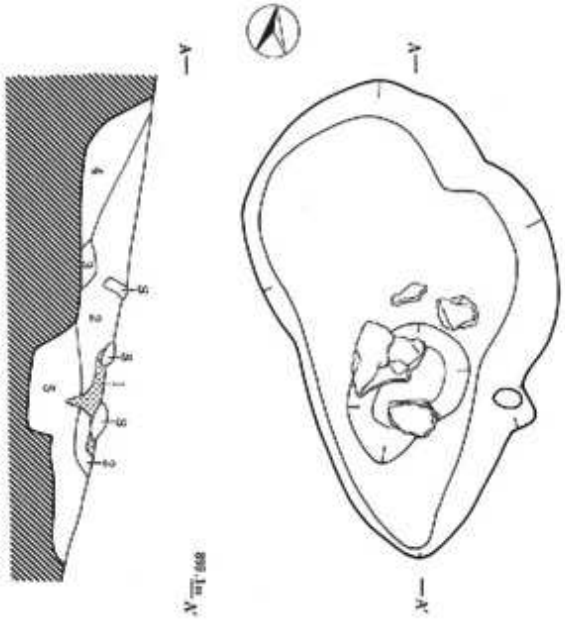
規模は218cm×64cmで最深部は15cmを測り、溝状の楕円形を呈する。長軸方位はN—38°—Eを指す。床面はやや凹凸が見られる。

遺物は出土しなかった。

4 特殊遺構

1）第1号特殊遺構

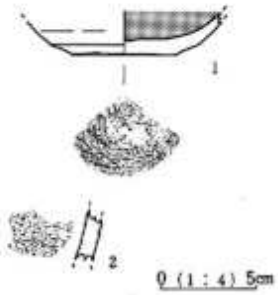
第1号特殊遺構は、調査地B区の中央、い—21グリッド内に位置し、B区全体層序第3層上面において検出された。



1　赤褐色土層　焼土主体。炭化粒子微量含む。
2　黒褐色土層　焼土粒子微量含む。
3　褐色土層　ローム粒子をやや多く、焼土粒子を少量含む。
4　暗褐色土層　ローム粒子を少量含む。
5　褐色土層　焼土粒子を多量に含む。

0　(1：30)　50cm

第42図　第1号特殊遺構実測図



0 (1：4) 5cm

第43図　第1号特殊遺構出土遺物
実測図・拓影図

規模は186cm×107cmで最深部は25.5cmを測る。平面形態は不整楕円形を呈する。長軸方位はN－15°－Wを指す。

覆土は5層に分割された。第1層は焼土主体で炭化粒子を微量含む赤褐色土、第2層は焼土粒子を微量含む黒褐色土、第3層はローム粒子をやや多く、焼土粒子を少量含む褐色土、第4層はローム粒子を少量含む暗褐色土、第5層は焼土粒子を多量に含む褐色土である。

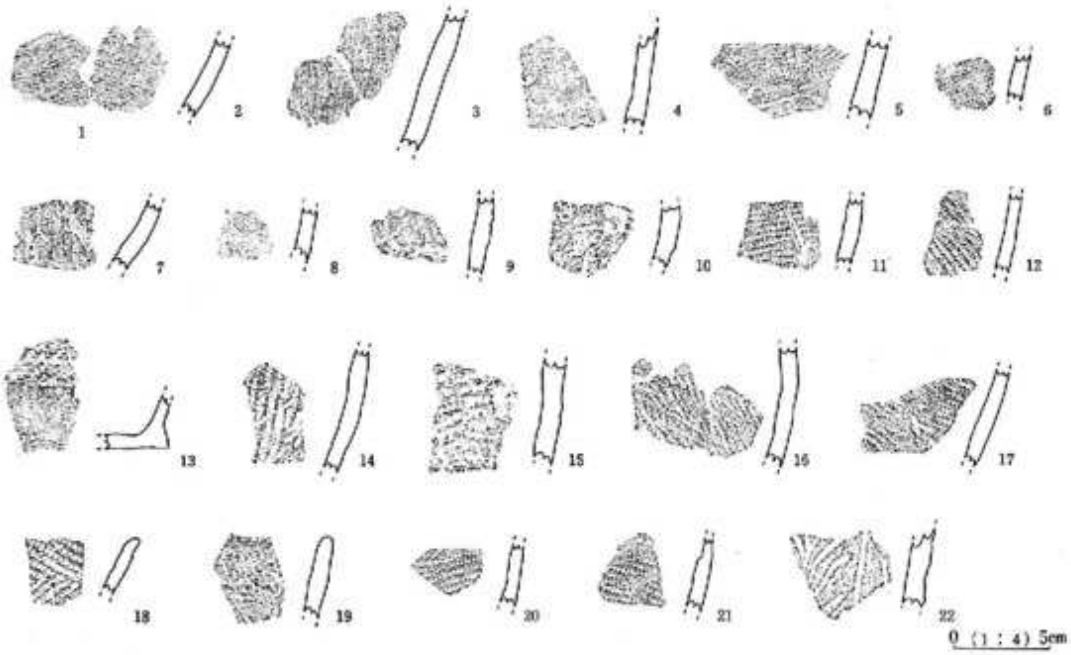
以上、覆土・形態より屋外炉と考えられる。

遺物は土師器の甕の破片と坏、須恵器の甕の細片、縄文土器が出土している。43－1は土師器の坏で、底部に回転糸切りが行れ、内面に黒色研磨が施される。43－2は縄文時代前期初頭の土器である。

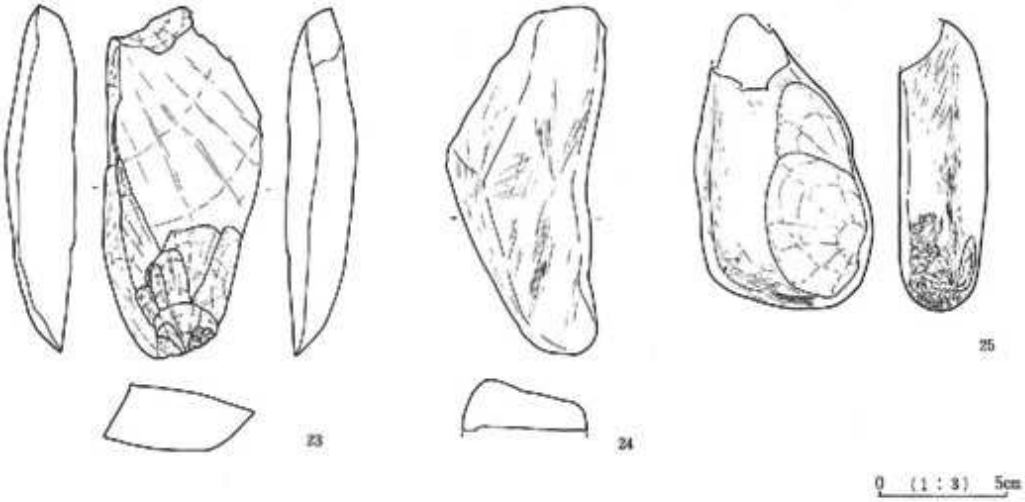
以上より本遺構は平安時代に位置付けられる。

5　縄文時代の遺物

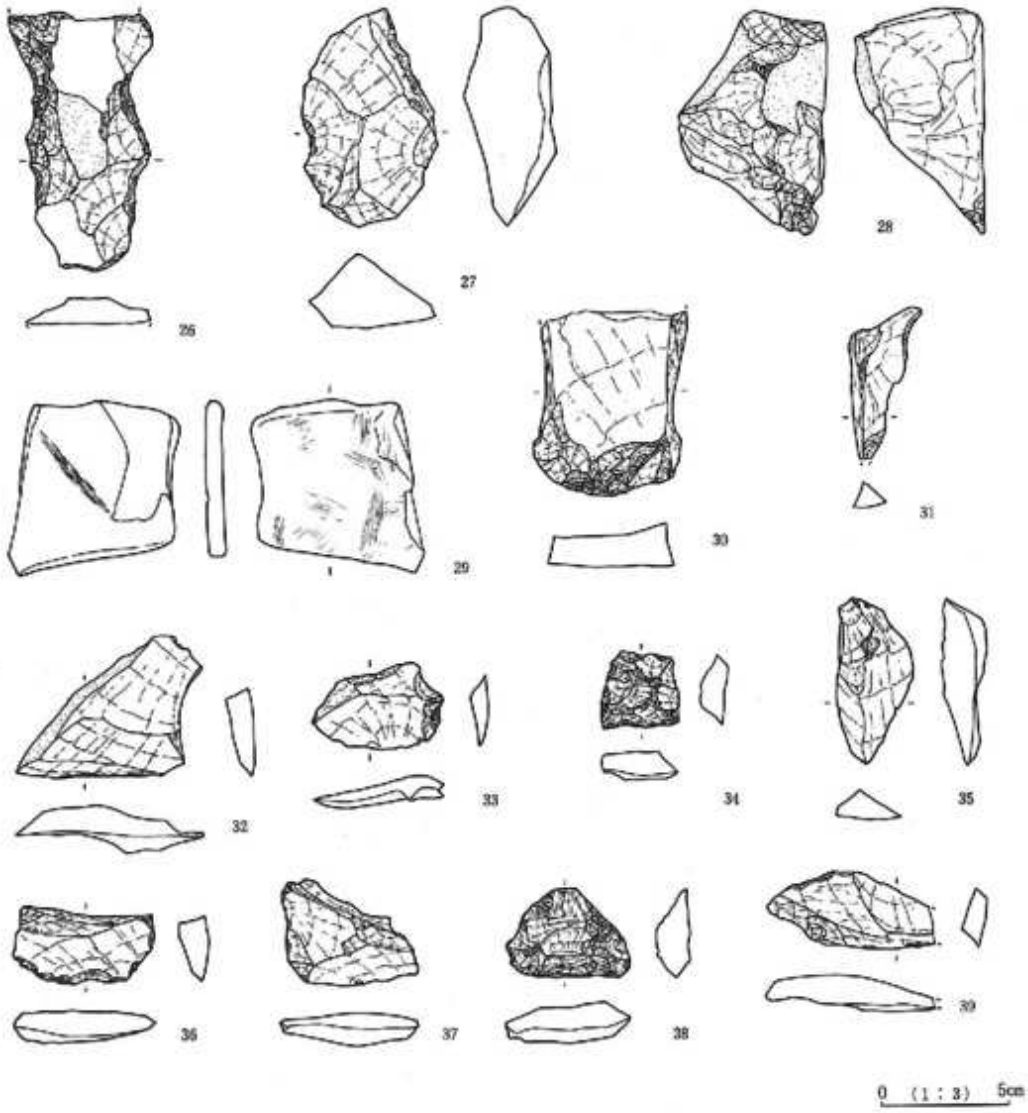
1）A区集中分布地区



第44図　A区集中分布出土縄文土器拓影図



第45図　A区集中分布地区出土縄文時代遺物実測図



第46図　A区集中分布地区出土縄文時代遺物実測図

第15表　A区集中分布地区出土縄文土器一覧表(1)

挿図番号	時　期	挿図番号	時　期	挿図番号	時　期
44- 1	早期末？(条痕文)	44- 2	早期末？(条痕文)	44- 3	早期末？(条痕文)
44- 4	中期？	44- 5	中期	44- 6	——
44- 7	——	44- 8	前期初頭？	44- 9	早期末(貝殻後円文)
44-10	早期末～前期初頭	44-11	——	44-12	早期中葉

第16表　A区集中分布地区出土縄文土器一覧表(2)

挿図番号	時　期	挿図番号	時　期	挿図番号	時　期
44-13	前期中葉	44-14	早期末～前期初頭	44-15	早期末～前期初頭
44-16	早期中葉	44-17	早期中葉	44-18	前期中葉
44-19	早期末～前期初頭	44-20	——	44-21	早期中葉
44-22	中期(曽利)				

第17表　A区集中分布地区出土縄文時代石器一覧表(1)

挿図番号	器　種	石　質	法　量cm			備　考
			長さ	巾	厚さ	
45-23	大型粗製スクレパー	玄武岩	13.6	6.1	2.7	片面が原石面、大型剥片を利用
45-24	砥　石	安山岩	13.5	5.5	〈2.3〉	表面に擦過痕
45-25	敲　石	安山岩	〈11.3〉	6.6	3.4	表面に擦察過痕、一部分に著しい敲打痕 石器加工用か？
46-26	打製石斧	安山岩	10.0	5.5	〈1.0〉	未成品、剥離調整中に欠損
46-27	打製石斧	玄武岩	8.4	5.1	3.4	未成品
46-28	石　核	玄武岩	8.7	5.7	4.9	
46-29	有溝砥石	安山岩	6.6	6.6	0.65	剥落欠損部２ヶ所有、１条の溝有
46-30	打製石斧	玄武岩	7.0	5.7	1.7	基部を切損、刃部調整段階で放棄
46-31	石　錐	玄武岩	〈5.8〉	2.8	1.2	先端部欠損、出土時は２つに切損
46-32	スクレパー	玄武岩	5.4	7.2	1.8	大型貝殻状剥片を利用 刃部に細部調整有す
46-33	スクレパー	玄武岩	3.3	5.1	0.95	貝殻状剥片を利用 刃部に使用痕有す
46-34	スクレパー	玄武岩	3.0	3.0	1.1	両面に入念な調整 刃部を中心に使用痕
46-35	スクレパー	玄武岩	6.4	2.9	1.75	縦長剥片を利用 刃部を中心に使用痕
56-36	スクレパー	玄武岩	3.0	6.4	1.2	貝殻状剥片を利用 刃部に細部調整

第18表　A区集中分布地区出土縄文時代石器一覧表(2)

挿図番号	器種	石質	法量cm			備考
			長さ	巾	厚さ	
46-37	スクレパー	玄武岩	4.1	5.2	1.25	貝殻状剥片を利用 刃部を中心に使用痕
46-38	スクレパー	硬質砂岩	3.4	4.8	1.55	両面に入念な剥離調整 刃部を中心に使用痕
46-39	スクレパー	玄武岩	3.0	〈6.5〉	1.2	刃部にわずかな細部調整

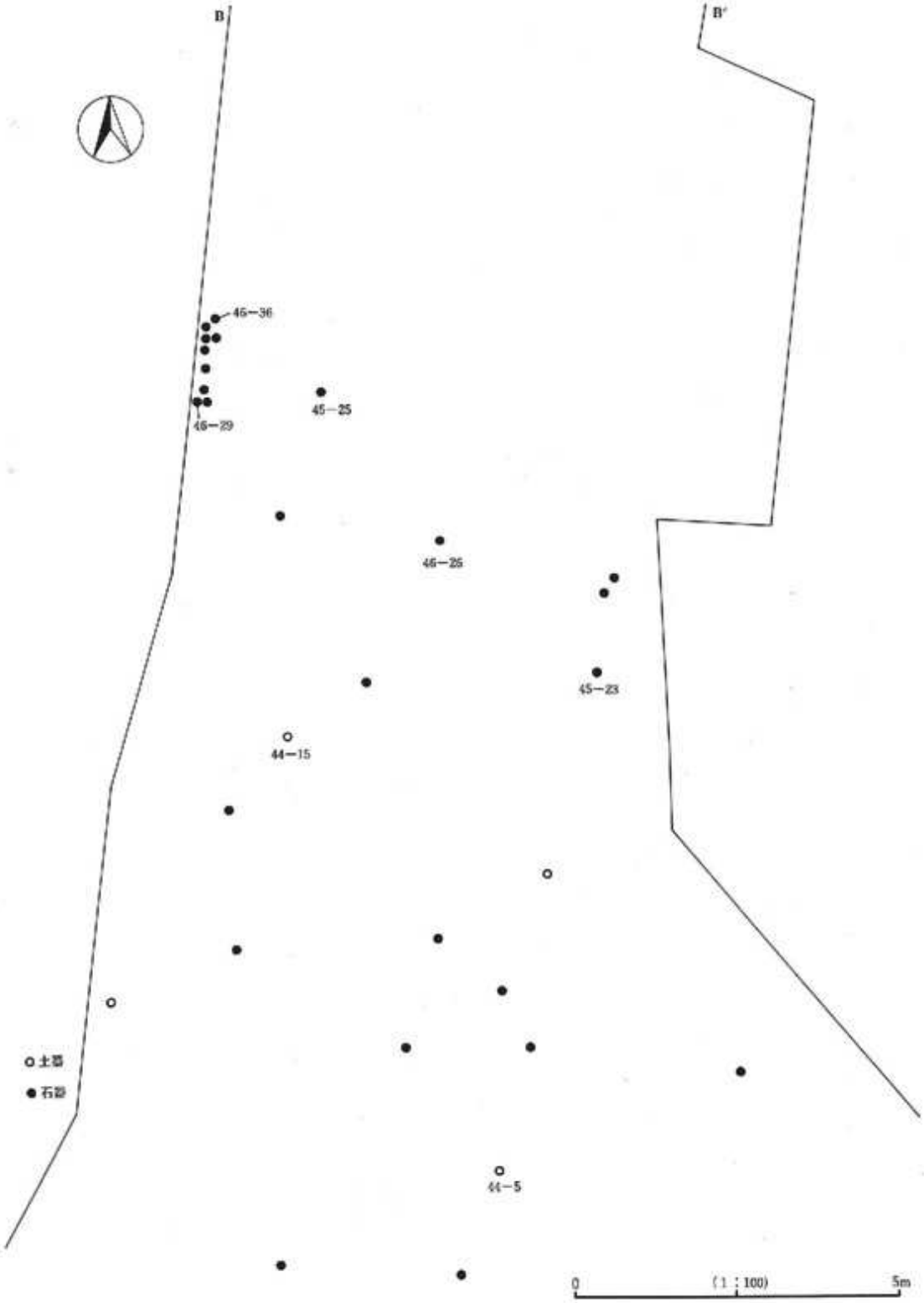
今回、縄文時代の遺構は検出されなかったが、調査地A・B区ともに、縄文時代早期から中期の遺物が出土している。その内A区については出土位置を明確にした。

A区第1地点からは、縄文時代中期の土器（44—5）・早期末～前期初頭の土器（44—15）、スクレパー（45—23、46—36）、敲石（45—25）、有溝砥石（46—29）が出土している。なお詳細は第15～18表を参照されたい。また他に、時期不明の縄文土器細片2点と、玄武岩製の貝殻状剥片5点・横長剥片1点・不整形剥片1点・石核4点・スクレパー未成品1点、安山岩製の横長剥片3点・不整形剥片2点・石核3点、泥岩製の剥片1点が出土している。

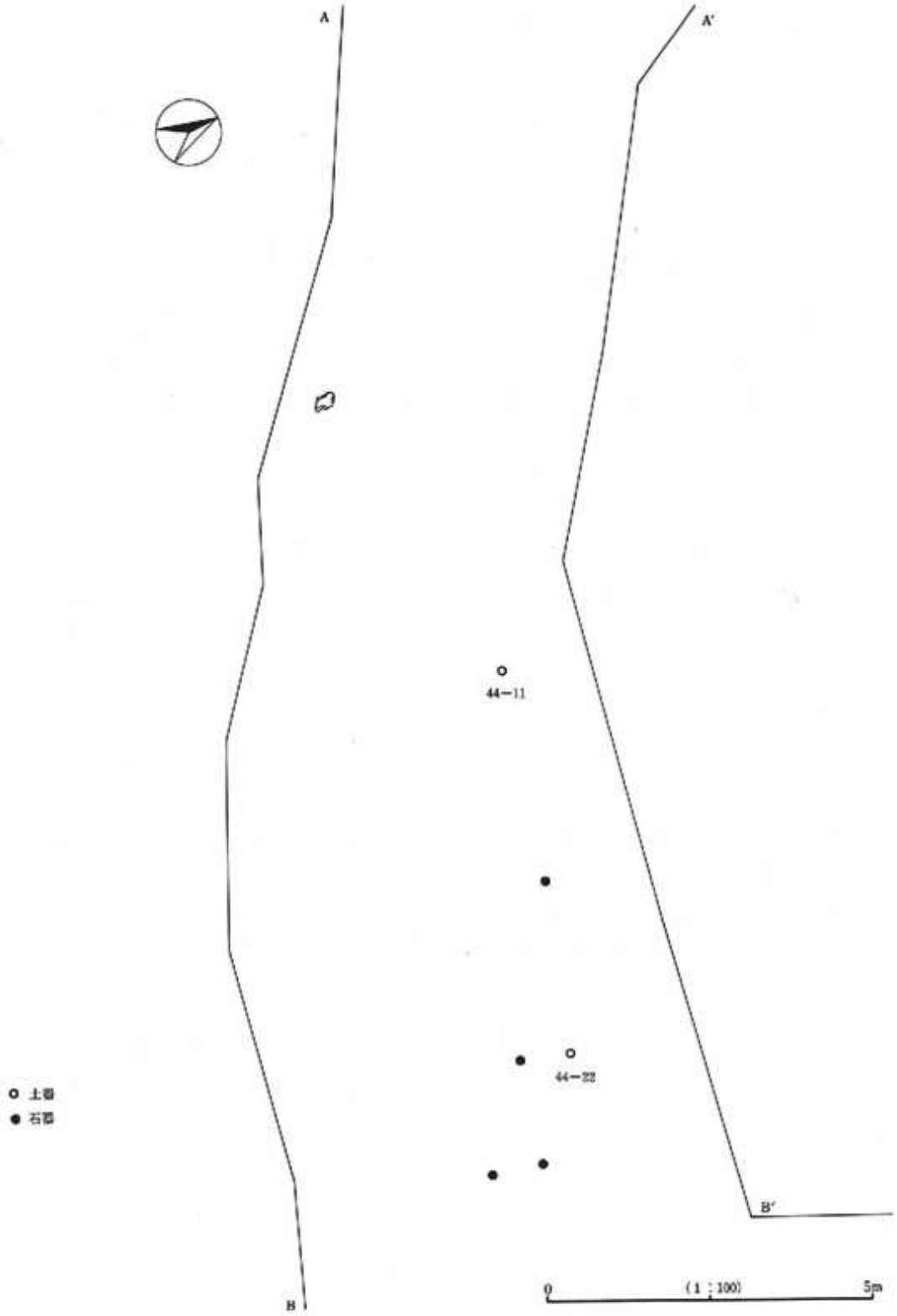
A区第2地点からは、縄文時代中期の土器（44—22）と時期不明の土器（44—11）が出土している。また他に、玄武岩製の貝殻状剥片2点・横長剥片1点・不整形剥片1点が出土している。

A区第3地点からは、縄文時代早期中葉の土器（44—12・16・17・21）と早期末の土器（44—1～3・9）・早期末～前期初頭の土器（44—10・14・19）・前期初頭の土器（44—8）・前期中葉の土器（44—13・18）・中期の土器（44—4）・時期不明の土器（44—6・7・20）、スクレパー（46—32～35・37～39）、打製石斧（46—26・27・30）、石核（46—28）、石錐（46—31）が出土している。なお詳細は第14～17表を参照されたい。また他に、時期不明の縄文土器の細片5点と、玄武岩製の石核10点・貝殻状剥片26点・縦長剥片5点、不整形剥片5点・スクレパー未成品2点、黒曜石製の石核1点・貝殻状剥片3点、安山岩製の石核1点・貝殻状剥片1点・縦長剥片1点・砕片1点・礫4点・角礫1点・不整剥片8点、泥岩製の不整形剥片4点が出土している。

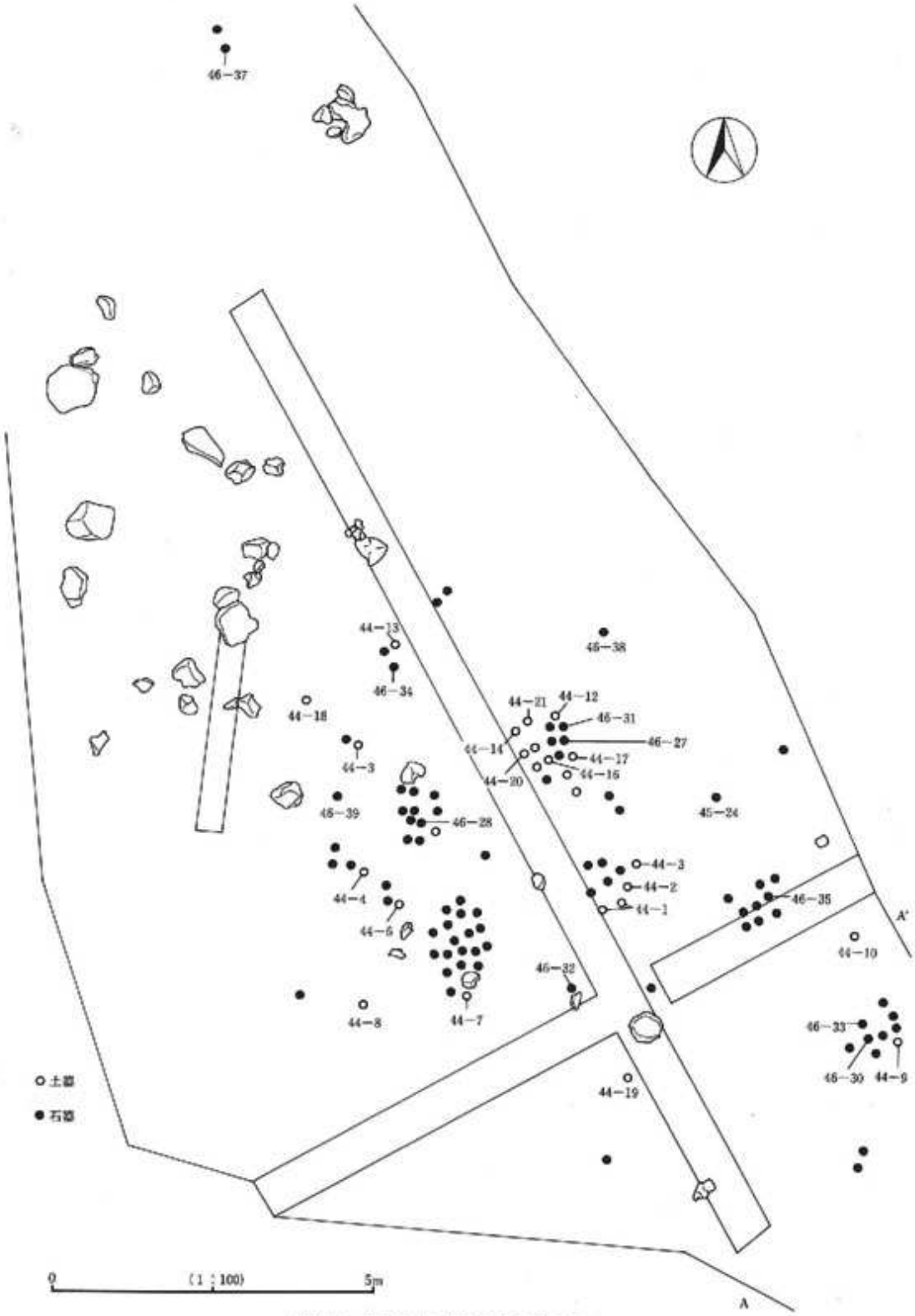
A区第3地点に特に遺物が多かったため、33m×1.3mと21m×1.3m、6m×0.8mの3本のトレンチを設定し、黄褐色ローム層を40cm程度掘り下げた。しかし遺構を確認することはできなかった。トレンチからは、縄文時代早期末の土器（50—40・46）・早期末～前期初頭の土器（50—41・49）・前期初頭の土器（50—45・47・48）・前期中葉の土器（50—42・43）・時期不明の土器（50—44）、石錐（52—39）、スクレパー（54—58）が出土している。また他に、安山岩製の角礫1点・小礫3点・有溝砥石1点・貝殻状剥片1点と、玄武岩製の石核1点・横長剥片1点・スクレパー未成品1点が出土している。



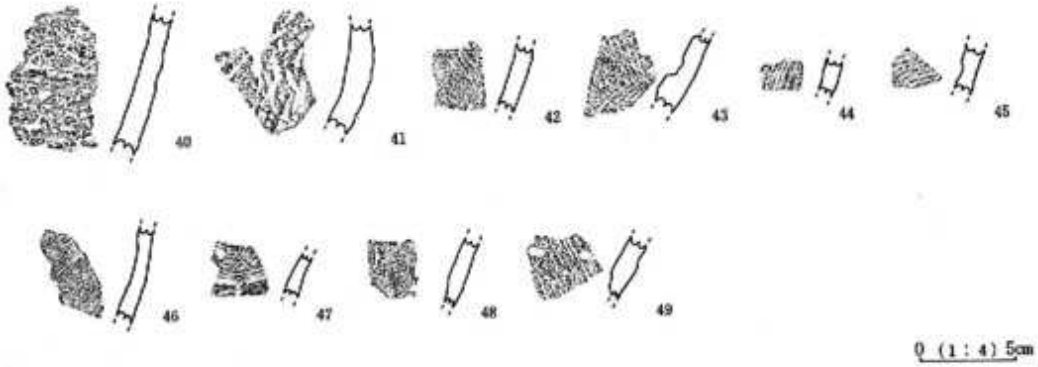
第47図　A区第1地点縄文時代遺物分布図



第48図　A区第２地点縄文時代遺物分布図



第49図　A区第3地点縄文時代遺物分布図



第50図　A区第３地点トレンチ出土縄文土器拓影図

第19表　A区第３地点トレンチ出土縄文土器一覧表

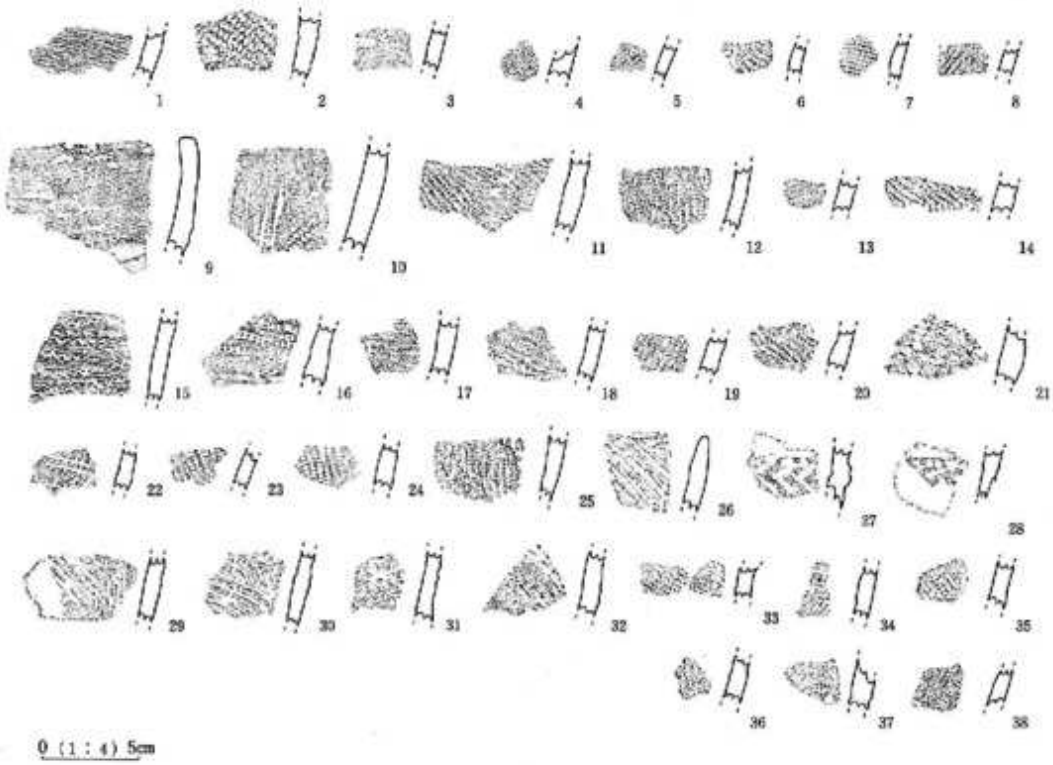
挿図番号	時　期	挿図番号	時　期	挿図番号	時　期
50-40	早期末	50-41	早期末～前期初頭	50-42	前期中葉
50-43	前期中葉	50-44	——	50-45	前期初頭
50-46	早期末	50-47	前期初頭	50-48	前期初頭
50-49	早期末～前期初頭				

以上より、A区第３地点は、遺物の出土状況および剥片数・未成品等を考慮すると、縄文時代早期・前期の石器製造址的な性格を持つ工房址と考えられそうである。

6　グリッドおよび表採

1）調査地A区

調査地A区からは、縄文時代早期中葉の土器（51—8・11・12・18・19・23～25・33・36～38）、早期末の土器（51—15・16・21）、早期前葉～中葉の土器（51—27・28）、前期初頭の土器（51—２）、前期中葉の土器（51—14）、前期の土器（51—26・30）、中期の土器（51—９・10）、時期不明の土器（51—３～７・13・17・20・22・34・35）が出土し、第３地点より出土したものは、51—１～４・27・28・30・33～38である。また石器では、玄武岩製の石錐（52—40）・スクレパー（52—41、53—49・53）・打製石斧（53—43）・サイドスクレパー（53—46、54—60）、安山岩製の砥石（53—47）・スクレパー（54—61）、泥質砂岩製の磨製石斧（53—48）、泥岩製の砥石



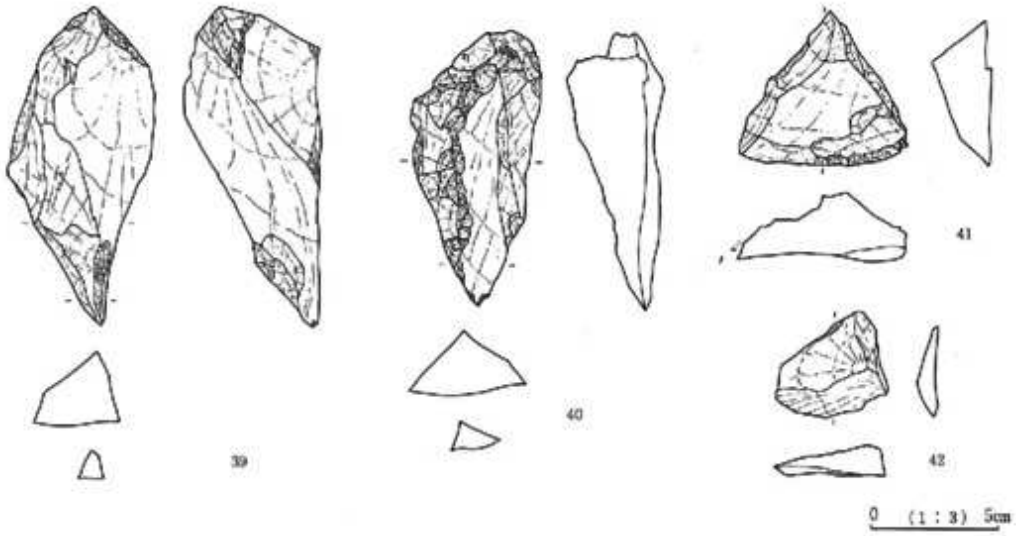
第51図　グリッドおよび表採縄文土器拓影図

第20表　グリッドおよび表採縄文土器一覧表(1)

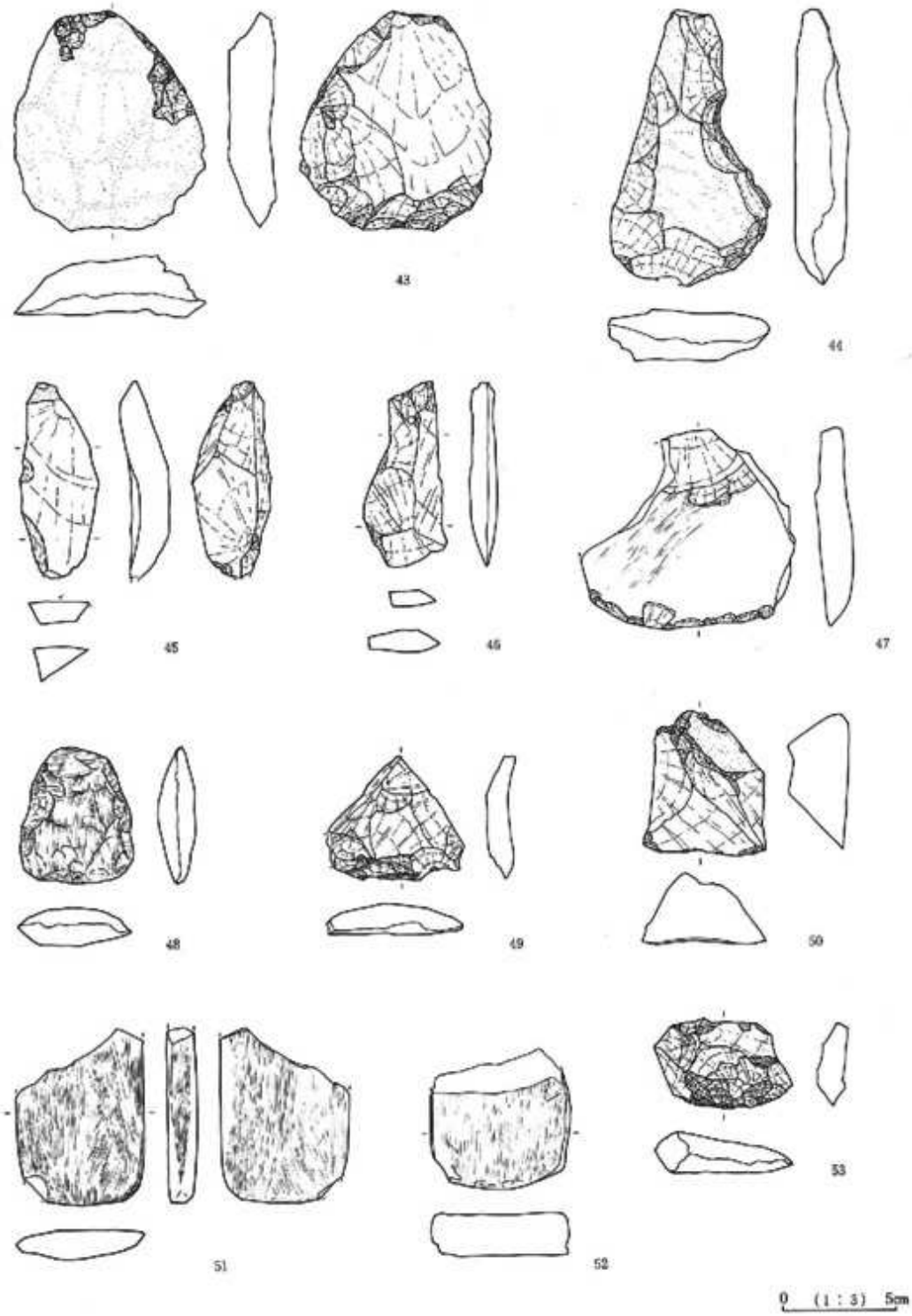
挿図番号	出土位置	時　期	挿図番号	出土位置	時　期
51-1	A区 第3地点	早期末	51-2	A区 第3地点	前期初頭
51-3	A区 第3地点	——	51-4	A区 第3地点	——
51-5	A区 表採	——	51-6	A区 表採	——
51-7	A区 表採	——	51-8	A区 表採	早期中葉
51-9	A区 表採	中期	51-10	A区 表採	中期
51—11	A区 表採	早期中葉	51-12	A区 表採	早期中葉
51-13	A区 表採	——	51-14	A区 表採	前期中葉
51-15	A区 表採	早期末(貝殻後円文)	51-16	A区 表採	早期末(絡条帯)

第21表　グリッドおよび表採縄文土器一覧表(2)

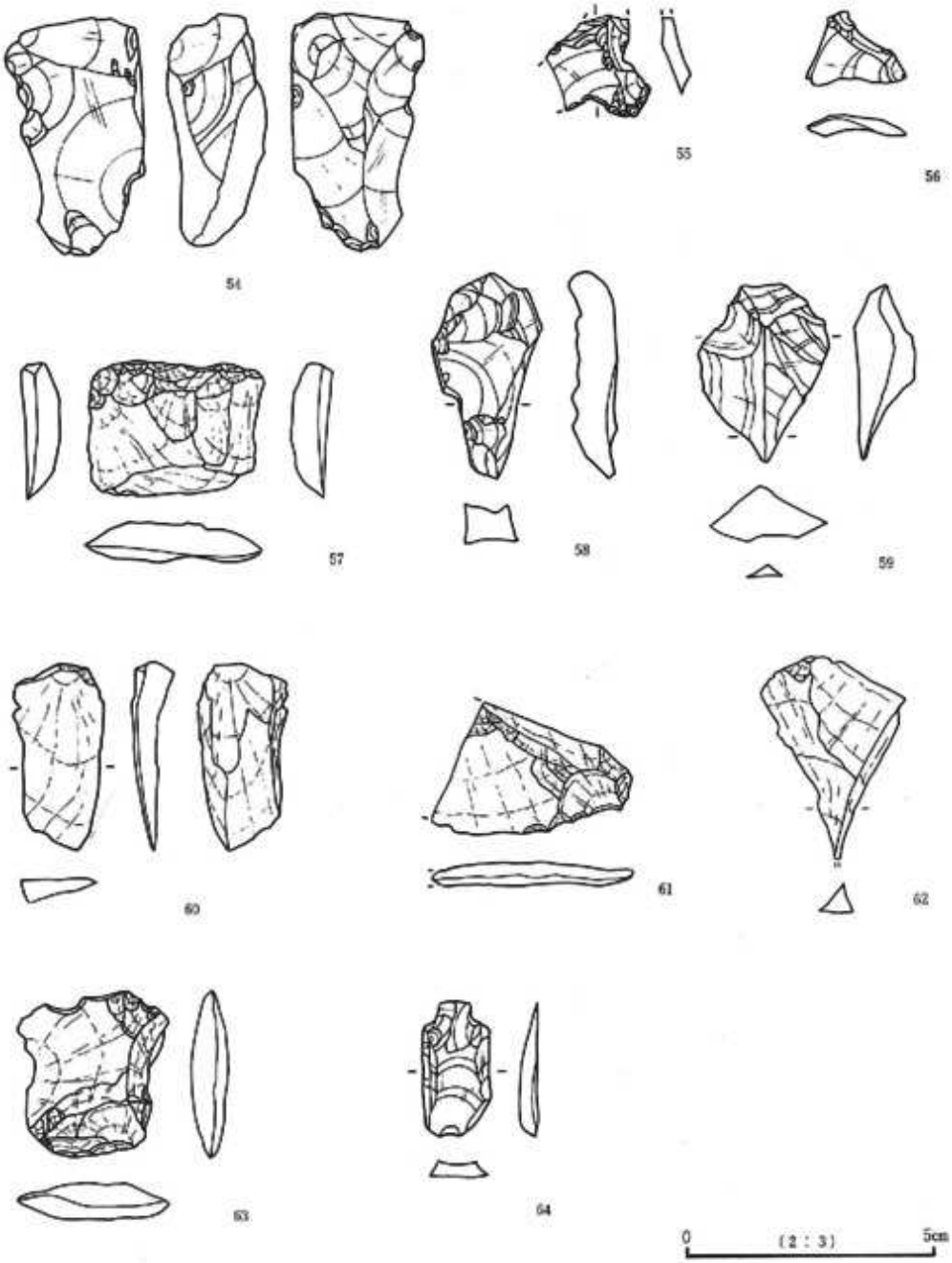
挿図番号	出土位置	時　期	挿図番号	出土位置	時　期
51-17	A区表採	——	51-18	A区表採	早期中葉
51-19	A区表採	早期中葉	51-20	A区表採	——
51-21	A区表採	早期末	51-22	A区表採	——
51-23	A区表採	早期中葉	51-24	A区表採	早期中葉
51-25	A区表採	早期中葉	51-26	B区表採	前期
51-27	こ—10	早期前葉～中葉(田戸)	51-28	こ—10	早期前葉～中葉(田戸)
51-29	う—20	前期	51-30	こ-10	前期(諸磯)
51-31	え—23	早期末(絡条帯)	51-32	う—20	——
51-33	こ—10	早期中葉	51-34	こ—10	——
51-35	け—10	——	51-36	こ—10	早期中葉
51-37	こ—10	早期中葉	51-38	こ—10	早期中葉



第52図　グリッドおよび表採遺物実測図



第53図　グリッドおよび表採遺物実測図



第54図　グリッドおよび表採遺物実測図

(53—52)、黒曜石製の石核（54—54）・石鏃（54—55）・スクレパー（54—56・64）、チャート製の石錐(54—59)が出土し、第3地点より出土したものは、52—41と53—43・47・48・52、54—54～56・59・61・64である。A区全体でその他に、玄武岩製の石核19点・砕片30点・貝殻状剝片57点・横長

第22表　グリッドおよび表採石器一覧表(1)

挿図番号	器種	石質	法量cm 長さ	巾	厚さ	出土位置	備考
52-59	石錐	玄武岩	12.3	5.7	5.2	A区 トレンチ内	石核を利用 スクレパーとしても使用か
52-40	石錐	玄武岩	10.6	5.1	3.7	A区 表採	石核を利用 スクレパーとしても使用
52-41	スクレパー	玄武岩	6.0	6.5	2.4	こ—10	石核を利用 刃部に剥離調整
52-42	スクレパー	玄武岩	4.1	4.3	1.25	B区 表採	貝殻状剥片を利用 刃部に使用剥離痕
53-43	打製石斧	玄武岩	9.5	8.3	2.7	こ—9	大型剥片を利用 片面は原石面
53-44	打製石斧	玄武岩	12.1	7.0	2.35	え—21	数ケ所に原石面を残す 刃部を中心に使用磨滅痕
53-45	サイドスクレパー	玄武岩	8.6	3.5	1.6	お—27	縦長剥片を利用 刃部に使用痕
53-46	サイドスクレパー	玄武岩	8.1	3.6	1.25	A区 表採	縦長剥片を利用 刃部に使用痕
53-47	砥石	安山岩	8.7	〈9.3〉	1.5	こ—9	ストーンリタッチャーの可能性有 表面に擦過痕
53-48	磨製石斧	泥質砂岩	6.0	5.0	1.7	こ—9	表面に研磨痕 刃部に使用痕
53-49	スクレパー	玄武岩	5.4	〈6.0〉	1.4	A区 表採	貝殻状剥片利用 刃部に階段状剥離
53-50	スクレパー	玄武岩	6.4	5.4	3.1	B区 表採	石核を利用 刃部微調整
53-51	砥石	砂岩	〈7.7〉	〈5.6〉	1.3	う—18	二面砥
53-52	砥石	泥岩	〈6.1〉	6.1	1.9	こ—9	二面砥
53-53	スクレパー	玄武岩	3.9	6.0	1.8	A区 表採	両面に入念な剥離調整
54-54	石核	黒曜石	4.7	2.6	1.8	こ—9	
54-55	石鏃	黒曜石	〈2.1〉	〈2.2〉	0.4	A区 第3地点	調整段階で切損，放棄
54-56	スクレパー	黒曜石	1.5	2.0	0.4	こ—9	貝殻状剥片利用 刃部に使用剥離痕
54-57	スクレパー	玄武岩	2.7	3.5	0.8	A区 表採	三辺が刃部 両面剥離調整

第23表　グリッドおよび表採石器一覧表(2)

挿図番号	器種	石質	法量cm			出土位置	備考
			長さ	巾	厚さ		
54-58	スクレパー	黒曜石	4.1	2.3	0.85	A区 トレンチ内	石核を利用 刃部に使用痕
54-59	石錐	チャート	3.5	2.6	1.2	こ－9	スクレパーとしても使用 刃部に使用剥離痕
54-60	サイド スクレパー	玄武岩	3.8	1.7	0.8	A区 表採	縦長剥片を利用 刃部に使用痕
54-61	スクレパー	安山岩	〈2.7〉	〈4.0〉	0.45	こ－10	半分を切損 刃部に微調整
54-62	石錐	玄武岩	〈4.1〉	2.9	1.2	B区 表採	先端を欠損
54-63	スクレパー	玄武岩	3.3	3.1	0.75	B区 表採	両面を剥離調整 刃部に使用痕
54-64	スクレパー	黒曜石	2.7	1.4	0.4	A区 第3地点	刃部に使用痕

剥片13点・縦長剥片8点・スクレパーの未成品5点・スクレパー4点・石錐2点、黒曜石製の貝殻状剥片4点、安山岩製の角礫3点・砕片1点・縦長剥片1点、チャート製の砕片1点・石鏃欠損品1点・石鏃未成品1点が出土している。

2）調査地B区

調査地B区からは、縄文時代早期末の土器（51—31）、前期の土器（51—26・29）、時期不明の土器（51—32）が出土している。石器では、玄武岩製の打製石斧（53—44）・サイドスクレパー（53—45）・スクレパー（53—50、54—60）、砂岩製の砥石（53—51）、玄武岩製の石錐（54—62）が出土している。B区全体でその他に、玄武岩製の石核4点・砕片4点・貝殻状剥片8点・横長剥片3点・縦長剥片2点・スクレパーの未成品1点・打製石斧の未成品1点、安山岩の角礫3点が出土している。

第V章　総括

茂内遺跡群茂内口遺跡から検出された遺構は、竪穴住居址３軒（平安時代）、掘立柱建物址３棟、土坑６基、特殊遺構１基、石器製造址（縄文時代）１カ所である。

遺物は、縄文土器・土師器・須恵器・石製品・鉄製品などが出土した。

また、対岸に所在する同遺跡群樽ケ沢遺跡では、合計６本の確認トレンチを設定し掘り下げたが、遺構・遺物ともに検出されなかった。

1　遺構

竪穴住居址は土器様相から３軒とも平安時代に位置付けられる。さらに土師器の坏の形態・甕の様相より所産期は10世紀代を当てることができそうである。カマドの構築状況は３軒とも共通しており、面取りをした石と、粘土・ロームの混合土によって構築される。なおH1号住居址のカマドは旧カマドが南東隅で、新カマドが北壁中央で、H2号住居址は東壁南よりで、Ｈ３号住居址は北壁中央で確認された。また、柱は、H2号住居址が不規則となっている他は４本が主柱として確認できる。またH3号住居址の３つの主柱穴で四角い掘り方が確認されたが、掘り込みは浅く、柱穴に伴うものとは考えられるが目的は判然としない。形態的な特徴では、H1号住居址が東側にベッド状のテラスを持ち、H3号住居址は北壁が大きく北へ張り出し、北壁中やや高い場所にテラスを持つ。そのためH3号住居址は北壁カマド西側を頂点とする、不整五角形となっている。

掘立柱建物址は３棟ともに平安時代が所産期と推定される。柱列は不規則であるが、柱痕の有無、遺物等より掘立柱建物址と認識した。

土坑は、D1号とD2号土坑が近現代の炭焼き時の掘り込みと考えられるが断定はできない。またD3号～D6号土坑は時期不明である。

特殊遺構は、覆土・形態等により平安時代の屋外炉と考えられる。

A区第３地点は、縄文時代早期を中心とした土器、多量の石核と剥片等が出土していることより、縄文時代早期と前期の石器製造址と考えられる。

2　遺物

平安時代の土師器と須恵器は主として３軒の住居址から出土している。器種は、土師器の甕・坏、須恵器の甕・壺・坏があり、その内、土師器の甕と坏、須恵器の坏について分類を行った。土師器の甕については次の８種類に分類した。口縁部が短く直線的に外傾し、内外面にハケ目調整が施されるもの（８－１）、口縁部が短く外反し、ロクロによって成形されたもの（15－１、

20—9)、口縁部が短く外反し、胴部外面にヘラケズリの施されるもの（20—2）、口縁が前者に比べ長く直線的に外傾するもの（20—1）、口縁部が短くロクロによって成形された小型のもの（20—3・4）、口縁部が短く内彎気味に外傾する小型のもの（20—6）、口縁部が短くミガキの施されるもの（20—13)、頸部が「コ」[註1]の字を呈するもの（20—10～12）である。20—1の甕は松本地区[註2]において、平安時代一般的に見られる甕で、当佐久地方においては周坊畑A遺跡出土の1個体のみである。土師器の坏は次の3種類に分類した。主として内面黒色で、高台が付されるもの（8—6、22—37～41)、体部がやや内彎気味（直線的）に外傾し、主として内面黒色のもの（8—7、21—20・25、22—27・32・34)、体部が内彎気味に外傾し、主として内面黒色のもの（21—22～24、22—26・28～30・33・35）である。15—3・21—19～25は墨書土器で、「十」の墨書は5点に認められる。なお21—24を除く全てのものに回転糸切りが行れる。須恵器の坏は次の3種類に分類した。口縁端部で外に折れ、高台の付されるもの（8—13・14)、体部は内彎して外傾し、口縁端部が直線的に外傾するもの(22—42・43)、体部と口辺部が直線的に外傾するもの(8—9・11）である。以上の特徴をもってこれらの土器群を平安時代中葉の10世紀代に位置付けたい。

縄文時代の遺物は、遺構確認面であるローム層上面（A区第V層上面・B区第3層上面）と遺構覆土内・表土内より出土した。A区[註3]では早期を中心とした遺物が出土し、B区では前期を中心とした遺物が出土している。土器については全てが破片であるため断定はできないが、主として深鉢・甕の破片と考えられる。石器はA区第3地区を中心に出土している。玄武岩[註4]は当地方では荒舟玄武岩と呼ばれ、香坂川上流の八風山で露出しており、本遺跡南の香坂川河原で容易に採取できる緻密で黒灰色の岩石である。加工は難しいが、割れ口は鋭くスクレパーには適する石といえよう。出土した剝片の多くは貝殻状剝片で、母岩から単純に打ち出されたものと、形を整えた母岩から打ち出されたものとがある。また石器加工段階で二次的に出た剝片は砕片として扱った。玄武岩の他に黒曜石・チャート・砂岩・泥岩・安山岩等も利用している。安山岩は本遺跡の東に所在する平尾富士産の輝石安山岩と考えられる。荒船玄武岩に比べ柔らかく、加工しやすいため、打製石斧によく使われる石である。また本書で硬質砂岩・泥質砂岩・泥岩として扱ったものは、正確には火山灰・火山砂が水中堆積した泥質凝灰岩と砂質凝灰岩である。この石は香坂・志賀・内山にかけて広がる兜岩層の堆積岩である。この層は淡水湖に火山灰・火山砂が堆積したもので、カエル（オタマジャクシ）・アブ・アリ等の化石を産する事で知られている。

註1　この甕は北関東と東信地方に分布する武蔵型甕である。

註2　松本市教育委員会　1986『島立南栗遺跡』　1984『下神・町神遺跡』　1987『島立北栗遺跡』

註3　縄文土器は長野県埋蔵文化財センターの近藤尚義氏の御教示を賜わった。

註4　佐久山地の地質と環境については白倉盛男氏の御教示を賜わった。

引用参考文献

佐久市教育委員会　1981　『舞台場遺跡』

〃　1983　『中村遺跡』

〃　1971　『儘田遺跡』

〃　1976　『三塚鶴田遺跡』

〃　1984　『上の台遺跡』

〃　1981　『五斗代B遺跡』

〃　1978　『上桜井北遺跡』

佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター　1987　『曲尾III遺跡他』

御代田町教育委員会　1985　『宮平遺跡』

〃　1985　『大沼遺跡』

松本市教育委員会　1987　『赤木山遺跡群II』

長門町教育委員会　1987　『長門町六反田II』

穂高町教育委員会　1987　『矢原遺跡群』

諏訪市教育委員会　1986　『大ダッショ』

川上村教育委員会　1983　『横尾』

茅野市教育委員会　1986　『高風呂遺跡』

高崎市教育委員会　1983　『当貝戸遺跡他』

埼玉県埋蔵文化財事業団　1984　『明花向他』

三重県教育委員会・三重県斎宮跡調査事務所　1981　『斎宮跡』

〃　〃　1984　『斎宮跡』

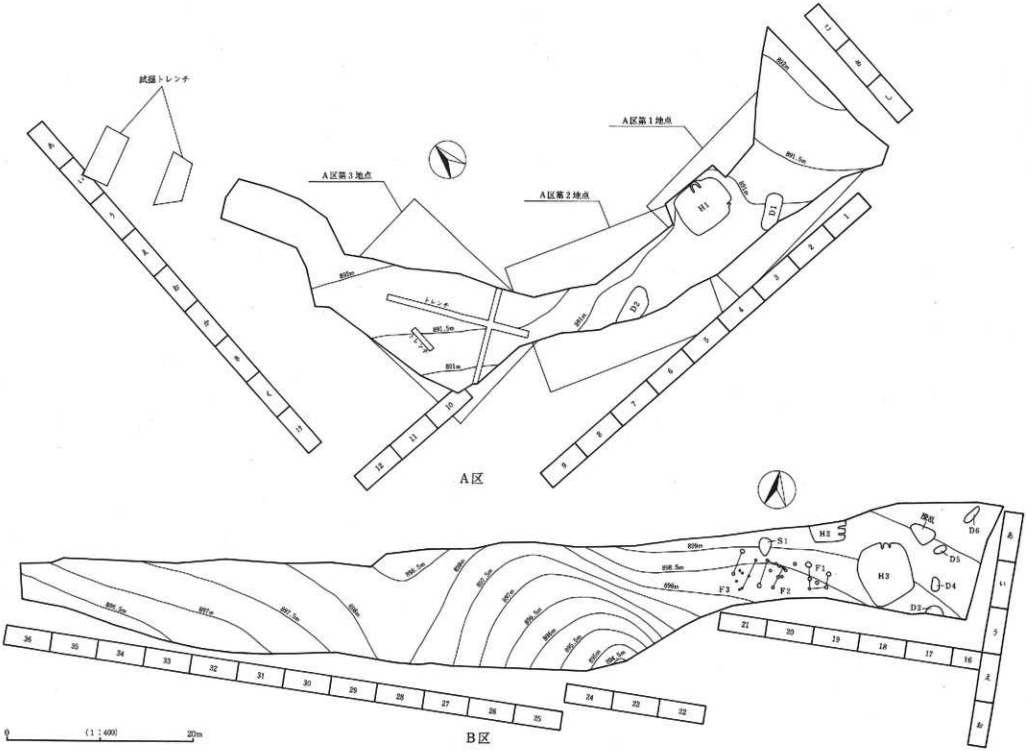
佐久町教育委員会　1987　『後平遺跡』

加藤晋平・小林達雄・藤本強　1983　『縄文文化の研究　7 道具と技術』　雄山閣

八幡一郎　1978（復刻）『北佐久郡の考古学的調査』　歴史図書社

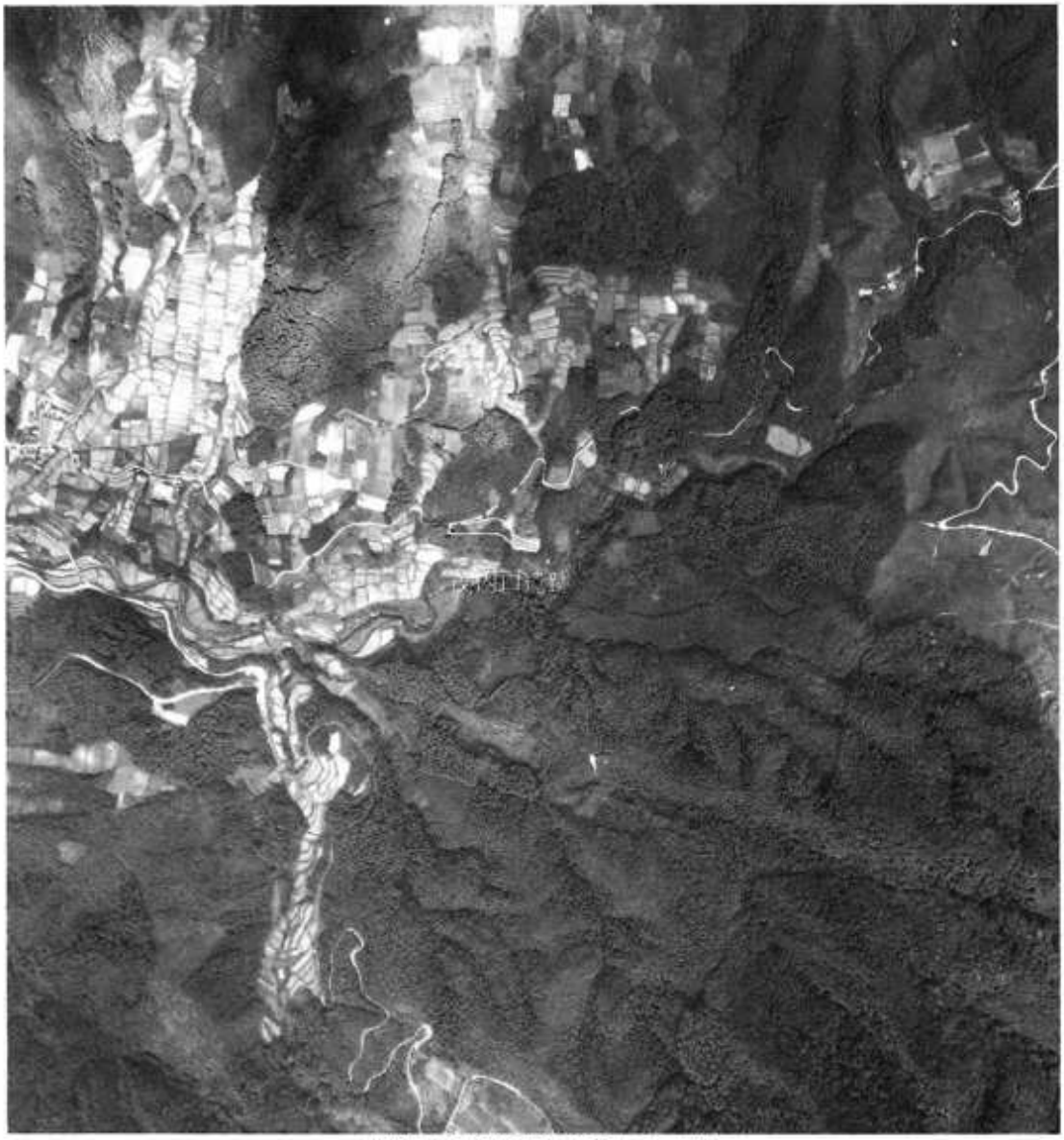
町田洋・新井房夫・森脇広　1986　『地層の知識』　東京美術

岸野村誌刊行会　1987　『岸野村誌』　他



第55図　茂内口遺跡全体図（1：400）

図版一



茂内遺跡群茂内Ⅰ遺跡航空写真（上が北）

茂内口遺跡全景　南より（手前が香坂川、奥が八風山）

茂内口遺跡全景　南より段丘を見上げる

H１号住居址（南より）

H１号住居址遺物出土状態（南より）

H１号住居址１号カマド（南より）

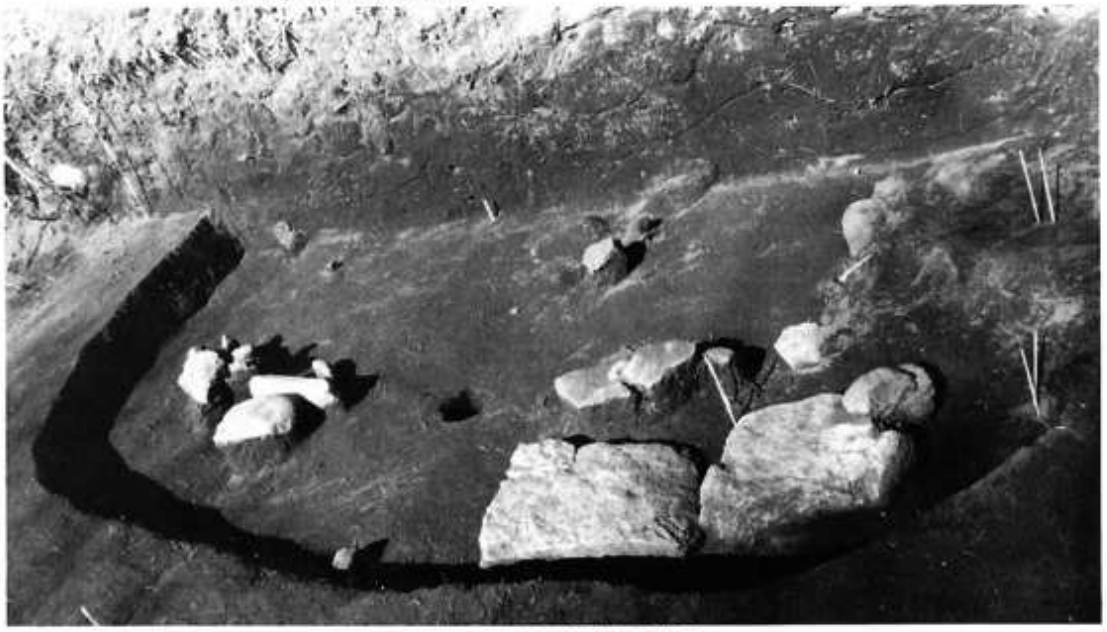
H１号住居址１号カマド（南より）

H１号住居址２号カマド（西より）

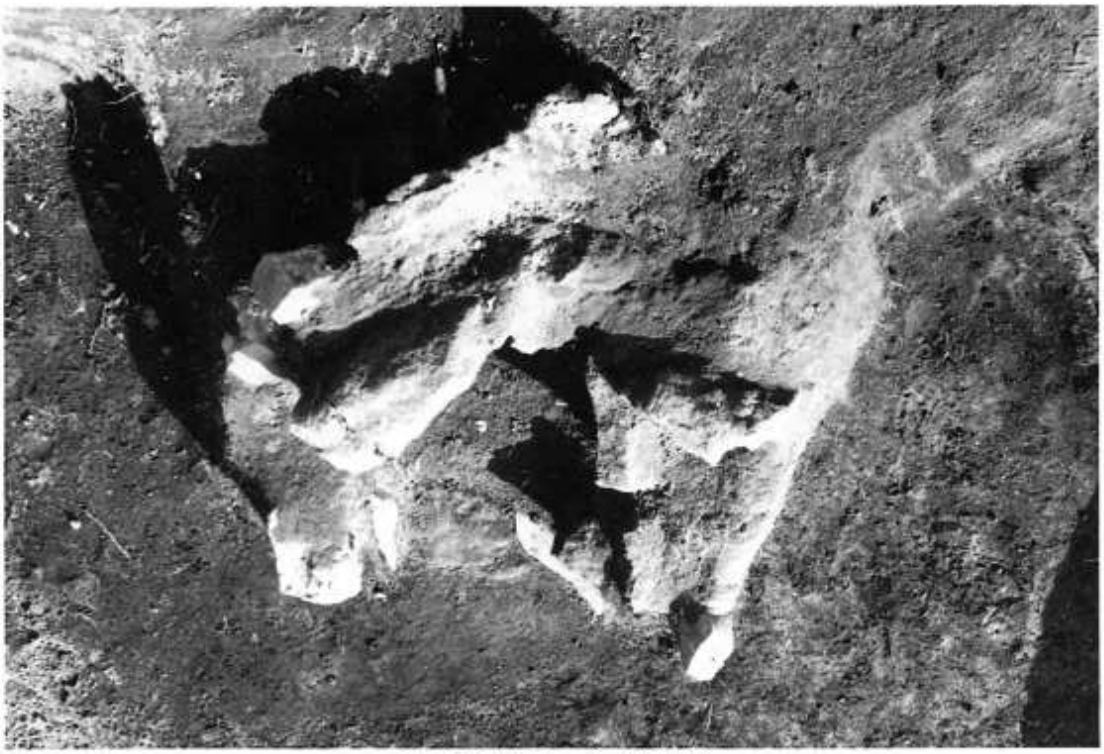
H２号住居址（西より）

H２号住居址砥石出土状態

発掘スナップ



H２号住居址遺物出土状態



H２号住居址カマド（西より）

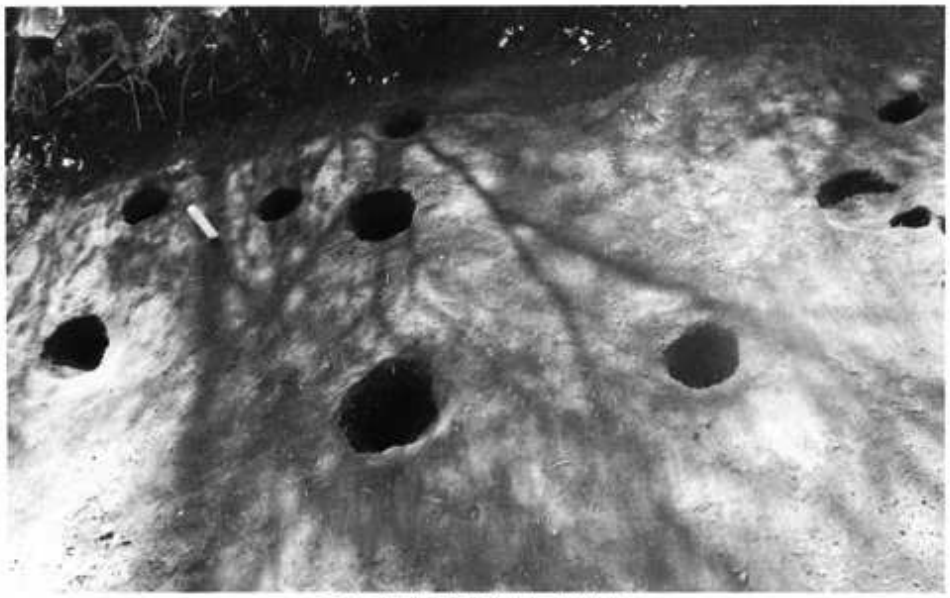
H２号住居址カマド（西より）

H３号住居址（南より）

H３号住居址遺物出土状態（東より）

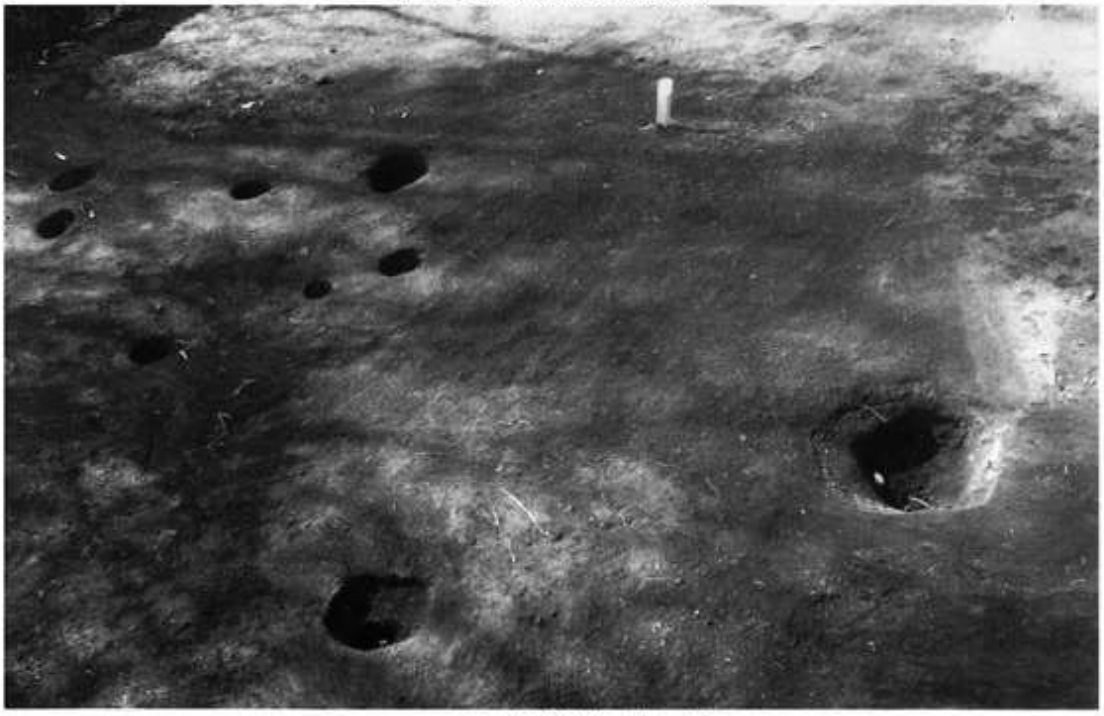
H３号住居址カマド（南より）

H３号住居址カマド掘り方（南より）



F１号掘立柱建物址（北より）

F 2 号掘立柱建物址（北より）

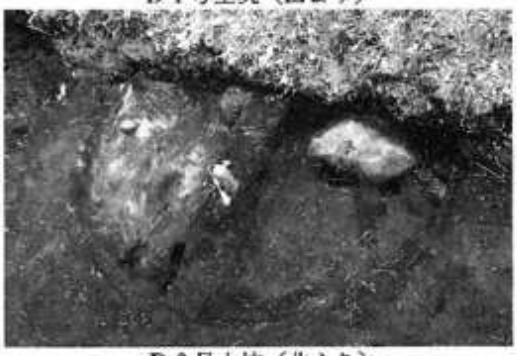


F 3 号掘立柱建物址（東より）

図版十

D１号土坑（西より）

D２号土坑（西より）

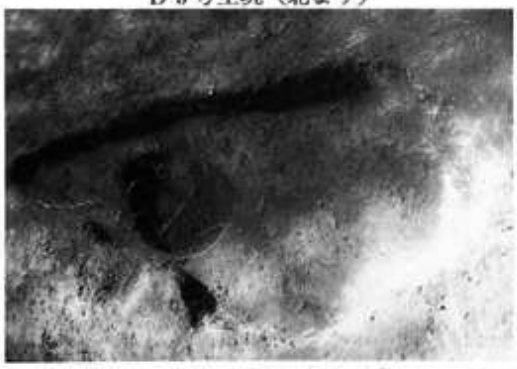


D３号土坑（北より）

D４号土坑（西より）

D５号土坑（北より）

D６号土坑（南より）



第１号特殊遺構（東より）

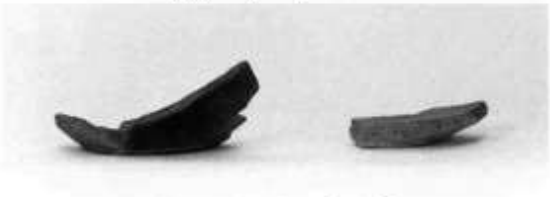
A区発掘風景（西より）

A区第3地点(縄文時代集中分布地)北より

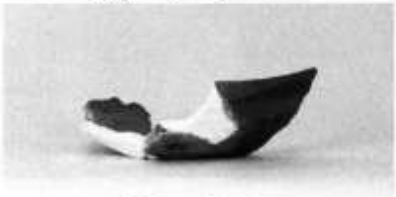
B区全景

H1　8－1

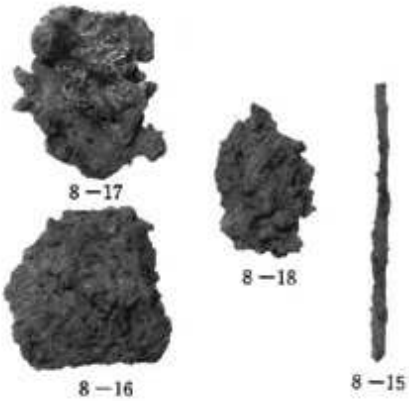
H1　8－2



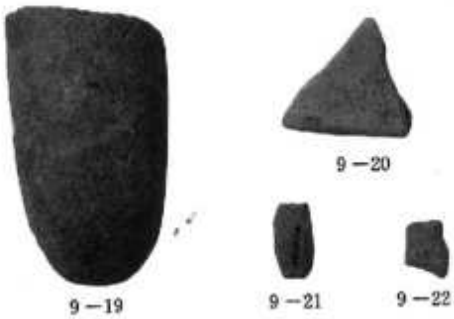
H1　8－6，8－10



H1　8－9



H1

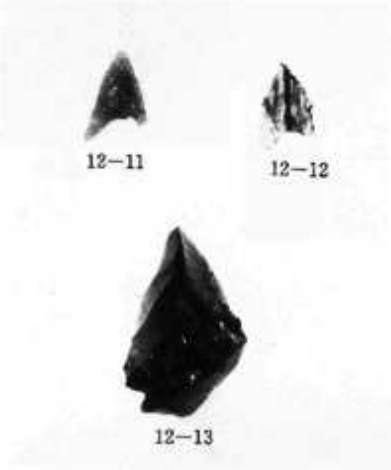


H1

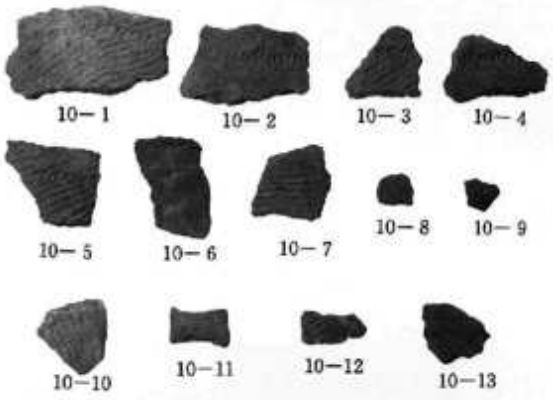
H 1　8－3

H 1　8－13

H 1　8－14



H 1



H 1

H 1

H 2　15－1

H 2　15－2

H 2　15－3

H 2　大型砥石（1：4）　16－4

H 2　16－5（1：4）

H 2
16－6

H 2
17－7　17－8

H 3　20－6

H 3　20－3

H 3　21－18

H 3　21－16

H 3　20－2

H 3　20−15

H 3　22−39, 22−38

H 3　22−37, 22−31

H 3　20−7, 22−30

H 3　20−1

H 3　22−40, 22−42

H 3　22−43

H 3　22−27

H 3　21−15

H 3　21−23

H 3　21−22

H 3　21−25

H 3　21−23

H 3　21−22

H 3　21－24

H 3　21－20

H 3　22－26

H 3　21－24

H 3　21－21

H 3　21－19

H 3
27－55

H 3　24－56（1：4）

H 3　20－14

H 3　22－35

H 3　27－45，27－46，27－47

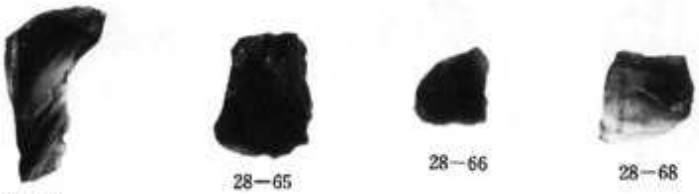
H 3　22－28

H 3　22－29

図版 十六

28−59　28−60　28−61　28−62　28−63

H 3



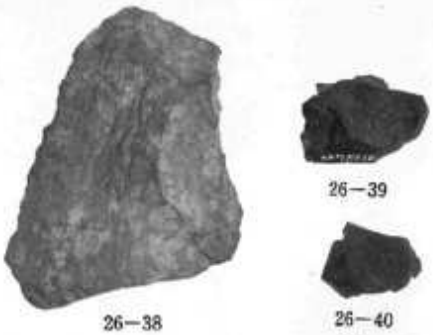
28−64　28−65　28−66　28−68

28−67　28−69　28−70

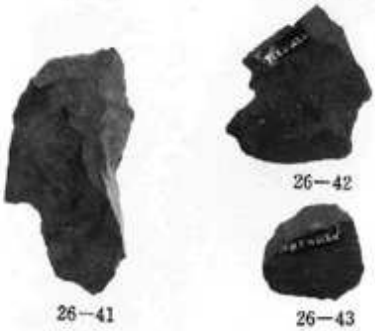
23−48　23−49　23−50　23−51

23−52　23−53　23−54

H 3



26−38　26−39　26−40



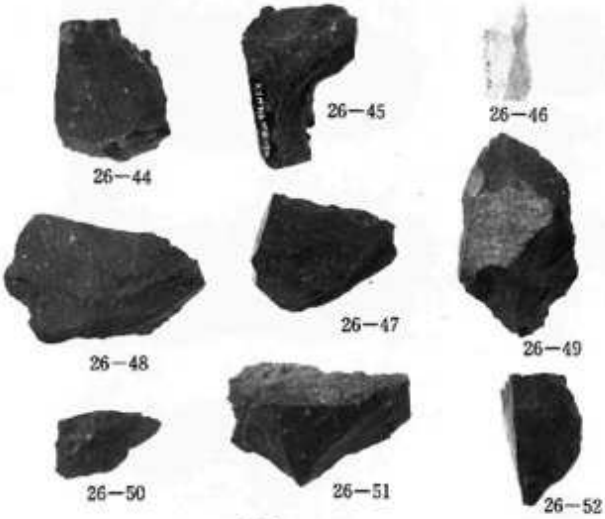
26−41　26−42　26−43

H 3

27−53　27−54　27−55

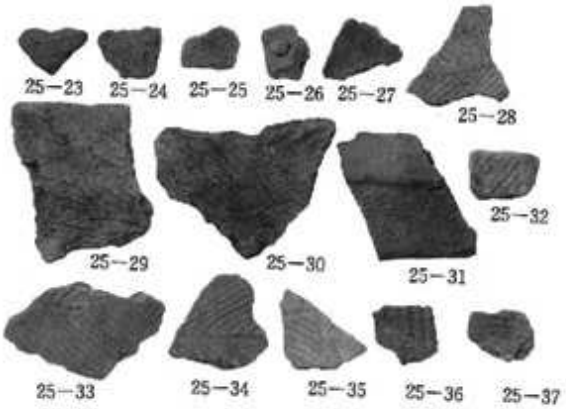
27−56　27−57　27−58

H 3



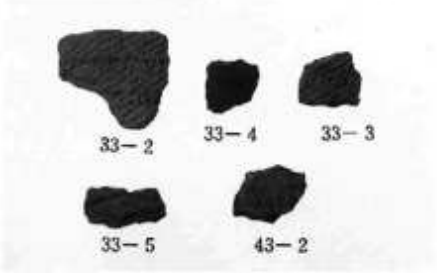
H 3

H 3

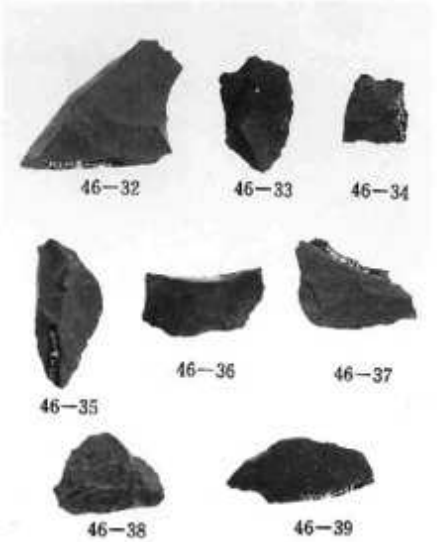


H 3

掘立柱建物址・土坑

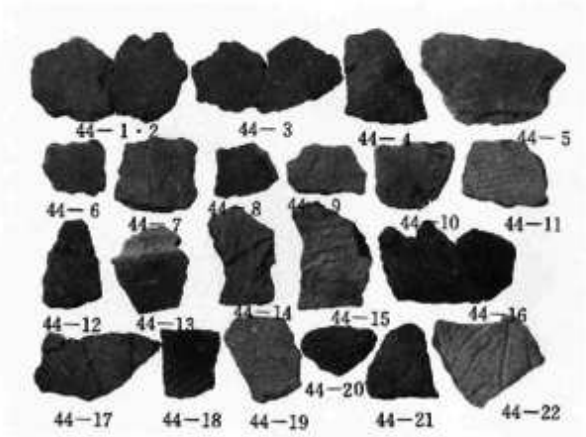


土坑・特殊遺構

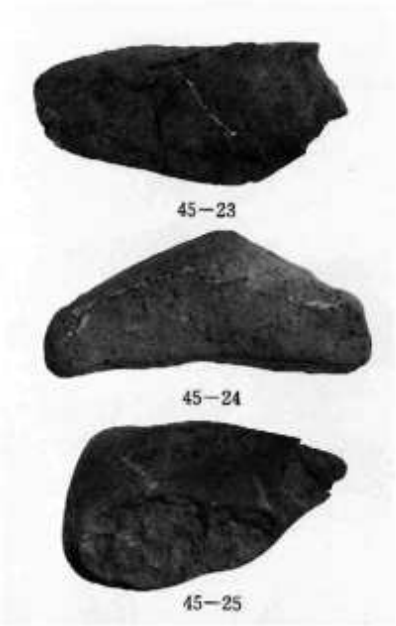


A区集中分布地区

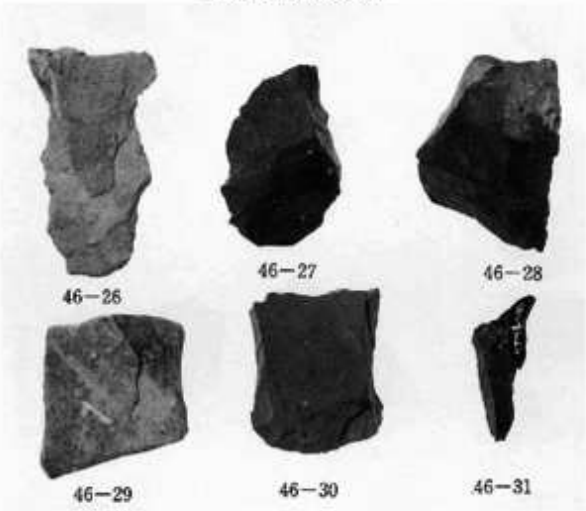
B区発掘風景



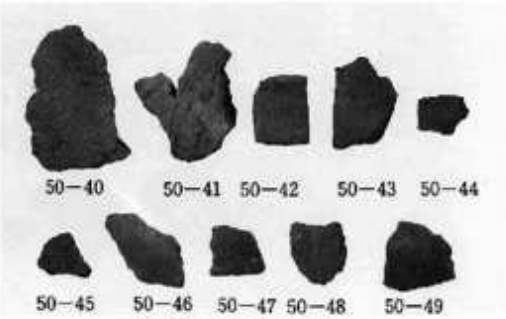
A区集中分布地区



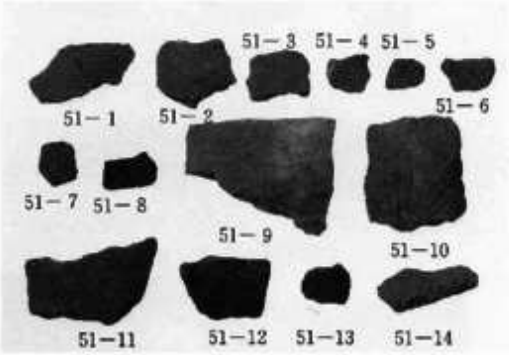
A区集中分布地区



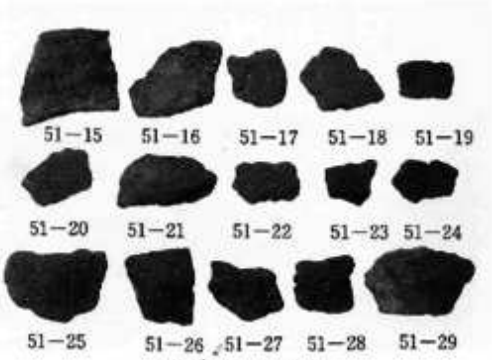
A区集中分布地区



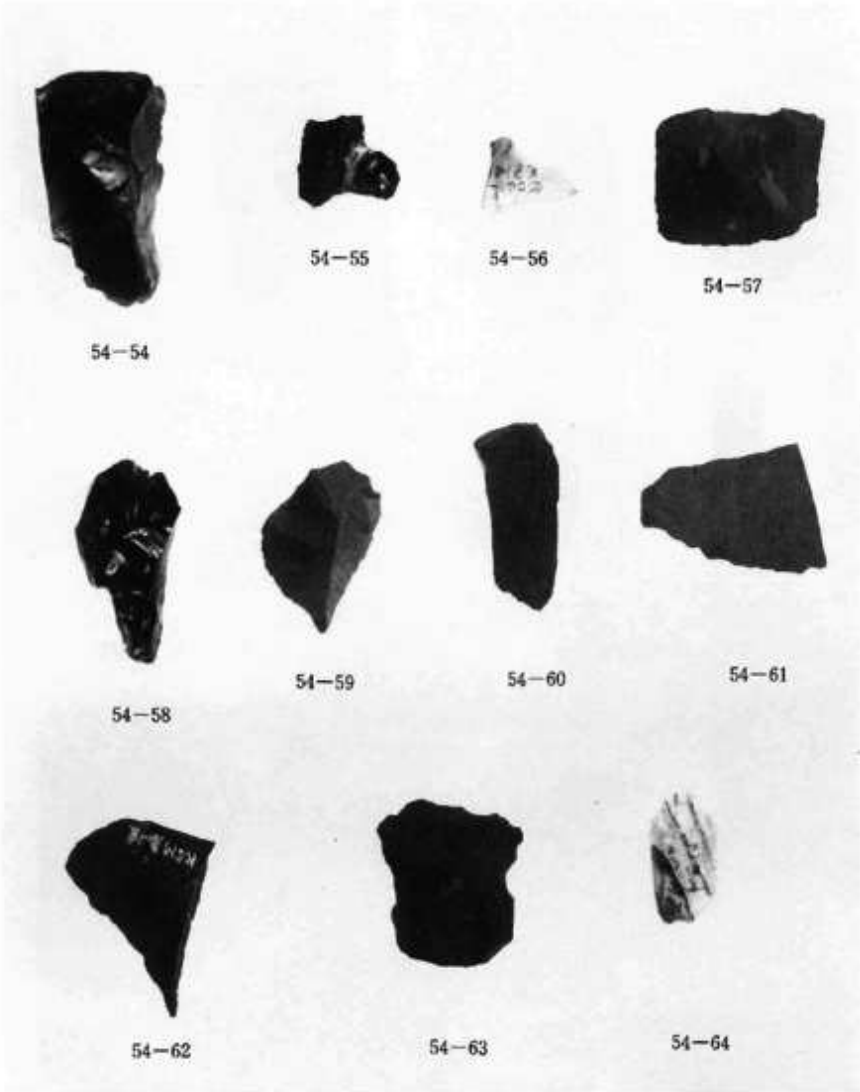
A区第3地点トレンチ



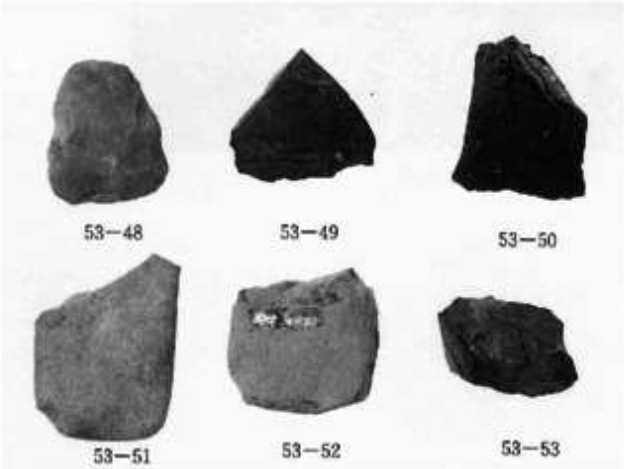
グリッド・表採



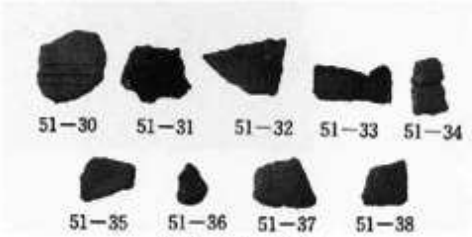
グリッド・表採



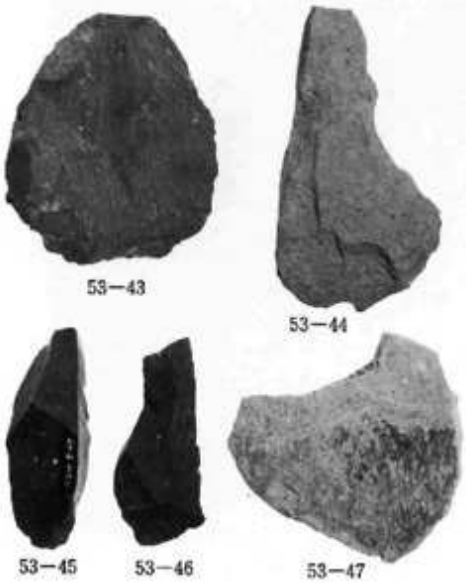
グリッド・表採



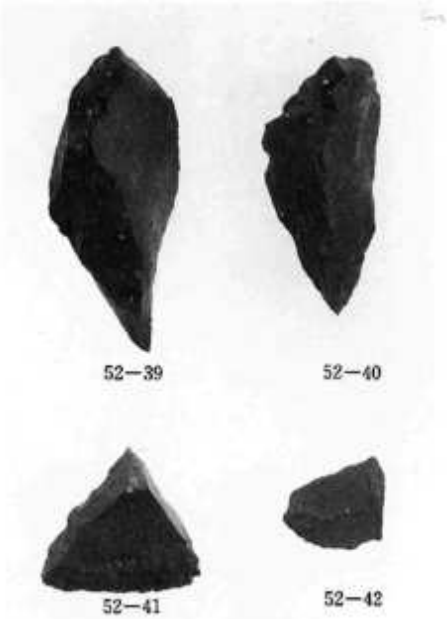
グリッド・表採



グリット・表採



グリット・表採



グリット・表採

H 3 号住居址掘り下げ風景

茂内遺跡群
茂内口遺跡

長野県佐久市平坂茂内口遺跡発掘調査報告書
昭和63年3月

編集者　茂内口遺跡発掘調査団
発行者　佐久市教育委員会
佐久市大字中込3056
電話0267－62－2111㈹
印刷所　㈱佐久印刷所